

日本写真家協会会報

NO.178
(2022. Sep.)

- 追悼特集 田沼武能氏を偲ぶ
- 第 47 回 2022JPS 展入賞作品紹介
- JPS2022 年新入会員展「私の仕事」

JPS



Photo Tomatsu Tomoichi

ヨドバシ・ドット・コム 映像制作機材 専門ストア開設しました



プロ機材を豊富に品揃え
ぜひご利用くださいませ



新規会員
募集中 日本写真家協会 会員様専用の
ゴールドポイントカード

12%ポイント還元

※現金・テビットでのお支払時。一部対象外商品ございます。



専門知識豊富な販売員が親切丁寧にご案内いたします!

ヨドバシカメラ

www.yodobashi.com

新宿西口本店
〒160-0023
新宿区西新宿1-11-1
☎ 03(3346)1010

マルチメディア 新宿東口
〒160-0022
新宿区新宿3-2-6-7
☎ 03(3356)1010

マルチメディア Akiba
〒101-0028
千代田区神田花岡町1-1
☎ 03(5209)1010

マルチメディア 錦糸町
〒130-8580(駅ビルテルミナ1-2-3階)
墨田区江東橋3-14-5
☎ 03(3632)1010

マルチメディア 上野
〒110-0005
台東区上野4-10-10
☎ 03(3837)1010

マルチメディア 町田
〒194-0013
町田市原町田1-1-11
☎ 042(721)1010

八王子店
〒192-0082
八王子市東町7-4
☎ 042(643)1010

マルチメディア 吉祥寺
〒180-0004
武蔵野市吉祥寺本町1-19-1
☎ 0422(29)1010

マルチメディア さいたま新都心駅前店
〒330-0843
さいたま市大宮区吉敷町4-263-6
☎ 048(645)1010

マルチメディア 川崎ルフロ
〒210-0024
川崎市川崎区日進町1-11
☎ 044(223)1010

アウトレット京急川崎
〒210-0007
川崎市川崎区駅前本町21-12
☎ 044(221)1010

マルチメディア 横浜
〒220-0004
横浜市西区北幸1-2-7
☎ 045(313)1010

マルチメディア 京急上大岡
〒233-0002(京急百貨店1-8-9階)
横浜市港南区上大岡西1-6-1
☎ 045(845)1010

千葉店
〒260-0015
千葉市中央区富士見2-3-1
☎ 043(224)1010

マルチメディア 新潟駅前店
〒950-0901
新潟市中央区弁天1-2-6
☎ 025(249)1010

マルチメディア 宇都宮
〒321-0964(トナリエ6-7-8階)
栃木県宇都宮市駅前通り1-4-6
☎ 028(616)1010

マルチメディア 甲府
〒400-0031
山梨県甲府市丸の内1-3-3
☎ 055(230)1010

マルチメディア 郡山
〒963-8002
福島県郡山市駅前1-16-7
☎ 024(931)1010

マルチメディア 仙台
〒983-0852
宮城県仙台市宮城野区榴岡1-2-13
☎ 022(295)1010

マルチメディア 札幌
〒060-0806
北海道札幌市北区北六条西5-1-22
☎ 011(707)1010

マルチメディア 名古屋松坂屋店
〒460-8430(松坂屋名古屋店4-5階)
愛知県名古屋市中区栄3-16-1
☎ 052(265)1010

マルチメディア 梅田
〒530-0011
大阪府大阪市北区大深町1-1
☎ 06(4802)1010

マルチメディア 京都
〒600-8216
京都府京都市下京区東堀小路町590-2
☎ 075(351)1010

マルチメディア 博多
〒812-0012
福岡県福岡市博多区博多駅前中央街6-12
☎ 092(471)1010

ヨドバシカメラの
インターネットショッピング
www.yodobashi.com
ケータイでいつでもどこでも簡単ショッピング!
<http://m.yodobashi.com>

SIGMA

もっと自由に、軽快に
超広角ズームのあたらしいかたち

C Contemporary **16-28mm F2.8 DG DN**

ミラーレス専用 | フルサイズ対応

希望小売価格(税込): 140,800円 花形フード(LH756-01)付
対応マウント: Lマウント用、ソニー Eマウント用
*Lマウントはライカカメラ社の登録商標です。



シグマの新しいプロダクト・ラインについては、こちらへ。
sigma-global.com

■ Gallery	JPS ギャラリー 烏里烏沙、森住 卓、高橋宣之、山本純一 …………… 5 鈴木一雄、紀 善久
■ First Message	田沼武能名誉会長ご逝去にあたって …………… 野町和嘉 11
■ Zooming	写真の散歩道(連載5) …………… 鳥原 学 12 田沼武能が買いた“写真の価値”
■ Workshop	著作権研究(連載53) …………… 著作権委員会 14 スマホが変えた「リアル」の定義と肖像権意識 ～[素顔]を撮られたくない若者たち～
■ Telescope	追悼特集 公益社団法人日本写真家協会名誉会長 田沼武能氏を偲ぶ …… 16 故人ゆかりの関係者、関係団体からの寄稿
■ Award	「笹本恒子写真賞」第5回受賞者決定!! 西野嘉憲さん …………… 35
■ Exhibition	第47回 2022JPS 展入賞作品紹介 …………… 36
■ New Face Gallery	JPS2022年 新入会員展「私の仕事」 …………… 40
■ Exhibition	2022JPS 展報告 …………… 42
■ General Meeting	2022(令和4)年度第23回定時会員総会報告 …………… 45
■ Archives	「日本写真保存センター」調査活動報告(37) …… 写真保存センター委員会 46 —2022年度上半期の活動まとめ—
■ Topics	賛助会員トピックス …………… 48
■ Message	Message Board 特集「田沼武能名誉会員を偲んで」 …………… 50
■ Report	セミナー研究会レポート …………… 54 2022年度第1回技術研究会報告 デジタルで撮るシュールな赤外線写真の世界、 国際交流委員会ウェブサイト企画「表現者たち」Vol.8～10
■ Books	JPS ブックレビュー …………… 56
■ Information	追悼 = 名誉会員・竹内敏信、白川義員、名誉会長・田沼武能、…………… 59 正会員・山村隆彦、奥村正光、和木光二郎 ／経過報告／編集後記
■ Comment	写真解説 …………… 62
■ Education	2021年度小学生を対象とした「写真学習プログラム」報告 …………… 68
■ Report	「おやこ写真教室」開催 …………… 教育推進委員会 70
■ Congratulations	おめでとうございます 第48回「日本写真家協会賞」受賞 …………… 71 「株式会社ケンコー・トキナー」社長・山中 徹さん
■ Gallery	X ギャラリー 菊池一郎、田口郁明、安念余志子 …………… 72 表紙・東松友一、表4・田村拓也

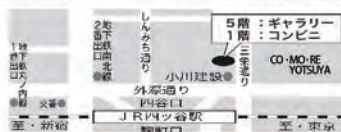
広告
案内

- (株)ヨドバシカメラ
- (株)シグマ
- ポートレートギャラリー
- (株)堀内カラー
- キヤノンマーケティングジャパン(株)
- (株)タムロン
- リコーイメージング(株)
- (一社)日本写真著作権協会(JPCA)
- 富士フイルム(株)

〈写真文化の発信基地〉みなさまの作品発表の場としてご利用下さい。



ポートレートギャラリーは、全国の写真館やスタジオからなる一般社団法人日本写真文化協会により、写真文化の普及、振興、そして育成を目的に運営されています。



— 人に出会い、自然に触れる —
ポートレートギャラリー

■ JR四ツ谷駅・四ツ谷口 徒歩3分 ■ 地下鉄丸ノ内線1番出口 徒歩5分
■ 地下鉄南北線2番出口 徒歩3分

一般社団法人 日本写真文化協会

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-7-12 日本写真会館5階
TEL: 03-3351-3002 FAX: 03-3353-3315
URL <https://www.sha-bunkyo.or.jp>



瀘沽湖畔の彝族少女花花——烏里烏沙
写真集『忘れられたところ 三江並流及び周辺地域に生きる』

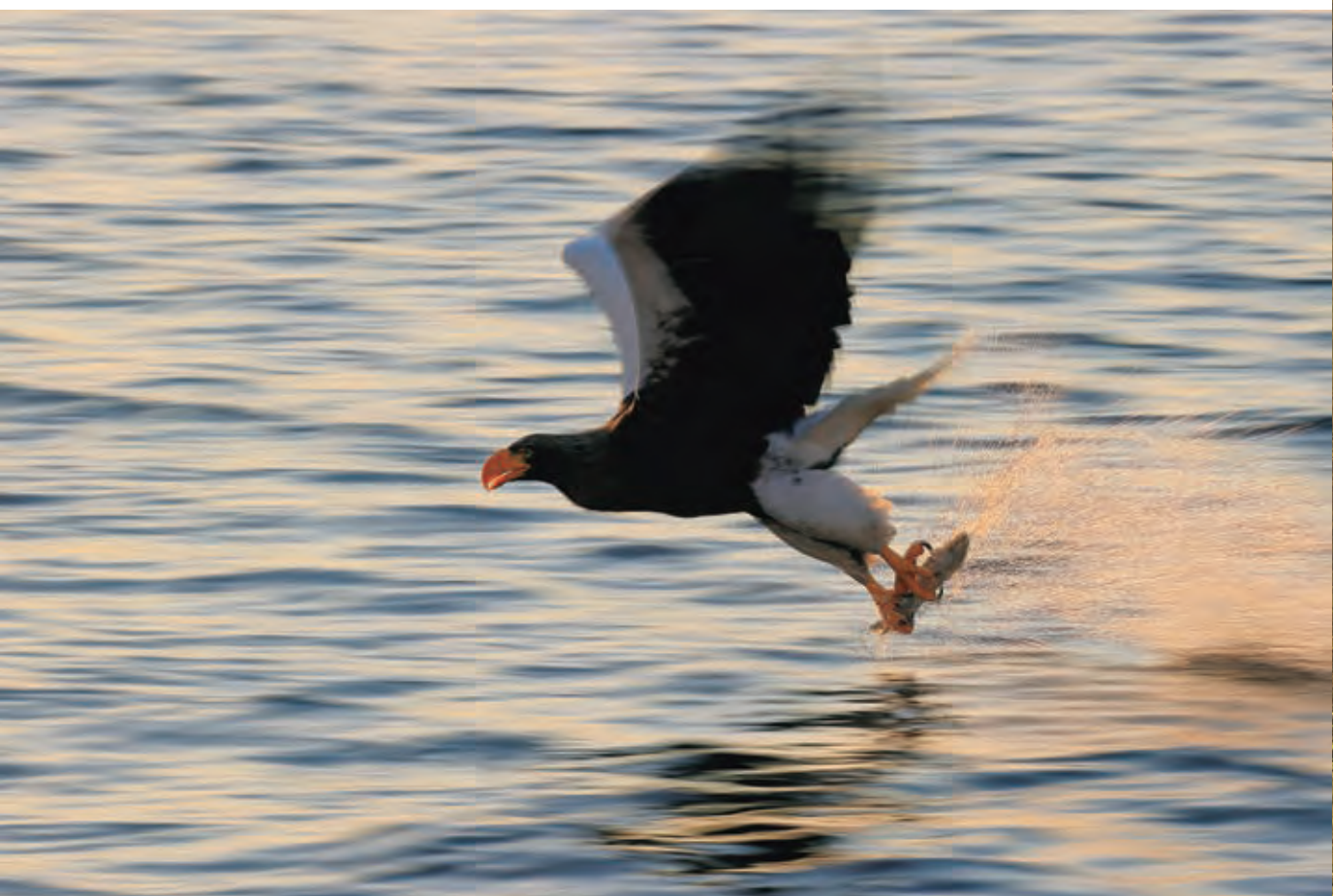


浪江町津島—けもの物語——森住 卓
写真集『浪江町津島—風下の村の人びと』



池川神楽——高橋宣之

写真集・写真展「神々の水系」



生命の連鎖———山本純一
写真集・写真展「カムイの生命—鼓動する野性」



黄金の森———鈴木一雄

写真集・写真展「聲をきく Listening to the Spirits in the Wild」



太陽の軌跡——紀 善久
写真展「太陽の軌跡」

田沼武能名誉会長ご逝去にあたって

会長 野町 和嘉

6月1日、午後4時過ぎのことだった。電話が鳴り受話器を取ると、唐突に「田沼です。とうちゃんが亡くなりました！」と告げられた。夫人の敦子さんの声だった。あまりの突然の事態にただ絶句するしかなかった。外出から戻ってみるとリビングで倒れていたという。すぐに伺いましょうかと聞くと、御遺体は警察が引き取っていったという。事件性など一通りの検証らしい。田沼夫妻は互いを「とうちゃん」「かあちゃん」と呼び合っており、家が近く近所づきあいをしていただいていたこともあり、年齢差のある御夫妻の互いの親密な呼びかけは私たちにも馴染んでいた。

享年94であった。写真界の誰もが知るとおり、知的好奇心の衰えを知らぬ方だった。急逝したその日朝方にも知人の編集者に電話をして、名取洋之助と岩波写真文庫のつながりについて情報を訊いていたという。また、友人たちのサポートを得て、ライフワークである「武蔵野」の撮影に最近までしばしば未明から出かけていたというし、長年にわたって黒柳徹子さんに同行するユニセフの海外取材を今年秋にも予定しており、生涯現役をこれほど見事に実践していた写真家も他にはいなかった。どこに行くにも重いカメラバックを常に持ち歩き、写真家として臨戦態勢を保ち続けていた。

こんなこともあった。2019年のラグビー・ワールドカップ開幕戦に関係企業からのご招待で、田沼さんと隣り合って観客席から撮影をした。ラグビー観戦ならではの雰囲気、手渡されたビールグラスを傾けつつ、半ば物見遊山気分の撮影だったが、隣の田沼さんとはいうと、望遠ズーム付きのカメラで狙いをつけ傍目も振らず撮影に没頭しているのではないかと。ラグビーの撮影など経験がないはずだが、ひたむきなその姿に、“ビールを飲んでいる場合じゃないな”と衿を正したことだった。

ご承知の通り田沼さんは、1995年から2015年まで実に20年間にわたって会長としてJPSを牽引してき

た。初代JPS会長木村伊兵衛氏の弟子であり創立会員の一人でもあった田沼さんにとって、JPSは写真界の中軸として牽引して行く立場にあることを常に肝に銘じておられた。さらにJPCA(日本写真著作権協会)そして全日本写真連盟の会長でもあり、文字通り日本の写真界全般を視野に収めて行動していた。

写真著作権の確立、内閣府による公益社団法人への移行認定、そして周年ごとの記念展と写真集編纂、さらには「いまは写せても、過去は写せない。」を掲げ、時代を記録した写真原板の保存管理、活用を唱えた日本写真保存センターの設立など、田沼会長の信念に貫かれたリーダーシップなしでは実現できなかった活動は枚挙にいとまがない。会長在任の20年間は、会員数も増えてJPSの全盛時代を、田沼会長の智恵と指導で乗り切ってきたことには違いない。

実は私自身は、会長現役時代の田沼さんをさほど身近に見てきたわけではなかった。昔から長期の海外取材が多かった私にとって、JPSの活動とは距離もあった。田沼さんからの度重なる誘いもあって私が理事に加わることになった2017年の時点では、田沼さんは会長を退き一理事として目付役の立場であった。ある時の理事会で、協会が2年続けて赤字決算に陥るといふ不都合を起こしてしまった折りに、強い言葉で理事たちを叱責し目を覚まさせられたことも忘れられない。

亡くなるひと月ほど前、圧迫骨折により外出を控えていた田沼さんを見舞いがてら訪問した。コルセットを装着してはいたが、以前と変わらぬ姿で相変わらず饒舌だった。協会のことなど雑談を交わし、話題が写真保存センターの運営が難関に差しかかっており、苦慮していることに触れると、写真を巡る環境が発足当初とは想定外の方向に変わってしまったことを、深く嘆いておられたことが強く記憶に残る。

ここに協会を代表して、心よりの感謝と哀悼の意を捧げます。

奇しくも命日である6月1日は「写真の日」であった。

田沼武能が貫いた“写真の価値”

鳥原 学 (写真評論家)

Toriyama Manabu

◎写真家の原点

田沼武能さんの写真家としてのキャリアは73年に及ぶ。1949年に東京写真専門学校(現:東京工芸大学)を卒業してから、亡くなるその日まで、文字通りの現役を通された。そのうえ著作権問題を始めとする様々な問題に、写真界のリーダーとして取り組まれた。

残念ながら、そんな大先達から私が話を聞いた機会は数回程度しかなかった。ただ、そのなかでも「写真の価値は記録にある。過去の時代は絶対に撮ることはできない」と明快に述べられたことは、深く印象に残っている。一人の写真家としての信念に留まらず、写真界全体が守っていくべき基本として考えられていたのだと思う。

田沼さんの原点にあったのは、約十万人の死者を出した、1945年の東京大空襲だった。この時、16歳の田沼少年は実家の写真館を失いながらも、奇跡的に生き延びることができた。しかし、余りにも多くの悲惨な死を目の当たりにしてしまった。なかでも胸に突き刺さったのが、防火用水槽のなかで亡くなった幼児の姿で、それはまるで「お地藏様」のように見えた。この記憶が、後の仕事に強い影響を与えたのだと田沼さんは振り返っている。

「そんな虚しい戦争の体験が、後にドキュメンタリー写真家に向かわせたのかもしれない。そして、防火用水のお地藏さまが、子どもの写真を撮り続ける世界に私を導いてくれたように思われてならない。」(『真像残像—ぼくの写真人生』2008年 東京新聞出版局)

とはいえ当時の田沼さんは、写真家になるつもりはなかった。家業よりも日本建築に関心が向いていた。そこで早稲田の理工科を受験したが、結果は不合格。学科の成績ではなく、内申点が悪かったからだと本人は述懐している。軍事教練の教官の理不尽さに我慢できず、抗議したことが仇になったのだと。

そこで1946年に東京写真工業専門学校(現:東京工芸大学)へと進み、報道写真家を目指した。だが、敗戦直後の混乱期のことであり、授業では「採光法をやったのが関の山」(『アサヒカメラ』1953年3月号)だった。しかも食うために幾つものアルバイトを掛け持ちしなければならぬ。それでも、ユージン・

スミスを始めとする『LIFE』の写真家たちの仕事に刺激を受け、やがて写真に本腰を入れていく。

そして1949年に卒業すると「サン・ニュースフォトス」に入社、暗室に配属された。2年前には、名取洋之助の企画・編集で日本の『LIFE』を目指した『週刊サンニュース』を発刊

した会社だったが、この時にはすでに休刊していた。会社の資金繰りは苦しく、新人暗室マンの給料さえ支払われない。だが、ここで得たものは大きかった。生涯の師である木村伊兵衛さんと出会ったのだった。

◎師の教えを肝に銘じて

入社して半年、田沼さんは暗室から木村さんのいるフィーチャー部門に移る。同じ下町育ちということもあって親しくなると、アシスタントを志願した。最初は断られたが、なにかにつけて撮影に同行するうちに師弟関係が築かれていった。

もちろん木村さんからの影響は大きい。「ライカ使いの名人」の撮影を間近で見ると、田沼さんも生活を切り詰めてライカⅢCを買って撮影を始めた。だが、そんな弟子に向かって師は「おれの真似をしても、おれ以上にうまくはならない」と言い放った。

言葉の意味を実感したのは1951年、帝劇での舞台『どん底』の撮影だった。2人はともに同じライカを使い、俳優の細川ちか子が熱演するもようを撮影した。しかし、見比べて見ると明らかに負けている。

「木村伊兵衛の写真には「どん底」が写っているのに、僕の写真は「どん底」じゃない。単にその場面の複写なんですよ。」(『日本の写真家 29 田沼武能』1998年 岩波書店)

これはかなわない、もっと勉強しなければならない。



武蔵野にて 2012年 提供: 田沼武能

力量の差を実感した田沼さんは、そう自分を戒めた。もう一つ、胸に突き刺った師の言葉がある。それは助手から独立して数年後、『芸術新潮』や『新潮』の仕事を手切りに、田沼さんが第一線の売れっ子カメラマンとして活躍するようになってからのこと。戦後復興から高度経済成長へと時代は変わり、雑誌の創刊ラッシュがあって写真の需要が急速に増大していた。田沼さんにも注文が殺到した。寝る間を惜しんでそれをこなす一方、稼ぎがある分、遊びにも熱を上げるようになっていた。そんな状態を見かねた木村さんが、田沼さんを諭したのだ。

「いつまでもそんなことをしていたら、お前はマスコミにつぶされてしまうぞ。今はお前を時代の寵児としてもてはやしているが、チューイングガムと同じだ。やがて味がなくなれば、ぼいと捨てられる。」(『真像残像—ぼくの写真人生』前掲)

続けて木村は「お前には自分の作品がないじゃねえか」と畳み込んだ。田沼さんは、ぐうの音も出なかった。とはいえ、直ぐに生活を変えられるものではない。

「作家として生き残り、作品を世に残すためには、自分にしか撮れない写真を撮らなくてはならない。私は真剣に自分がどんな写真家になりたいのか日夜、考え続けた」(同上)

迷いながらも、田沼さんには指針があった。それは1955年にニューヨーク近代美術館が企画し、翌年には日本に巡回した「ザ・ファミリー・オブ・マン」展である。世界中の写真家から集められた写真によって、人間の普遍的な営みを表現した壮大な展示は、ヒューマンイズムの理想を高らかに謳っていた。田沼さんは何度も足を運び、その度に心から感動し、写真とはこうあるべきであるとの確信を固めた。

しかも、田沼さん自身の作品も3点展示されていた。いずれも、東京の下町の子どもを撮ったものだった。後のライフワークの種がそこに芽吹いていた。

◎田沼さんの「ザ・ファミリー・オブ・チルドレン」

1965年、田沼さんは『LIFE』と契約した。発行元のタイム・ライフ社とは単発の仕事をしたことがあり、その実績が認められてのことだった。契約金ももちろん高く、自分の写真に割ける時間的な余裕ができる。ベトナム戦争が激しさを増していた当時、契約の席で戦地を取材すれば知名度もギャラもさらに上がると言われたが、これは断った。空襲から生き延びられた命を、他国の戦争で失うわけにはいかない。自分には為すべきことがあるのだ。

本格的なライフワークとして、子どもを撮ることを決意したのもこの年だった。パリにあるタイム・ライフ社のヨーロッパ総局を訪ねたさい、思い立って、日曜日の朝にブローニューの森を訪れてみた。公園ではピクニックにやってきた子どもたちが、緑のなかを夢中で走り回っている。田沼さんはその姿にレンズを向け、シャッターを切り続けたという。その心境を次の

ように述べている。

「その時、私は忘れていた子どもの心を思い出したに違いない。一子どもには大人の世界にない無限の可能性、生命の美しさがある」(『私の写真人生 第27回』『フォトアサヒ』2018年7月号)

田沼さんは世界中を回り、子どもを撮影することを決めた。「ザ・ファミリー・オブ・マン」ならぬ「ザ・ファミリー・オブ・チルドレン」を構想し、取り掛かったのだ。とはいえ、その撮影は予想ほど簡単ではなかった。当初は仕事の合間に写せればと考えていたが、現地の事情に応じて、十分な準備と時間が必要だと分かってきた。また撮り進めるにつれて飢餓、貧困、戦争など、子どもたちが置かれた困難な状況が見えてきた。それは、やはり空襲の体験と重なるものだった。

そんな田沼さんだから、1984年に旧知の黒柳徹子さんがユニセフの親善大使に任命されタンザニアに派遣されることが決まると、手弁当で参加することを申し入れたのだ。そして以降の37年間で、2人は約40か国を訪れた。この名コンビが、どれだけの日本人を、外国の恵まれない子どもたちに目を向けさせたことだろう。

黒柳さんにとっても、田沼さんの写真は必要不可欠なものだったという。現地では子どもたちとの接触到に忙しく、落ち着いて周囲を見回す余裕がない。日本に戻り田沼さんの写真を見て、やっと行った場所のことを理解するのだと書いている。

「私は思わず涙が出ます。子どもたちの前では涙は出ませんが、田沼さんの写真を見て泣くのです。なんて子どもは、けがれなく、美しいだろう！そう思うからです。」(『トットちゃんと訪ねた子どもたち』2021年 岩波書店)

「写真の価値は記録にある」と田沼さんは繰り返し語った。それはきっと、こういうことなのだと思う。的確に写された写真は、その場では気づかなかったものを後で教えてくれるのだ。田沼さんが73年の間に撮られた膨大な写真は、私たちにとっても、これからの世代にとっても重要な証言として生き続けるはずである。



『フォトエッセイ トットちゃんと訪ねた子どもたち』(岩波ブックス)より

スマホが変えた「リアル」の定義と肖像権意識 ～「素颜」を撮られたくない若者たち～

佐々木広人 (株式会社キュービック エディトリアルデスク セネラルマネージャー/元『アサヒカメラ』編集長)

写真がデジタル化され、一般の人たちの写真に対する意識が大きく変容しています。著作権法の解釈や裁判の判例などは過去からの一貫性を保っているけれど、人々の権利意識は大きく変化しています。「著作権や肖像権に対する意識には世代間で大きなギャップがあり、写真を撮る人たちがそれに気づいていないこともトラブルの原因となっている」と佐々木広人氏は指摘します。連載2回目は、スマホ世代の若者の肖像権意識について解説いただきます。(著作権委員会)

スナップ撮影と肖像権の問題を語る際、よく引き合いに出されると言えば、「写真の記録性」あるいは「リアリティ」「リアリズム」。写真愛好家にはおなじみのフレーズだ。もちろん、写真に造詣が深い読者のみなさんに、「カメラは見たままを写してくれる」などと素人みたいに言うつもりはない。事実、機材任せではどうにもならないからこそ、これまで幾多の写真家が「リアリズム」を追求し、感性と知恵を働かせてきたことも存じ上げているつもりだ。

だが、最近、この「リアル」という言葉の定義を疑う必要があり、その定義の違いがSNS時代の肖像権問題に影を落としていると思うのだ。「佐々木は何を書いているのだ?」と思われる方もいるかもしれないがどうか話を聞いていただきたい。

●コロナ禍で加速した「素颜隠し」

『精選版 日本国語大辞典』(小学館)によると、リアルとは「**現実のこと**。また、**現実的であるさま**。ありのままであるさま」とのこと。当たり前である。

ところが、学生や会社員といった普通の若者たちの中には、素颜やありのままではない自分の姿を「リアル」と考えて憚らない人たちもいるのだ。

たとえば自分の分身となるキャラクターの「アバター」(下の写真参照)。SNSやオンライン会議で自分の顔写真の代わりに使用する人も増えており、ご存知の方も多いただろう。

ただし、これを従来のイラストや似顔絵と同じように捉えてはいけな
い。コロナ禍で大ヒットしたゲーム「あつまれ どうぶつ森」では、このアバターどうしがオンライン上でコ

筆者が Facebook で作ったアバター。髪型や肌の色などパーツを選んで作るのが一般的だ。

コミュニケーションを取ったことが「お籠り生活」の象徴としてニュース番組などで報じられた。報道機関の取材に対して大学教授がアバターを介して応じたことも話題になった。実は私もこの2年間、大学でオンラインの講義を行っているが、アバターは知っていても実際の顔を見たことがない学生が何人かいる。

極め付けは、今後広がるとみられる仮想空間の「メタバース」だろう。ここではアバターどうしでなければビジネスやエンタメを楽しめない分「アバター＝私」の認識が強まることはもはや明らかだ。

こうなると、そう遠くない将来に「対外的に見せる顔」を「アバター」に置き換える人が増えていくと予想される。つまり、肖像権の対象とされる現実の顔は「対外的に見せる顔」ではないという認識が、これまで以上に広まっていくと考えられるのだ。「対外的なリアル」を意識するあまり、本来の素颜は「見られたくないもの」から「見せる対象外」へと意識が変化していくだろう。

こう書くと、「仮想空間と現実とは別物。その懸念は世迷言だ」という批判を受けそうだが、私自身はそう思っていない。実はSNSの世界を中心に、「対外的に見せる顔」は「現実の素颜」とはすでに別物になっているからだ。

●「リアル」の定義は既に変質

「インスタ映え」が流行語になった2010年代、写真を「盛る」「デコる」といった行為が話題を呼んだ。

たとえばポートレート写真。これまでも撮影後に色味や輝度、コントラストなどを調整することはあったが、今では目や肌の形や質感を変えたり、「本来ないもの」をトッピングしたりする手法が、スマートフォン利用者の間では当たり前になった。リアリズムを追求する写真家にとっては、なかなか理解しがたい手法かもしれない。

だが、スマートフォン利用者(今や世の中の写真愛好家の大多数と言ってもいいかもしれない)は、それらの手法を当然のように受け入れている分、むしろ当たり前だと認識している若者も多い。そしてその「当たり前」が若

者たちにとっての「リアル」になっていると言っても過言ではない。

人物写真で「盛る」「デコる」という行為は、今や履歴書の写真でも見られるようになった。履歴書の写真といえば、かつては写真館、あるいは街角の証明写真ボックスで撮影されるものだったが、今はスマートフォンで自撮りして、写真加工アプリを使って「調整」して添付される時代だ。私もこれまで新卒・中途採用の面接に何度も立ち会ってきたが、本人と会って「履歴書の写真と違う」と思った経験は一度や二度ではない。そのあたりの感覚について、以前、学生たちにたずねたところ、

「自撮りとアプリを使えばおカネがかからないから」「写真をいじるのはむしろ普通」と口をそろえた。

つまり、自分自身の姿をカメラに任せてありのままに撮ってもらうという感覚が希薄になり、写真を好きなように加工するのがスタンダードになったのだ。

●コスプレ撮影と通底する問題

そこで私が思い出したのは、前回の拙稿でも触れた『アサヒカメラ』の「コスプレイヤー写真」の話だった。重複になるが、エピソードを再掲したい。

同誌2016年10月号でのこと。広い公園の歩道に面した場所で、カツラを被ろうとする男性やメイクに勤しむ女性らを撮影したスナップ写真が月例コンテストの入賞作品として掲載された。まさにコスプレイヤーが「変身」する前の様子を捉えたものだった。ところが、作品を見た読者が「こんなシーンは撮られたくないな」とTwitterで漏らした感想が拡散、SNSは批判であふれ返った。この一件がきっかけで、『アサヒカメラ』では写真の肖像権の特集が組まれるようになった——という話である。

ここで注目したいのは「こんなシーンは撮られたくないな」という言葉だ。発言主のツイートは早々と削除されたので、今となっては心境を深掘りすることができない。だが、呼応した人たちの批判ツイートを読むと、ある意識が浮かび上がってくる。それは「自分が納得する姿でないと撮影されたくない」という強い意思。コスプレイヤーの場合、「変身後の姿」が「表現したい自分」であり、「外にさらしてもいい自分」であり、人によっては「外向けのリアル」のようなものなのだ。これはおそらく、自分の写真を「盛る」「デコる」と似た意識・感覚ではないか。

コスプレの会場であれば「変身前」を撮影しないなどの「暗黙のルール」に従えば無用のトラブルは避けられるだろう。だが、ストリートスナップはそう単純ではない。

知らぬ間に自分の顔が撮影され、作品として発表されることに対しては、既にSNS上などで反発の声が上がっている。もっとも、肖像権や刑事・民事に関して誤った知識に基づいた声が多く、それが議論を歪ま

せていることについては、前回の拙稿でも指摘したとおりだ。

とはいえ、今や「盛る」「デコる」写真を当然視する人たちが、普通に街を歩いている時代。そこにこれまで同様、レンズを向けて撮影するとすれば、撮影者が非難を受けるリスクは高まるばかりだろう。「外向けのリアル」を準備せず街を闊歩する若者にとって、それは不快であり、恐怖であり、大袈裟な言い方をすれば、アイデンティティが揺らいでしまうからだ。

●「時代の記録」と言うならば…

だからといって、私は従来のストリートスナップ手法を批判するつもりはない。前回の拙稿でも「必要なのは撮影者の知識と感性のアップデート」と書いたとおり、被写体となり得る人たちの「リアル」を意識することが必要だと考えている。ただ、漫然と街にレンズを向けるのではなく、撮影者と被写体となり得る人たちの「リアル」の差異を理解して撮るべきではないだろうか。

もしスナップ撮影を「時代の記録」と言うのなら、従来の手法に固執することなく、時代性の反映を最優先すべきだ。もちろん「リアルに対する意識」は簡単に表出するものではないかもしれない。だが、写り込む人物の姿や街角の様子、はたまた電飾看板やショーウィンドウにそれらの「破片」を見出せるかもしれない。目に見えないからこそ、何か代弁することもあり得る。

＜心が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば人格が変わる。人格が変われば運命が変わる＞

これはアメリカの哲学者で心理学者のウィリアム・ジェイムズの言葉だ。後半の二つの文章は余計だが、人々の意識が変わる時は何らかの変化が表出するもの。ピンチと捉えず、時代を捉えるチャンスだと思いたい。

佐々木広人(ささき・ひろと)

株式会社キュービック エディトリアルデスク・ゼネラルマネージャー／株式会社アーク・コミュニケーションズ取締役



役／専修大学講師／一橋大学卒。リクルートを経て朝日新聞社に入社。『週刊朝日』副編集長、『アサヒカメラ』編集長、「AERA dot.」編集長、雑誌本部長などを務め、2021年7月に退社。『アサヒカメラ』の肖像権や著作権の特集が話題に。2012年新語・流行語大賞大賞トップテンを受賞した「終活」の発案者でもある。

田沼武能氏を偲ぶ

令和4（2022）年6月1日 永眠 享年94（没年93歳）

田沼武能氏は、長きにわたって日本写真家協会会長を務められ、当協会のみならず写真界を牽引していただきました。生涯現役を貫き、写真文化の発展と写真家の権利の向上に尽力し、計り知れない貢献をされ、2019年に写真家として初の文化勲章を受章し大きな足跡を残されました。

今号では、故人ゆかりの関係者、関係団体からのご寄稿を掲載し、故人に対しての感謝と哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈りしたいと思います。（執筆者 50 首順掲載）



田沼武能

（撮影・伊勢丹写真室）

【関係者からの寄稿】



田沼武能先生を偲んで

凸版印刷株式会社

特別相談役 足立直樹

田沼先生とは2009年に日本写真家協会の理事をお受けしてからの付き合いですが、なぜかとても気が合い、様々な会での発起人も仰せつかるなど、思い出は尽きません。協会での先生は、議長として会議を効率的に進められながら、幅広いご経験からの興味深い逸話をお話くださり、私はいつも楽しみに出席していました。先生の文化勲章を祝う会では、参加者誰もが先生を尊敬し、祝意を直接伝えたいという思いが溢れた素晴らしい会となったことが懐かしく思い出されます。デジタル化により大きく変化する写真界ですが、先生が今も見守ってくださることを信じ、写真家の皆さまを支える力となるべく尽力してまいります。田沼先生から頂戴いたしました温かなご懇情に心からの感謝をささげます。



2021年5月の定時総会にて



田沼武能さんを偲ぶ

写真評論家 飯沢耕太郎

編集・執筆した『日本の写真作家 29 田沼武能』（岩波書店、1998年）の刊行に際して、田沼武能さんご本人とその作品とに親しく接する機会を得た。それ以来、日本写真家協会の活動を通じて、審査や展覧会の構成などで付き合いすることが多くなった。むろん、田沼さんの写真家としての長いキャリアを考えれば、ごく限られた時期という

ことになるのだが、それでも20年以上の時間が経過している。その間、いつも強く感じていたのは、本当にポジティブな方だということだ。日本写真家協会、日本写真著作権協会の会長職など、田沼さんは写真界の要というべき立場にあり続けていた。写真家たちには、個性的というか、どちらかといえばエゴイスティックな性向を持つ人が多い。田沼さんはそのことを承知の上で、彼らの存在を否定することなく上手にコントロールし、物事を先に進めていくことができる稀有な能力の持ち主だった。もし田沼さんがいなければ、デジタル化、大震災、コロナ禍といった大波の中で、日本の写真界が方向性を失って四分五裂しまうことも十分に考えられたのではないだろうか。

そのポジティブな志向は、田沼さんご自身の写真にもよく表れている。田沼さんが1966年にタイム・ライフ社の契約写真家になった時、ベトナム戦争の取材を拒否したという話を聞いたことがある。東京の下町出身の彼は、多くの死者を出した東京大空襲の記憶を忘れることができなかつたのだ。逆に「世界の子供たち」というライフワークは、その体験があったからこそ成立した。苦難の中でも明るさを失わない子供たちへの想いは、最後まで変わらなかったのではないだろうか。



「木村のスパイか？」

公益財団法人 さかた文化財団 酒田市土門拳記念館 館長 池田真魚

田沼先生が、秋田で開催中の木村伊兵衛展に向かわれる途中、土門拳記念館にお立ち寄りいただいたのが今年1月のことでした。相変わらず年齢を感じさせないお姿やお話でしたので、訃報は寝耳に水でした。

木村伊兵衛と土門拳が日本写真界を牽引していた頃、木村伊兵衛に師事されていた田沼先生が土門の自宅を訪問した際、「木村のスパイか？」と勘違いされ

たというエピソードは、田沼先生が折に触れ笑いながら語られておりました。

土門拳記念館では、2019年に『特別展 昭和を見つめる目 田沼武能と土門拳』を開催いたしました。イベントとして当館の藤森武理事が聞き手を務め、『田沼武能「昭和と東京を語る」』と題し、お話をいただいたときも、前述のエピソードで笑いを誘いながら、2人の巨匠から引き継いだ写真魂を語られていました。まだコロナウイルスの名前も知らなかった3年前のこと。生きた昭和を感じさせる熱い空気が会場に満ち満ちていました。

田沼先生には、当館30周年記念誌に日本写真家協会会長としてメッセージもいただいています。本格的な個人写真美術館の誕生は、大きな喜びであったこと、今後も日本の文化、写真文化の振興に貢献してほしい、そういった内容でございました。先生のご期待に添えるよう、また、国内初の写真美術館の名に恥じぬよう、今後も研鑽してまいります。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。



佐伯義勝氏と新年の挨拶に土門氏を訪問の一コマ。1974年、田沼武能撮影

自分の体よりカメラを守った田沼さん

朝日新聞出版 社長 市村友一

弊社が1926年から2020年まで刊行してきた『アサヒカメラ』を長年にわたり、そして最後まで支えてくださったのが、田沼さんでした。同誌にはカメラ



やレンズの新製品を分解までして徹底的にレビューする「ニューフェース診断室」という名物連載がありましたが、田沼さんは師匠である木村伊兵衛さんが亡くなった後を引き継ぎ、休刊の号までの確かな批評を執筆してくださいました。最新カメラのテストに意欲的で、デジタル時代になっても常に新技術や操作方法に関心を寄せ、しっかりと会得されておりました。

2016年、田沼さんが87歳のとき、ご自宅の階段を滑り落ちて腰椎を圧迫骨折されたことがありました。弊社関係者によると、田沼さんはそのとき、「ニューフェース診断室」のテストのため持ち帰った新製品のカメラを手にしていました。階段でバランスを崩した際、カメラを落とさないよう無理な姿勢を取ったため、転落してしまい、「自分の体よりカメラを守った」と、後で笑っておられたそうです。

骨折による入院は1か月以上に及び、その間に全日写真主催の写真コンテストの審査がありました。全日写真会長だった田沼さんは「審査はやる」ときっぱり。

病院から車いすに乗って会場に來られました。長い

入院で最初は顔色も悪かったのですが、写真を見始めたたん、背筋が伸び、目を輝かせて2千点以上にのぼる写真審査を進めたとのこと。その話を聞き、「本当に写真とカメラを愛する方なんだなあ」と深く感じいった次第です。

田沼武能氏を偲んで

東京都写真美術館

館長 伊東信一郎



世界の子どもや下町の風景、自身のふるさとしてある武蔵野など、長年にわたり記録し続けてきた田沼武能氏が今年6月1日、93歳で逝去された。東京

都写真美術館と田沼氏との関わりは長く、今年で開館27周年を迎える当館の設立時からの収蔵作家であり、2004年には氏の個展「60億の肖像」を開催した。

この展覧会は、当時ですでに120を超える国と地域を精力的に取材してきた田沼氏の半世紀にも及ぶ活動の軌跡を辿る展覧会で、初期の代表作である〈文士・芸術家の肖像〉をはじめ、〈戦後の子どもたち〉や世界各地を取材した〈人間万歳〉〈地球っこたちは今〉にいたるまでの代表作約200点が一堂に会し、ヒューマニスティックな視点で人間ドラマを撮り続けてきた田沼氏の写真世界を展望することができた。そして、写真家として3人目の文化功勞者に輝いた数か月後に開催された展覧会は話題を呼び、32日間の会期中に2万7千人を超える来場者があったことは大変喜ばしいことであった。

田沼氏は国内外で精力的な取材活動を展開し、ほぼ毎年展覧会で自身の作品を発表し続け、その旺盛な好奇心と行動力は生涯衰えることはなかった。その一方で、母校・東京工芸大学では後進の指導にあたり、日本写真家協会会長、日本写真保存センター代表など写真界の要職を歴任しながら、わが国の写真文化の普及啓発、さらには写真の著作権保護にも力を注いでくださり、当館の展覧会には必ずといっていいほど足を運んでくださったことに、深く感謝を申し上げます。

写真家として、生涯第一線で活躍してきた田沼氏を支えてきたものは「人間」へのあくなき興味と、同時代に生きる人びとが織りなす様ざまなドラマを写真に記録し、未来へと伝える喜びにほかならないだろう。田沼氏が遺した人間ドラマの数かずが今後も多くの人びとを魅了し続けることを強く願っている。



50億の肖像 田沼武能写真集図録 2004年
デザイン：柴永事務所
(柴永文夫・中村竜太郎)



「ベランメエ」の視点と著作権
 一般社団法人 日本美術家連盟
 常任理事、画家 入江 観
 田沼さんの名前も作品も、ずいぶん前から目にしていたが、直接の知己を得るようになったのは、APG - 日本美術著作権機構の会議で御一緒するようになってからである。

そもそも私たち美術家にとって「著作権」なるものは、その重要性は理解しつつも容易に馴染み難い代物であった。しかし、当時美術家にとって没後50年認められていた著作権が、どういう理由でか写真家には認められておらず、その不公正の問題に取り組むことで、写真家の皆さんは否応なく「著作権」と直面せざるを得なかったのだと思われる。

権利回復の戦いを経験することによって写真家の著作権意識は美術家のそれより遥かに高く、私たちは教えられることも多く、著作権に精通した瀬尾太一さんの爆弾トークも懐かしく思い出されるが、時折発言される田沼さんの、やや、ベランメエ口調が、ともしれば、硬く冷たい法律としての著作権を私たちの日常に近づけてくれたことは間違いない。

以前、田沼さんから何冊か作品集を贈っていただいたが、それらを見返しながら不思議に思うことは、写真家のレンズの向うにあるのは常に、あられもない現実でしかないのに、出来上がった写真に、優しさや品位が漂っていることである。ベランメエの視点の中に田沼さんのヒューマンイズムと師匠、木村伊兵衛から受け継いだものがあるのかと思う。



平和が一番
 日本自然科学写真協会
 会長 海野和男

あんなにお元氣だった田沼武能先生、我われ写真家に希望を与え続けて来られた先生、2020年の文化勲章受章記念の会でお会いしたのが最後だった。あの会はとても心に残る会だった。コロナ騒ぎの直前で、本当に良かったと思う。大学のクラブの後輩が(写真クラブではなく昆虫研究会)田沼先生の甥っ子だったせいもあり、学生時代に自然関係の写真家以外で、初めて身近に感じた写真家だった。

写真界での功績は素晴らしい。江戸っ子で短気だそうだが、温厚な人柄で争いとは無縁の方だった。日本写真家協会の会長を長く務められ、うまくまとめたのは、先生の人柄故であると思う。ほくのような下っ端の写真展や出版記念会にも、いつも顔を出して下さった。審査で一緒したり、その後の懇親会で

も、親しくしていただいたりと、付き合いは長かった。審査では独特の写真観があって、最後に、でもね、これいいよねといわれれば、皆が従うようなところもあった。

平和が大切であるということ、いつもいわれていたように思う。だいたい前に車は何に乗っていると聞かれ、ジープと答えたら、あれはアメリカの軍用車だといわれたこともあった。今、世界は分断されているが、戦争を体験され平和が一番と思っている先生の訃報に接し、戦後の平和な時代はもう終わりなのかと、悲しい思いに駆られるのである。

田沼先生、天国から我われ写真家をそして世界を見守って頂きたいと思う。田沼先生のご冥福を心より祈念して、追悼の文を締めくくりたいと思う。



ゆっくり私たちを見守ってください
 朝日新聞社 ネットワーク報道本
 部員兼映像報道部員 勝又ひろし

私は編集長、副編集長として計10年間『アサヒカメラ』に在籍し、田沼さんとは毎月顔を合わせていましたが、それよりも全日本写真連盟で7年間、連盟会長としての田沼さんと築いた関係のほうがはるかに濃密でした。アマチュア写真界でも多くのファンを引きつけていました。コンテスト審査も真剣勝負、請われれば遠くの写真展にも出かけ、気さくに語り合い、礼も欠かさない。訃報が流れるとSNSには「田沼さんに写真展にきてもらった」「ツーショットを撮らせてもらった」「記念写真を送ってくれた」などの死を悼む声があふれました。

田沼さんと話す機会が多く、繰り返しも多かったですが(笑い)、多くの興味深いことを聞かせてもらいました。7月16日の朝日新聞夕刊の惜別記事でも触れましたが、昨今の写真界の状況に危機感を持っていました。これが大きな心残りになっていると思いますが、もうひとつ心配だったのは、後継者のことだったと思います。

JPSのような芸術系職能団体は、会社と違って組織のトップを目指そうという人はあまりいないと思います。田沼さんも好んで長期に会長を務めたわけではないでしょう。後継者と目していた菅洋志さんに先立たれたのは痛恨だったと思います。また「役所や政治家としっかりパイプを作っておかないといけない」と常づね仰っていて、そのために抜擢した瀬尾太一さんが昨年60歳で逝ったことも、大きなショックだった違いありません。

93年の人生でこれだけ行く末を見届けたいものが



銀座でばったり師匠の木村伊兵衛と遭遇 1973年

残っているとは、どれだけ最後まで現役だったのかと思います。もうゆっくり伊兵衛さんと師弟談義でもしながら、私たちを見守ってください。



田沼武能先生を偲んで

日本風景写真協会

会長代行 川隅 功

田沼先生の悲報は余りに唐突でテレビのニュース番組で知りました。約一か月前、日本写真著作権協会のオンラインによる理事会で、お元気なお姿を拝見していたのに…。帰らぬ人に…。直ぐには信じる事ができませんでした。それも6月1日の写真の日に…。写真の日に天国に旅立ちされました。

田沼先生とは、1993年11月に開催された某カメラ雑誌社のパーティー会場で初めてお会いしました。私はまだアマチュアの間際でしたので、緊張のあまり先生とは名刺交換と軽いご挨拶で終わってしまいました。それから数年後、JPS入会後は、お会いする度にお声をかけていただき、「川隅さんはいつ大きい写真展とパーティーするの？私が挨拶するから早くしてくれない？」と仰っていただきましたが、それも叶わないままに、先生は旅立っていられました。今になっては、大変残念で大変心残りです。

先生とは、ここ数年間、日本写真著作権協会の理事会で一緒させていただいておりましたが、ある理事会の時、集合写真を撮ろうということになりました。その時どなたかカメラお持ちですか？に、写真家の会合なのに、田沼会長しかカメラをお持ちではなく、会長のカメラで記念写真を撮影したことを覚えています。

いつも気さくに接していただき、時にはユーモアがあって、パワフルにお仕事をされ、生涯現役を貫き通した真の写真家田沼武能先生、これまでのお導きに心より感謝し、安らかに眠りにつかれることをお祈りいたします。



田沼先生を偲んで

公益社団法人 日本複製権センター

代表理事 川瀬 真

田沼先生の写真家としてのご功績はいうまでもありませんが、私は長年著作権行政に携わってきましたので、写真家の著作権保護という視点から、田沼先生のご功績を皆様にお伝えしたいと思います。

写真の著作権は旧法時代原則発行後13年でした。現行法の制定の際(1970年)に保護期間が見直されて原則公表後50年になりました。しかし、その際写真以外の著作物は著作者の死後50年まで延長されま

した。写真については、様々な経緯から、他の著作物と比べて短い保護期間になっていましたが、写真家の皆さんは田沼先生を筆頭に法改正運動を展開され、1996年の著作権法改正で、写真家の悲願であった著作者の死後50年(現在は死後70年)を勝ち取られました。また、保護期間については、法的安定性の確保のため、法改正により長い保護期間を与えられたとしても、改正の時点で著作権が消滅しているものは、保護が復活しないことになっています。実は田沼先生の作品も1957年までに発行された作品は保護がありません。この問題は法改正には至りませんでした。田沼先生は関係者に法改正を訴え続けられていました。

このように田沼先生は、写真の権利保護の拡大について、写真家の地位向上という一念で大変熱心に取り組んでおられました。そのご功績は計り知れないものがあると思います。私のような若輩者に対しても、気さくに接していただいた田沼先生の笑顔を今でも思い出します。田沼先生のご冥福を心からお祈りします。



田沼先生を偲んで

株式会社ニコン

特別顧問 木村真琴

ご逝去の知らせに接し、いつもお元気でお過ごしのことと思っておりましただけに本当に残念でなりません。

日本写真家協会の会長として長年にわたり著作権、写真保存等の課題に取り組みそして写真家協会を一つにまとめ上げていくことに力を尽くされ、写真家として初めて文化勲章を受章され、まさに偉大な写真家であると同時に会長として大きな功績を残された方でもありました。

先生のことでまず思い出すのは何時も熱情溢れる語り口でいろいろな話をされることです。お会いする度に今日はどうなお話が伺えるかと楽しみにしておりました。先生の作品といえば子ども達の写真が有名ですが、私にとっては何故かカタルニアの写真集、その中でも古い教会、修道院の写真が印象に残っています。

またある時、田沼先生が怪我で入院されたという話を聞いて大変だと早速お見舞いに伺ったところ、至ってお元気で逆に私どもの写真を撮っていただいたこともありました。私はメーカーとしてのお付き合いが主でしたが、本当に魅力的な方で話に説得力があり、かなり前に文化財の保護という観点から日本写真保存センターの立ち上げに協力を依頼された時も田沼先生の熱い想いに動かされ賛同いたしました。

写真に関して熱い気持ちをお持ちで笑顔の素敵なお方でした。笑いながら我われ皆を温かく見守っていて下さると思っています。心よりご冥福をお祈り申し上げます。



撮影：下村一喜

田沼先生へ

女優・ユニセフ親善大使

黒柳徹子

田沼先生は、子どもを撮ったら世界一というくらい、子どもの写真を上手にお撮りになりました。私がユニセフの親善大使になった時、田沼先生から直ぐに、私の視察に同行したいと連絡がありました。行ったことのない国に行って、子どもを撮りたいということでした。

私は、NHKでデビューした頃からなぜか田沼先生に写真を撮っていただくことが多く、気心が知れていました。それから、ユニセフ親善大使になって38年間、必ず一緒に、自費で、視察に来ていただきました。



2011年6月 東日本大震災の被災地を訪ねる 宮城県荒浜小学校

私は、視察から日本に帰って来て田沼先生の写真を見て、「ああ子ども達は、こんな風に私に手を出していたのか」とか「飢えた子ども達の目はこんな風に乾いているのか」と解るのでした。

この1~2年はコロナで行けませんでした。でも今年も行けるでしょうと、秋頃に、ユニセフの視察に行く約束をしていました。いつも、私が決めるより先に、「ねえ、今年はどこ？決まった？」と連絡をくださるのです。田沼先生は、93歳でした。「そうか、93歳でも子ども達のところに行こうとなさっていたのか!!」私は、改めて感動したのです。いつも、カメラを3つも首にぶら下げて、暑期中、子ども達に声を掛けながら撮っていたお姿が目浮かびます。

田沼先生ありがとうございます。子ども達は、生き生きと田沼さんの写真の中で生きていきます。

1984年から、同行して下さった国ぐにです。

タンザニア、ニジェール、インド、モザンビーク、ベトナム、カンボジア、アンゴラ、バングラデシュ、イラク、エチオピア、スーダン、ルワンダ、旧ザイール、ハイチ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチア、モリタニア、ウガンダ、コソボ、アルバニア、マケドニア、リベリア、アフガニスタン、アフガニスタン(2回目)、ソマリア、シエラレオネ、コンゴ共和国、インドネシア、コートジボワール、アンゴラ(2回目)、カンボジア(2回目)、ネパール、ハイチ(2回目)、女川町、山元町、亶理町、南スーダン、フィリピン、ネパール(2回目) ミャンマー、レバノン。



田沼先生を偲んで

一般財団法人 日本カメラ財団

理事長 櫻井龍子

お亡くなりになる一週間前、JCI ビルにお立ち寄りになった田沼先生は、「さようなら。」と、って笑顔で手を振りながら帰って行かれました。最後の

別れにいらしていただいたように思えてなりません。

令和元年、JCIIの理事長職を森山真弓から受け継いだ際、「写真のことは田沼先生に相談することね。」といわれ、理事長就任のごあいさつを兼ねて先生を訪ねました。温かい笑顔で迎えてくれた先生は、「森山さんの後は大変だねえ。」とお気遣いいただきながらも、「森山さんは写真が大好きだったので、櫻井さんも写真を楽しむといいですよ。」とアドバイスを下さりました。先生のいうとおり、あれからずっと教室に通い写真を勉強しております。



2006年、日本写真保存センター設立推進連盟発足の記者発表会での田沼氏と森山前理事長

田沼先生のことは森山前理事長から常に聞かされておりました。平和を願う視線で世界中の子ども達を撮り続けたこと、写真展には必ず顔を出して挨拶して下さること、日本写真家協会の会長を20年お務めになったこと、その功績は限りがありません。中でもとりわけ、日本写真保存センターの設立に奔走していたことを森山前理事長が熱く語っていたのは非常に印象的でした。写真界が一致団結し、先人が残した日本人社会の記録、写真芸術としての作品など貴重な文化遺産を守り、それを活用していくという使命を2人が共有していたのはいうまでもありません。少しだけ早く旅立った森山真弓前理事長と今ごろあちらの世界で写真談議に花を咲かせていることでしょうか。謹んでご冥福をお祈りいたします。

巨星墜つ

公益社団法人 日本広告写真家協会
会長 白鳥真太郎



あの田沼さんが突然ご逝去された。私達が憧れ、その写真家人生を私達も同じように送りたいと思っていた田沼さんだった。私と田沼さんの初めてのお

付き合いは、今から17年前である。広告写真一筋で他ジャンルの写真家との交流の無かった私に「日本写真家協会にも入会して下さい」とのお誘いを受け、その折に初めてお目にかかったのであるが、JPSの新入会員となった私に、優しく語りかけて下さったことも忘れられない。その後、日本写真家協会、日本写真文化協会、日本広告写真家協会の3団体で年に数回の親睦会を開催するようになったが、そんな時にもいつも柔和な言葉で接していただいた。

しかし、あるパーティーでびっくりしたことがあった。沢山の群衆がいた広い会場のためか、田沼さんがスピーチに立った時、一向にザワつきが止まらなかった。

「静かにしろ！」田沼さんが激高した。穏やかな田沼さんの中の本気を見た気がした。そして嬉しかった。

田沼さんはいつも重いカバンを肩に掛け、何かを見つけるとさっとカメラを出し、素早くシャッターを切る。軽快なフットワークとエネルギーな写真家魂をもう見られなくのがすごく寂しく感じる。たくさん写真集も残され、それらがこれからも永遠に私達を楽しませてくれるとはいいながらいつまでも私達の先を行き、写真家の立場を文化勲章受章者として高めて下さった田沼さんに心から感謝をしたいと思う。ご冥福をお祈り申し上げます。合掌



写真審査「国際写真サロン」で休憩中の田沼さんを撮影する安珠さん 2017年11月、白鳥撮影



江戸っ子気質

日本肖像写真家協会

会長 杉山 薫

お忙しい田沼先生が、私共日本肖像写真家協会東京大会にご出席していただいたことがあります。スピーチでも、個ことの雑談でも、人情味溢れて心に響く江戸弁調で話されていたことが印象的でした。また、各写真協会の目的は違っていても写真の人は皆「仲間」といわれていた時も、先生の江戸っ子気質な所を感じました。数多くの画集の作品も天衣無縫とでもいいますか、田沼先生の一貫性が伺えるように思います。写真家として初の文化勲章受章は、写真界で活躍している私達にも自信と励みになりました。



その受賞パーティーでは、あまりにも大勢の出席者の中、遠くで拝見するだけで、お声を掛ける事さえ叶いませんでしたが、先生は終始、満面の笑顔で嬉しそうだったお姿が今も脳裏に浮かびます。田沼先生にお会い出来たのは、この時が最後となってしまいました。田沼武能先生ありがとうございます。ご冥福をお祈り申し上げます。合掌 (写真提供・杉山氏)



田沼武能先生を偲ぶ

日本写真芸術学会会長、日本大学

芸術学部 特任教授 高橋則英

私が田沼武能先生のお話を最初に伺ったのは1997年3月のこと。写大ギャラリー「木村伊兵衛と土門拳」展会場で開催された日本写真芸術学会フォーラ

ムでのご講演でした。「師・木村伊兵衛を語る」という演題での田沼先生の率直でしかも軽妙洒落な語り口が記憶に残ります。その後、日本写真芸術学会の役員合同会議や、2007年からの日本写真家協会による日本写真保存センターのプロジェクトで定期的にお会いすることになりました。これらの機会に長くお話することはあまりありませんでしたが、いつも優しい笑顔で接して頂いたことを覚えています。

田沼先生と親しくお話したのは、2019年に田沼先生が文化勲章を受章されたことを受け日本写真芸術学会が特別名誉賞を差し上げた2020年の7月でした。コロナ禍で授賞式は行えず、ご自宅に表彰状とトロフィーをお届けに上りました。自ら茶菓をご用意下さっておもてなしいただいたこと、展覧会場に作者がいなくてはと、コロナの状況下で大阪に行く予定だとお話されていたことも先生のお人柄が偲ばれることとして印象深く記憶に残ります。

実は冒頭に記した日本写真芸術学会のフォーラムでは金子隆一氏も講演されておりました。その金子氏も残念ながら昨年6月に逝去されましたが、7月末まで開催の金子氏の追悼展では田沼先生も発起人として名を連ね、追悼文を寄せておられます。その原稿を校了された直後に田沼先生が亡くなれたということを実行委員の石田克哉氏より伺いました。最後までお元気で誠実に仕事に打ち込まれていた田沼武能先生のお人柄を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げる次第です。



時代を超える「写真の力」

編集者 多田亜生

報道写真家として長い道のりを歩み、最後まで現役として本懐を遂げられましたことに深甚の敬意を捧げます。常に大きなテーマをかけた、渾身のエネルギーで徹底的かつ繰返し追いつづけて写真展や写真集として発表されました。その根底には「人間の尊厳」を写真で表現するつよい意思がありました。私は『アンデス讃歌』(1984年)から『トットちゃんと訪ねた子どもたち』(2021年)まで、十余冊の写真集の制作にかかわらせていただきました。

とくに印象に残る写真集があります。それは1983年、田沼先生が偶々訪れたバルセロナのカタルニア美術館で、血と汗と土の匂いの濃い、生活感にみちた素朴な木彫群に魅了され、それがきっかけで、4年かかりでカタルニアの山間僻地の村落に残る小さな聖堂を



田沼武能写真集「カタルニア・ロマネスク」(カタルニア語版、スペイン・レリダ市政府、1990年)

巡歴されました。当時バルセロナに居を構えていた堀田善衛氏などの協力を得て、写真集『カタルニア・ロマネスク』にまとまりました。自治志向のつよいこの地方は、ながらくフランコ独裁政権により教育や出版などの公の場でカタルニア語の使用は禁じられてきました。しかし自治州内のレリダ市政庁の英断でカタルニア語版の出版がきまり、千年余、人びとが守り続けてきた文化財が国の内外にカタルニア語とともに紹介されることに、大きな誇りと喜びをもって迎えられました。写真は森羅万象を記録し表現する個人的な営為ですが、すぐれた作品は時代と社会を超えて人びとに訴えかける「文化財」であることを痛感しました。



撮影：加藤雅昭

田沼氏の言葉

一般社団法人 日本写真著作権協会
(JPCA) 常務理事 棚井文雄

田沼武能氏が率いる JPCA の存在を意識したのは、2004 年春のことだった。氏の片腕だった瀬尾太一氏をきっかけに、「協会の仕事を手伝ってもらいたい」と声を掛けていただいたことに始まる。しかし、当時の私は欧州へ活動拠点を移すことを検討しており、渡英を機にこの話はお断りした。その後、ニューヨークに移り、ギャラリーとの契約や作品発表に際して「著作権」「肖像権」といったそれまで直面しなかった問題と向き合い、英文の肖像権裁判ニュース記事を苦勞して読むなどしていた。やがて、そんな経験を知る由もない田沼氏、瀬尾氏から日本へ帰国した直後に連絡を受け、少しでも良いからと協会運営に関わっていくことになる。

田沼氏と深く写真について話をするようになったのは、氏の作品「東京わが残像」について、木村伊兵衛作品と比較したコメントを私が発して以来だと記憶している。自分でもよくいったものだと思うが、私の言葉に対して共感を示すような氏からの返答だった。

瀬尾氏の後を受けて常務理事となってからの関わりは更に密となり、協会運営の裏話や、トラブルの解決法などを教示いただいた。スムーズな運営ばかりではなかったとの話を聞き、驚いたことを覚えている。田沼氏といえども想像以上の苦悩や葛藤をされて現在があったのだ。

最後にご自宅でお会いした際には、より穏やかな、また希求するような口調でこう語られた。「瀬尾のやってきたことや、写真家のことはあんたが一番わかってるんだから、これまでに俺が教えたことをやってもらわないと…写真家がやらないとダメだ」と。

写真家と写真界を想っての田沼氏のこの言葉は、まるで遺言であったかのように今も私の耳に響いている。

師から得た学びと幸せ

日本写真作家協会 (JPA) 前会長 棚井文雄

日本写真著作権協会 (JPCA) の活動を通じて田沼武能氏と出逢ったことで、氏が木村伊兵衛氏の助手時代に受けた教えや、田沼氏の思想も授けていただくことが出来た。このようにして先達たちの魂を受け継ぐチャンスを得られたことは、少年期より写真家を目指してきた者にとって、とても幸せなことだ。

十年余り海外で活動していた私が、日本へ拠点を移した直後、運命だったかのように田沼氏がリーダーシップを取ってきた JPCA と関わり、写真著作権の啓発活動に携わることになった。JPA としても、JPCA との共催による「写真著作権セミナー」を全国で開催させていただき成果が上がっている。

ただし、協会の運営に携わることは、「写真家として、自身の作品制作との時間的バランスをどう取るのか」という難しさがあり、ずっと葛藤してきたことも確かだ。とはいえ、戦後の写真界を築き上げてくれた写真家たちへの深い感謝もあり、ほんの少しでも先人たちへの恩返しになるならと思い、今日まで関わってきた。

田沼氏は、写真のこと、政治のこと、世界のこと、様々なことを語ってくれた。そこから、たくさんの学びを得た。そして、写真家にとっての作品への考え方がかなり近しく、また、協会運営におけるポイントや危機感が完全に一致していることは、今後さまざまな判断をしていく際に迷いをなくしてくれるに違いない。

写真への想いということにおいて、同じ感覚の人から教えを受けた幸せを、いま改めて噛み締めている。田沼さん、あなたの言葉を、スピリッツを今後の活動に生かしていきます。合掌。



田沼武能先生と日本写真文化協会
一般社団法人 日本写真文化協会
会長 田中秀幸

田沼先生のご逝去の報はあまりにも急でした。一週間ほど前に (一社) 日本写真著作権協会のオンライン会議で明快なご挨拶をされていた姿がはっきりと記憶されています。(一社) 日本写真文化協会 (以下文協) はどれほどお世話になったかわかりません。

昭和 63 年より平成 28 年まで 29 年間、文協主催「全国展写真コンテスト」の審査員をお願いしてまいりました。内閣総理大臣賞を有するこのコンテストがプロ、アマを問わず広く社会から高く評価をされてきたことも、先生の長年にわたるご指導の結果と感謝しております。審査では、多数



平成 29 年 3 月 第 63 回全国展フォトコンテスト審査風景

の応募作品であっても一枚一枚丁寧にご覧になりながら、「作者のこの一枚に込めた想いを大切にしなければいけない」と、いつもおっしゃっていました。常に、写真館の団体が主催する写真コンテストであることを念頭に、文協の内部審査員に声を掛けられながらの審査でした。



平成29年1月開催「ふる里悠々武蔵野日記 Part II」のオープニングパーティー、ご夫婦で。

田沼先生には、私どものポートレートギャラリーで2回の写真展を開催していただきました。平成15年3月の「地球の仲間たち」。そして平成29年1月の「ふる里悠々武蔵野日記 Part II」は、新年の企画展ということもあり、オープニングパーティーの会場に入りきれず、控室や階段ホールにまで人があふれ、本気で床が抜けるのではないかと心配したほどでした。

先生から見れば外部の団体であるにもかかわらず文協に寄せていただいた思いを決して忘れることはありません。一枚の写真を大切に、その気持ちを持ち続けて私たちも頑張っています。長い間、本当にありがとうございました。



田沼さんを偲んで

公益社団法人 日本漫画家協会
会長、漫画家 ちばてつや

最後にお会いしたのは3年前、東京の大きなホテルで開催された文化勲章受章のお祝いの会でした。ご本人も奥様も嬉しそうだったけれど、それよりなによりお祝いに集まった周りの人達がみんな我がこのように心から喜んでいて、ああ、この人は本当に誰からも愛されている人なんだなあ、と微笑ましく思ったものです。私は漫画を描くとき、昭和の風景や人びとの暮らしぶりを調べたりするときに、しばしば田沼さんの写真集を開いて参考にさせていただきました。

その都度気付いたことですが、なんとというか、写っているものが子どもであれ大人であれ、無機質なはずの街並みですら「被写体」という硬い殻を脱ぎ捨てて、イキイキと生命感に溢れているんですね。田沼さんの持つファインダー越しの視線が、どこまでも温かく優しいからなのでしょう。出版の会議などでお会いしたときも、田沼さんが入って来るとその場が和らいでふわっと明るくなる、そんな貴重な人でした。だから、あんなにお元気だったのに突然のお別れを知って呆然としました。もう二度とお目にかかれなと思うと、本当に残念で心の底から寂しい。今は只、瞑目して、謹んでご冥福をお祈りします。



田沼先生の「顔」

キヤノン株式会社 常務執行役員
ICB 事業本部長 戸倉 剛

田沼武能様の訃報に接し、心より哀悼の誠を捧げます。

田沼先生と弊社は大変深いお付き合いをさせていただき、様々なお顔を私たちに見せてく

ださいました。

ひとつは、時代を切り取る写真家としてのお顔です。被写体は子どもから大人まで、老若男女・洋の東西を問わず意欲的に作品制作に励まれたお姿には、尊敬の念を禁じ得ません。機材面ではフィルムからデジタルまで、弊社一眼レフを歴代にわたって撮影の相棒に選んでいただきました事に感謝申し上げます。

もうひとつは「写真の権利と写真家の地位向上」を目指した先駆者としてのお顔です。

JPSは全日本写真著作権者同盟（現日本写真著作権協会）設立、著作権法の改正や写真保存センターの立ち上げなどに働きかけを行ってきましたが、その根底には先生の強い信念が息づいていました。弊社も時機に触れその活動にご協力できたことは至極の喜びです。

更に写真展会場や講演会の場では、時に江戸っ子気質の「べらんめえ」調が口をついてくるのもうひとつの魅力的なお顔です。そんな人間味溢れる先生の笑顔と実行力で写真業界をお導きいただきました。

私たちキヤノンは、先生のご意思を強く胸に刻み、技術の進化と共に社会の幸せにつながるようさらに写真文化の継承と業界の発展に尽力してまいります。

長きにわたりお導きいただきましたことに重ねて感謝申し上げますとともに、引き続き業界の行く末を暖かくお見守りください。ありがとうございました。



田沼さんの志を受け継ぐ

朝日新聞社

代表取締役社長 中村史郎

朝日新聞社は田沼さんと浅からぬ縁を持たせていただきました。エピソードには事欠きません。

ハイライトのひとつは、写真界への長年の貢献を理由に受けていただいた2019年度の朝日賞特別賞です。一報を受けた田沼さんは妻・敦子さんの前で手をたたいて喜んでくれたそうです。帝国ホテルでの贈呈式ではご緊張なさったのでしょうか。受賞のスピーチがしどろもどろになり、周囲をはらはらさせました。ご本人は「頭の中が真っ白になってしまった」と恐縮なさっていましたが、誰に対しても決して偉ぶらず、愛されるお人柄でした。

2011年の夏には東日本大震災の被災地をめぐる弊

社のヘリコプターに同乗いただきました。82歳の田沼さんはレンズ越しに目をこらし、何度もシャッターを切っていました。大家になってからもカメラバックを手放さず、現場を大切にこなしていました。



東日本大震災から半年。田沼武能さんは朝日新聞社ヘリコプター「ゆめどり」に搭乗して被災地を巡り、被害状況を克明に記録しています。2011年8月14日、宮城県内上空で、渡辺幹夫撮影

田沼さんといえば、世界中の子ども達の写真や文化人の肖像写真が有名ですが、個人的には、2019年に世田谷美術館で催された「田沼武能写真展 東京わが残像 1948-1964」の作品群が強く印象に残っています。東京の下町の名風景を見ていると、撮影している田沼さんの優しいまなざしが目に浮かぶようでした。

スマホの写真がインターネットで気軽に共有できる時代です。確かな視点で現場を切り取る写真家の地位が希薄なることを田沼さんは心配していました。弊社は、田沼さんの師匠だった木村伊兵衛さんの名を冠した写真賞も1975年から主催しています。言論・報道機関として、これからも田沼さんの志をしっかり受け継いでいくことをお誓いします。



田沼武能氏の見続けた時代

講談社 代表取締役社長 野間省伸

田沼武能氏と弊社の繋がりは長く、古くは『婦人倶楽部』、創刊時の『小説現代』での撮影から様々な仕事を経て、平成4年度より講談社出版文化賞写真賞の選考委員をその賞が終了

する平成30年度までお務めいただきました。たとえば現日本写真家協会会長の野町和嘉氏がお受賞された平成5年度は熊切圭介氏、佐藤明氏、椎名誠氏、篠山紀信氏そして田沼氏が選考委員を務められておりました。受賞作の選考にあたっては真剣な議論がくりひろげられ、進行担当者が毎回手に汗握るほどだったと聞き及んでおります。

一方で米タイムライフ社との契約をはじめとしたその輝かしいご活躍にもかかわらず気さくで飾らないお人柄のためか、写真賞の贈呈式や祝賀会



平成5年度の講談社出版文化賞写真賞受賞者 野町和嘉氏（左）と選考委員の田沼武能氏（右）



平成13年度の講談社出版文化賞贈呈式では乾杯のご発声いただきました。

ではいつも周りにはなごやかな方々であふれており、笑い声が絶えませんでした。そのお人柄は作品群を見れば深く納得するところです。

弊社刊行物としては『ぼくたち地球家族』（1994年刊）、黒柳徹子氏と途上国のこどもたちとのふれあいを活写した『トットちゃんとトットちゃんたち』（2001年刊）などがあり、宗教や国の違いを超えて地球規模で「人間、をとらえ、子ども達に希望を見出そう」というあたたかな信念が作品として結実しています。

16歳の時にお住まいの浅草で東京大空襲に遭遇した田沼氏は、焦土と化した東京から昭和、平成、令和にわたって、変化著しい社会の移り変わりを経て、なおぶれることなく人間の本质を見続けてこられたといえるのではないのでしょうか。思い出すのはいついかなるときにも肩からカメラを下げておられた田沼氏のお姿です。ご生前の功績を偲び心からご冥福をお祈りいたします。（写真提供・講談社）



撮影：武藤奈緒美

田沼武能氏を偲んで

公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会
会長、文化芸術推進フォーラム 議長、

能楽師（狂言 和泉流）野村 萬
突然の御逝去の報に接し、
只々驚愕の思いでありました。

図らずも、令和元年に文化勲章受章の榮譽に共に浴したその年の暮、学士会館にて催された

著作権情報センター主催の著作権パーティーでお目にかかったのが最期であったと存じます。

田沼さんとは折に触れ様々お話しする機会があったものの、話題は常に其々がお預りしている組織が抱えている悩みや問題点であり、迂闊にも木村伊兵衛先生が師である事や、浅草生まれの江戸っ子である事までには話が及びませんでした。

戦後、駒込にあった染井能舞台（現在の横浜能楽堂）に、私の父、六世野村万蔵の舞台を木村伊兵衛先生が撮影にいらっしゃった事があり、今思うに不思議な御縁を感じられます。戦前戦後と激動の時代を共に呼吸し、優れた写真家である撮影者、実演家で被写体である己と、職業と立場は違えど、心を一にして共に在った時間を有難く思いつつも、先に旅立たれてしまった事に喪失虚脱の思いを禁じ得ません。次代を担う方々には、田沼さんが努力し築上げた礎を大切に、未来に向かって継承して頂きたいと強く念じております。

作品から滲み出る慈愛に満ちたお人柄、文化勲章受章式に御自身の分身ともいえるカメラを携えていらしたお姿を懐しみ、様々な場において御指導賜りました事を深く感謝申し上げ、心より御冥福をお祈り申し上げます。合掌

文士の写真

公益社団法人 日本文藝家協会
理事長、作家 林真理子

田沼さんご逝去の報を聞き、心からお悔やみ申し上げます。私ども日本文藝家協会は、田沼さんに本当にお世話になっております。



私どもが富士山のふもとにある富士霊園に、「文学者の墓」を創設したのは昭和44年のこと、現在では八百人ほどの会員がここに眠り、一般に公開されております。今から三年ほど前、この霊園入り口にある建物を貸すので、何かやりませんか、というお話をいただきました。法事などに使われていた、なかなか風情のある建物です。いろいろ話しあった結果、文学者のパネルを飾ろうということになりました。そしてどうせやるなら、田沼武能さんのような大家の作品がいいという声があがったのは、まことに無難なことだったでしょう。しかし田沼さんは快諾してくださり、貴重なお写真を貸してくださったのです。今では川端康成、尾崎士郎と井上靖、開高建、亀井勝一郎と、昭和を代表する作家たちが一堂に並び、おかげさまで大好評を得ています。

公開にあたり、文春ギャラリーでオープニングパーティーが開かれました。この時田沼さんは「戦時中に青春時代をすごした私は、なかなか勉強が出来なかった。私の勉強の原点は、この先生方にお会いして、いろいろなお話をうかがったことです。皆さまに感謝しています。」とスピーチされました。そのお姿が忘れられません。ご冥福をお祈り申し上げます。

田沼武能さんを偲んで

一般社団法人 出版物貸与権管理センター
代表理事、漫画家 弘兼憲史

田沼さんと初めてお会いしたのは、僕が2014年から理事を務める事になった出版物貸与権管理センターの総会、理事会の席でした。当時は先日亡くなら



れた藤子不二雄[Ⓐ]先生が長く務めた理事を退任される時で、藤子先生の代わりとってはおこがましいですが、コミック作家の代表として入ってくれということで理事にさせていただきました。

田沼さんのお歳を聞いてびっくりしましたが、朗々快活全くとってお元気で、普通にお話される時はニコニコ話されるんだけど、会議の席では別人の真剣な眼差しが、さすが写真家の眼差しだなあと感じて見えました。コロナの感染拡大で、センターもリアルでの会議や懇親会が中止となってしまっ、田沼さんとも顔を合わせてお話が出来ずにもう3年も経ってしまっ

たんですね。突然の訃報、本当にびっくりしました。

今回センターは理事の改選期にあたり、僕を含めて現在の理事の皆さん全員が再任され、また一緒に頑張っているなど思っていた矢先のことで大変驚きました。あの笑顔がもう見れないのだなと思うと大変残念です。僕はペンでコミック、田沼さんはカメラで写真。コミックと写真という表現方法は違えども、わかり合える部分もあり、だからこそ田沼さんが生きてきた足跡は、田沼さんの一瞬を切り取る映像の中に今も生きていと思うし、これからも生き続けると思います。大変惜しい方を亡くしたと思います。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

希望と平和への思い、今も田沼武能さんをしのぶ

毎日新聞社

会長執行役員 丸山昌宏

東京大空襲の炎をかいくぐった経験を持つ田沼さん。作品の数かずから、現状のその先に垣間見える“希望”そして“平和”



への思いがにじみ、心を揺さぶられます。

毎日新聞社が本社を置くパレスサイドビルに長くオフィスを構えておられ、写真コンテストの審査員をお願いしたこともありました。その際うかがった鋭い考察には深い感銘を受けました。

最後にお会いしたのは帝国ホテルで開かれた、写真家として初めての文化勲章受章を祝う会でした。にこやかで人なつっこくて、多くの出席者に囲まれていました。(写真右、毎日新聞社提供)



会では、ユニセフ(国連児童基金)の親善大使でもあった黒柳徹子さんが「いつまでも現役でいてください」と話されていました。黒柳さんがアフリカやアジアなどを親善大使として訪問されたときに同行していたのが田沼さんでした。世界の片隅で子どもたちに寄り添った作品からは、「どんなに過酷な世界に生きていようと、明日を信じて」という応援歌と、写真を見る者に「あなたは何ができるのか」という問いかけが伝わってきます。ロシアのウクライナ侵攻、安倍晋三元首相銃撃事件など、愚劣な行為がはびこる今だからこそ、田沼さんの作品がますます光り輝いて見えます。

いつまでも写真を撮り続けてくださると思っていましたので、ご逝去の知らせは残念でなりません。フィルムの保存活動や著作権問題などにも取り組まれ、日本の写真界発展への貢献は計り知れません。心からご冥福をお祈りいたします。



**今ここに一枚の葉書を手に
一般社団法人日本スポーツ写真協会
会長 水谷章人**

田沼武能先生の突然の悲報に接し、誠に痛恨の極みです。衷心より哀悼の意を表します。

田沼先生に初めてお会いしたのは、私が公益社団法人日本写真家協会に入会する時のことで、先生が40歳、私が30歳の頃になります。先生とはこれまで親しくお付き合いをさせていただきました。特に思い出深いのは30年ほど前、先生と一緒に国立西が丘競技場へサッカーの写真を撮りに行った時のことです。2人並んで撮影をし、写真について大いに語り合いました。「昔、スポーツを撮ったことがあるんだよね」とおっしゃっていた先生の笑顔が、まるで昨日のことに思い起こされます。写真の分野は違っても、田沼先生は私にとって尊敬する写真家であり、折に触れて励ましやアドバイスをくださる心強い先輩でした。ご自身の精力的な活動に留まらず、先生の眼差しは日本の写真界全体に向けられ、そのご功績には計り知れないものがあります。そして、常に尽力してこられたお姿に、多くのことを学ばせていただきました。

今ここに、一枚の葉書があります。今年の春に、田沼先生からいただいたものです。そこには近況や、お贈りした本への温かな言葉が綴られていて、その葉書のもう一面からは、先生が長年取り組んでこられた武蔵野の写真がやさしく語りかけてきます。まさかお別れしなければならぬとは、いまだに信じられない気持ちです。田沼先生、長い間、本当にありがとうございました。どうか安らかにお眠りください。

**懐かしいすぐれた人
公益社団法人 日本写真協会
名誉会長 宗雪雅幸**

「田沼さんが仕事中になられた」という知らせを受けたとき、6月1日の「写真の日」であったことを思い出し、いかにも田沼さん、と思ったことでした。

田沼さんとの深いかわりは日本カメラ財団のギャラリーで行われた「カタルニア・ロマネスク」写真展を見たのがきっかけでした。感動のあまり手紙を書き

送ったのが始まりでした。私が会長をしていた写真協会の副会長を引き受けてくださり、あの辛辣だが温かい、率直な物言いですいぶん助けていただきました。いつもカメラを手放さず、お働きました。

写真家の権利、著作権活動や作品保存などにも身を削って関わられました。写真館であった浅草の生家を震災で焼け出され苦勞して写真家の道を切り開くのですが、その挑戦のしぶとさ、熱心さには驚きます。「カタルニア・ロマネスク」もたまたま人物撮影を頼まれた堀田善衛氏の出会いから実現した写真撮影でした。

すごい勉強をしています。ライフワークとなった「世界の子どもたち」の写真も自費で志願し撮り続けた命がけの写真集です。すごい人だと思います。

あるサロンのパーティーで奥様の作られた飛び切り美味しいチョコレートを頂いたことがあります。その折、奥様の「とおーちゃん！」と呼びかけるお声を耳にして心が和みました。むかし僕らが子どもの頃、父をそうやって呼んでいたことを思い出しました。田沼さんは50歳という遅い結婚だったということですがこの温かいご家庭人でもあったのです。



**感謝を込めて繋ぐ想い
協同組合日本写真家ユニオン
代表理事 村田三二**

私ども協同組合日本写真家ユニオンは、貴協会の中で準備をされて、19年前に日本で初の全国組織の写真家の事業協同組合として誕生することができました。田沼先生の訃報に接し、当時のニュース冊子を読み返してみますと、先生からの激励メッセージが掲載されていました。そこには正式な協同組合設立のために実に44年もの歳月かけてようやく認可が下りて、完結できたとお言葉があり、改めて責任の重さを実感した次第です。

思い起こしますと私が田沼先生に初めてお目にかかったのは、女性誌のインタビューでご自宅に伺って撮影させていただいた時でした。それは30年も前のことですが、写真家を撮影することに緊張気味の私にたいそう温かく接して下さったのを覚えています。

生涯現役を貫かれた写真家として尊敬するのはもちろんのこと、長年にわたり写真界を牽引され、組織のリーダーをなさってきた先生に触発されるように私も



1989年6月 数寄屋橋で写真著作権の保護期間の法改正を求める街頭署名



1997年2月 '97JPS展公募作品審査 JCIII会議室



2001年5月 文部科学省での社団法人設立認可公布式



2001年12月 米国同時多発テロ事件「写真展示即売会」東京国際フォーラム

いつかは自分のためだけでなく、自分を育ててくれた写真界にお返しをするような生き方がしたいと感じるようになりました。それから四半世紀が経ち、ユニオンの理事となりましたことで、著作者団体協議会の会合で一緒にすることができ、それは私にとってはギアを一段上げて頑張るきっかけにもなりました。先生の終活リフォームの著書も拝読し、現在ユニオンでは写真家のための終活サービスにも取り組んでおります。

写真の日に旅立たれた田沼先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



田沼武能先生と歩いた武蔵野 むさし野写真の会

事務局 矢野靖博

「武蔵野だい好き人間」写真家、東松友一さんをはじめ、写真だい好き7人が田沼先生と撮影同行、プロアマの隔たりのないお気遣いに、心和む撮影現場でした。撮影は早朝、いつも奥様の愛妻弁当、私たちの分まで、撮影機材に人数分のお弁当、すごい重量です。

武蔵野の雑木林をはじめ、様々なシーンでは所かまわず横になったり、狙った被写体にはいつも1時間程そこにとどまります。まれに姿を見失うこともあります。そして、撮影帰りの先生はいつも泥んこです。

むさし野写真の会が発足して、2011年から2年おきに、田沼武能と7人の仲間による「それぞれの武蔵野」写真展をアイデムフォトギャラリー「シリウス」にて開催。2019年10月29日第5回写真展会期中、写真家、田沼武能氏写真分野で初めて文化勲章受章の報道を受け、会場がお祝いで祝福のあらしに。その瞬間を仲間と共有できた事。素晴らしい思い出として心の印画紙に焼き付いています。



6回展も盛況裡に終わり、写真展は足かけ12年になりました。次回もやるぞ!田沼先生として7回展はかなわぬ事となりましたが、先生の意志を継ぎ、2023年に今までいっしょに歩いた「それぞれの武蔵野」7写真展を追悼写真展として検討しているところです。

今後とも、むさし野写真の会に変わらぬご指導を賜れば幸いです。(写真提供・矢野氏)



2006年5月 文化庁に日本写真保存センター設立要望書を提出



2010年8月 創立60周年記念写真展「おんな」オープニング 東京都写真美術館



2012年9月 「生きる」フォトキナ展 ドイツ連邦共和国 ケルン市ケルンメッセ



2019年11月 写真家初の文化勲章を受章 「宮殿松の間」(代表撮影:産経新聞社)



田沼武能先生を偲んで

富士フィルム株式会社

取締役常務執行役員 イメージング

ソリューション事業部長 山元正人

田沼武能先生は、日本のプロ写真家を代表するお立場で、21年の長きにわたり、公益社団法人日本写真家協会会長を務められました。その間、プロ写真家の権利擁護から、表現、創作活動を通じた写真文化の振興、人材の育成、著作権の啓発等、日本の文化発展に多大な成果をあげられました。田沼先生の並なみならぬご尽力に心より感謝申し上げますとともに、写真家として生涯現役を貫かれた姿勢に心から敬意を表します。

田沼先生には、弊社フォトサロンで何度も個展を開催いただきました。中でも2020年にフジフィルムスクエアで開催された「わが心の東京」では、「生まれ育った浅草が1945年の大空襲で灰燼に帰す中、自らも業火をくぐって命からがら生き延び、どん底の生活が始まった。それでも嘆くことはなかった。自分には夢があったからだ。」というご挨拶をいただきました。ユニセフに同行して干ばつや貧困に苦しむアフリカ、紛争地帯など40か国に上る世界各国の子ども達を撮り続けられた写真家としての原点が、このご挨拶のお言葉にあったのではないかと改めて感じております。

弊社が創立80周年を記念して立ち上げた、「フジフィルム・フォト・コレクション」には、田沼先生の作品を大切に収蔵させていただいております。その作品に込めた思い、そしてご遺志を受け継いで、当社はこれからも写真文化の発展に貢献してまいります。

生前の御恩に深く感謝申し上げ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



田沼武能先生を偲んで

東京工芸大学 学長 吉野弘章

田沼武能先生は、1949年に当時は東京写真工業専門学校という名称であった本学を卒業し、1995年より2001年まで芸術学部写真学科の教授として教鞭を執られた。2002年からは客員教授および名誉教授となり、また2001年から2021年まで20年にわたって本学の同窓会長を務めてくださった。

近年では親しくお話しさせていただく機会も多かったが、常に率直で暖かい人柄であり、一方で物事の本質を見抜く鋭さにはいつも感心させられた。そして田沼先生にお目にかかる度に心に浮かぶのは「生涯現役」という言葉であった。90歳を過ぎても好奇心と探究心を持ち続け、いつも「もっと見る人の心を打つ写真を撮りたい」とおっしゃっていた。



写大ギャラリー 田沼武能写真展
「童心—世界の子ども」にて
2019年3月5日

そんな田沼先生の写真展を、本学の中野キャンパスにある写大ギャラリーで2019年に開催した時のこと、会場の作品レイアウトにいらした先生は、撮影機材が一杯に詰まった大きなカメラバッグをお持ちで、聞けば午前中にライフワークの一つである武蔵野の撮影に行ってきたという。それから1時間ほど一緒に展示作業をした後、帰宅されるのかと思いきや、撮りたいものがあるので再び武蔵野に戻るとのことだった。その時に手渡した、田沼先生のカメラバッグのズシリとした重さが、いまも手に残っている。まさに写真家として「生涯現役」を全うされたことは立派だった。奇しくも命日である6月1日は「写真の日」であり、これから毎年「写真の日」を迎える度に、私たちは田沼先生を偲び、その功績にあらためて感謝することになるだろう。

田沼武能先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



田沼武能さん回顧

東京写真記者協会

事務局長 渡辺幹夫

「写真はね！好奇心を忘れちゃあ、撮れないよ」東京都内で年末恒例となる東京写真記者協会主催の報道写真展に訪れ、居合わせた写真を学ぶ大学生に語りかけた。

田沼さんのお付き合いは新聞社のデスク時代からで、ほぼ四半世紀にもなる。新聞社もご多分に漏れず個性豊かな記者たちの集まり故に、ときに組織論で話が盛り上がった。「写真家というのは個性の集まりでしょ。それをひとつにまとめるのは至難の業だったのよ」と日本写真家協会成り立ちのよもやま話をよく拝聴した。長年かけて個性豊かな写真家集団をまとめあげ、その結果、写真を文化芸術として世の中に認知させた功績と、写真文化の発展に寄



都内で行われた名取洋之助展で等身大の師匠・木村伊兵衛と自身の写真が展示され、記念のポーズをとる田沼さん。2013年12月18日

与した力は絶大なものとなった。

ここ数年は、年間を通じて優秀な報道写真を表彰する東京写協表彰式に来賓としてお招きし、第一線で報道の現場に携わる新聞・通信社の写真記者に向けて「喝」を入れてもらっていた。常に自らカメラ持ち歩いて写真を撮る。その活力の源は「肉」。大の肉好きで、何歳になってもそのパワーは衰えなかった。とはいえデジタル写真が台頭し、誰でも容易に楽しめる時代になったことで、写真自体が安価なものになり、写真家そのものの存在価値が薄れていくことを憂いていた。報道写真展会場で、学生から「これまで撮影してきたなかで一番いい写真は」と問われると「あす撮る写真かなあ」と微笑みながら答える。

生涯現役にこだわった報道写真家だった。



自宅作業場には、自らの写真とともに、恩師・木村の写真も管理していた。2016年8月22日



文化勲章受章記念パーティーを前に、写真著作権の立役者・瀬尾太一さんとともに。2020年2月10日

【日本写真家協会 名誉会員からの寄稿】

田沼武能さんを偲ぶ

名誉会員 川田喜久治



1950年代、創刊当初の『芸術新潮』『新潮』などのグラビアで田沼さんの写真を初めて拝見しました。日本文学の作家たちの風貌を日常の中で端正に捉えていたのが心を打ったのです。まもなく私も文芸誌の仕事をするようになって同じような課題を与えられましたが、どう取り組んで良いのか途方に暮れたものです。

1960年のはじめ、日本にマグナムをと「集団フォト」が作られ、木村伊兵衛、土門拳、三木淳、大竹省二、稲村隆正、長野重一、田沼さんもその中で活躍されましたが、のち、タイム・ライフの仕事が中心となり、グラフ・ジャーナリストとして数多いレポートを残されました。特に「ソマリアの子たちをカバーした写真ではそのやさしい眼差しのなかに、ただならぬ怒りが隠されていることに気づき息のみました。

『カタルーニア讃歌』田沼さんとの共著 1981 新潮社版のあとがきに著者である堀田善衛が書いています。

「写真家の田沼武能氏とは、すでに30年来の知り合いである。人々の、さりげない日常をとらえるについての、氏に独特なアングルには、つねに感服をさせられて来たものであった。」(原文のまま)と。そのアン

グルとは、人々の面影をやさしさの光と影にかえた賛辞に違いありません。木村伊兵衛、土門拳という大いなる先達に愛され、両氏の写真集、評論集などを編みつけ、師弟の礼と無私の心を明らかにしたのも深い教訓でした。写真文化へのご尽力にたいしての感謝とご冥福を心からお祈り申し上げます。

さようなら田沼武能さん

名誉会員 木村恵一



6月1日写真の日の翌日、田沼武能さん逝去の知らせが突然伝えられてきたが、俄かには信じられなかった。ほんの一週間前、会長をしている全日本写真連盟で近くに開かれる理事会のことなど電話で元気に話を交わしたばかりだったので、声もなく暫し呆然としていたことを憶えている。

田沼さんとの出会いはもう六十数年前に遡る。母校の教壇で、師でもあった渡辺義雄先生のお供をして、銀座で開かれている木村伊兵衛先生の写真展に伺った際、会場で紹介されたのが初めてでした。1950年代から60年代にかけて、田沼さんは東京下町の風土と子ども達の写真を精力的に撮っていたことはよく知られていますが、同じ東京下町生まれ育ちということもあって、その日をきっかけに親しく声をかけてくれ、つき合いもしてくれました。その後、田沼さんは新潮社の雑誌『藝術新潮』などで昭和時代を賑わせた著名人の人物写真を撮りはじめ、それらの多くの写真の表現などが高く評価され、プロ写真家としての確固たる地位を築かれた。画家、作家、音楽家、役者など、時代を創り上げた気難しい著名人たちを手玉にとるように鮮やかに個性を引きだす鋭さと共に温かで豊かな想いが表現された多くの写真がとても魅力的でした。

時は移り1976年、世の中少し落ち着いてきた頃、田沼さんの声がかかりで東京下町生まれの写真家が年1回ぐらい集まってはどうかということで、花見の会が始まった。第1回は上野で濱谷浩さんを筆頭に10人程度だったが、いまは“東京生まれ写真関係者花見の会”という長たらしい会名でもう48年も続いている。写真家の他に編集者やカメラメーカーの人まで加わり、メンバーも40人を超えるように賑やかな会になった。コロナでここ2年ほど中止になったが、上野池之端の東天紅の階上より満開の美しい桜並木の夕暮れを眺めながら、田沼さんとゆっくり盃を交わしたのが最後になってしまった。浅草下町特有のべらんめえ口調で春のひとつときのお酒を楽しんだ日びがもう来ないのが、とても残念です。生前の偉大な功績を讃え偲びつつ、安らかに眠りにつかれますことを願い、ご冥福をお祈りいたします。合掌



心よりご冥福を

名誉会員 栗林 慧

フィルム写真時代を共に歩んで来た先輩達がここ数年の間に次々と世を去っている。そしてこのたび長年会長を務めてこられた田沼武能氏が亡くなられた。

その日は奇しくも6月1日写真の日だったと聞かされて、人生を写真の世界で生きて来られた氏らしいその終わりに、多くを感じないだはいられない。田沼氏との出会いは、もちろん自分も在籍50年を超す古株会員であるので、その間ときに会合等で顔を合わせることもあったが、目指す分野が異なることもあり、親しく語り合うことはなかった。

近づきになれたのは、氏が会長になられてからである。個展や授賞式の際に案内状を差し上げると、必ず来て下さって、その際「僕は虫は嫌いだけど、栗林さんの写真は好きだ」とあの親しいにこにこ顔でいって下さるのが、本当に嬉しく感じたものである。

この世を去られて、今頃はきっと、先に逝った仲間の写真家達に迎えられて、フィルム写真時代の楽しかった思い出に花を咲かせておられることでしょう。

心よりご冥福をお祈り致します。



ありがとう 田沼さん

名誉会員 齋藤康一

6月1日からの福島市での私の個展「昭和の肖像」オープンの翌朝、一番に受けた電話が田沼さんの訃報。5日前に葉書をいただいたばかりなのに。

「(中略) まだ全快まで行かず静養中です。本来ならば写真展を見に行きたいのですが、ままならず失礼させていただきます。小生の顔を出版して頂き感謝しています。御礼まで。田沼拜。」

田沼さんの写真の下に喪章を付けたのですが、お元氣な氏の顔を眺めていると涙が止まりませんでした。

私のJPS入会(1959年)以前、学生時代からの長いお付き合いをさせていただいており、思い出は尽きません。たぶん私は21歳の頃と思いますが、雪の夜でした。「公演が終わったら有楽町の事務所に帰るから乗っていかないか。」飯田橋付近にあった頃の観世能楽堂。田沼さんは『芸術新潮』の仕事。私は趣味の延長みたいなもの。声を掛けられたことが嬉しかった。田沼さんの車は乳母車の親分みたいなシトロエン。ガッタン・ガッタン、フワフワみたいな乗り心地で、車の中での話も僕にとって楽しかったし、何よりも憧れの先輩。胸がいっぱいになった。

スキーの思い出もあります。当時刊行されていた『サンケイカメラ』編集者が中心になって、トマド会(止

まれぬ、曲がれぬ、どいてくれ)というクラブを作り20人程の会員が蔵王、志賀高原に数日遊びに行っていました。田沼さんはトニー・ザイラーの黒い稲妻にあやかっか、上下黒のファッションで決め、颯爽と滑っていました。札幌オリンピック会場で、久しぶりにバツリお会いした折、「また、滑りましょうか」と私。下町生まれの江戸っ子弁で「冗談じゃあねーよ、今は暇もなければ、体ももたねえよ。」と超忙しい田沼氏。2人で大笑いしました。日本写真家協会の会長になられた頃から、会員達の写真展などのオープンパーティーには出来る限り出席し、その度ごとにご挨拶。協会の運営、会議等々。世界を周りながら、撮影に原稿にとの仕事ぶりは驚くばかりの日びといえましょう。写真家として初の文化勲章を2019年に受章されました。美しく聡明な奥様。温かい豊かな家族に囲まれ、生涯現役。93歳天寿を全うされたものの、残念でなりません。



田沼氏の事務所にて
齋藤康一撮影

どうか安らかに。出会えたこと、お世話になりましたこと、心から感謝しております。ありがとうございました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



追悼 田沼武能氏を偲ぶ

名誉会員 富岡畦草

田沼武能氏との出会いは、戦後わが国が復興に向けて国民皆がそれぞれの道で一丸となって頑張っていた高度成長期でした。都会で生まれ育たれた田沼氏は、誰にも真似のできないくらい精神的に世界を股にかけて活動されてきた印象が全てですが、23歳で片田舎から出て来て孤軍奮闘していた僕にとっては憧れの同士であったといえます。僕もわが子の成長記録をライフワークとして長女誕生と同時に26歳から32年間毎日撮り続けましたが、途中長女の発症に触れ意気消沈しているころ、世界中の子ども達の生活を記録に収め続けている田沼氏の生き方にどれほど励まされたかわかりません。そして、何より日本における写真家の社会的地位向上に専心された功績に感謝の念でいっぱいです。特に日本写真著作権協会立ち上げにも尽力され、わが国における写真家の保護や写真界全体の価値評価を高めてくださり、多くの写真家が救われたと思います。カメラ業界は勿論ですが、社会全体の経済効果にも繋がったと申せましょう。

ここ20年間でデジタル化が進みデジタルカメラも益々性能が良くなりましたが、田沼氏の写真集を改めて拝見すると映像技術が変容する現代でも、田沼氏の一貫したメッセージ性の強さは永遠であり、生涯写真

を愛した生き様は、作品そのものであり永遠に残ります。次女と孫に記録写真を託し、96歳を迎える僕も田沼武能氏の急逝に際し、わが人生を振り返っております。同士よ、ありがとう。合掌。

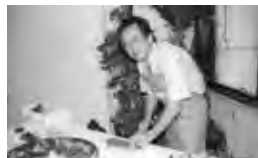


兄貴分的大先輩、田沼武能さんの死を悼む

名誉会員 中谷吉隆

生涯現役を貫いていた、田沼武能さんの天界行きは残念でならない。私は、昭和30年、東京写真短期大学(現東京工芸大学)に入学し、三堀家義さんの助手になる。当時、有楽町の毎日新聞社内のサンテレフォトに事務所があり、田沼さん、佐伯義勝さん、吉田潤さんらが机を並べていた。そんな関係から、日び、雑誌の仕事などをバリバリとこなし、一方でJPSや集団フォトなどで作家活動をしている若手写真家の田沼さんを身近かにしていた。大学の先輩でもあったが、浅草生まれで、べらんめー調の田沼さんは兄貴分的存在でもあった。たまに撮影の手伝いをさせてもらっていたから、正月に、歴代の助手や写真関係者がアパートに集まる会の片隅にいることもあった。仕事の話や写真論を交わされ、最後は酒宴となるのだが、その頃になると酒をたしなまない田沼さんは、さっさとその場を離れていた。そんな時どきに、被写体へのこだわりなどを学んだものだった。書を書家の矢萩春恵さんに習ったのも、こだわりの一つだろうが、なんといっても50歳まで独身で、「極めて晩婚の男」といわれただけに、料理づくりのこだわりは、特別ではないだろうか。

写真はその一コマで、新宿コニカフォトギャラリーでの個展のオープニングパーティー用に、自ら包丁を握り、参加者に腕前を披露し振る舞った。1990年のことである。



パーティーの料理を作る田沼氏
コニカフォトギャラリーにて
1990.10.24 中谷吉隆撮影

今年2月、母校東京工芸大学のタルボット賞審査会でご一緒したのが最後となったが、とても93歳を間近にしたとは思えない動きだった。今は、ご冥福を祈るのみである。ゆっくりお休み下さい。合掌。



田沼武能氏を悼む

名誉会員 松本徳彦

写真の記録性とその価値を受け続けたい。

敗戦後間もない焼野原が広がる銀座8丁目のビル内で、1948年9月に、木村伊兵衛、渡辺義雄、土門拳、林忠彦、藤本四八

など十数名で発足した「写真家集団」と、翌年3月に発足した「青年写真家協会」秋山庄太郎、石井彰、石井幸之助、稲村隆正、長野重一、芳賀日出男、藪部澄、三堀家義、田沼武能らの若手写真家によって結成された協会とが糾合して1950年5月誕生したのが「日本写真家協会」で72年前のことである。

ここに20歳足らずの田沼さんの名がある。爾来、協会は復興経済の波に乗って成長し続け、60年後の2010年には1750名を超える会員を擁する公益法人組織に成長した。

この間、他の分野と著しく不公平な写真著作権（発行または製作後10年）の下での活動が続いた。歴代の会長はこの差別を解消しようと著作権法の改正運動を続けてきた。1971年にやっと法が全面改正され、著作者の死後50年（1997年）と不公平感は解消したが、田沼さんが最後まで改正を望んだ旧法で保護期間が1966年で消滅した写真の遡及は解消されなかった。

次の活動は先輩たちの撮影されたフィルムが次つぎと廃棄されたりして、写真の記録性が失われている現状を憂慮して、撮影フィルムを長期保存する「日本写真保存センター」の設立を文化庁に要望（2006年）した。翌07年から文化庁委嘱による「写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」調査費が設けられ、調査・収集が始まり、現在約40万本のスキヤニングを行うなどしているが、コロナ感染症禍の影響による支援組織の経費減で、苦境に至っているが、経費削減などで活動を縮小している。田沼さんの願望、すなわち「写真の記録性の大事さ」の火を消すことにならないように、私たちは努力しなくてはならない。



国立映画アーカイブ相模原フィルム収蔵庫にて、2012年10月



最後まで現役を貫いた人生 名誉会員 水越 武

93歳で田沼武能さんがお亡くなりになった。6月1日に逝去されたが、前日まで全日写連の会報の原稿に不備がないか、電話でやりとりがあったとのこと、まさによく話されていた「生涯現役」の見事な人生であった。80歳を超えると何かと歳を気にかけたりするが、自分より10歳年長の田沼さんがお元気で仕事をされている、その存在にどれほど励まされ勇気をいただいたことか知れない。

追悼文を書くにあたって、いただいた『わが心の残像』（文芸春秋、1991年）を取り出して目を通し始めたら、時間を忘れ一気に読み通してしまった。各分野の第一人者や長老110人の肖像写真と、撮影時の印象

と人となり綴られている。作家、学者、アーティストが多く、政治家、社長、アスリートが皆無なのは田沼さんの好みか、あるいは時代によるものだろうか。初めて拝見した時よりも今回は丹念に見たためか、数倍印象深く見せていただいた。これは30年という決して短くない時の流れに、この著作が成長を遂げたのか、それとも私が様々な経験を積むことで深く理解できるようになったのだろうか。岡潔を語った章では、以前に岡潔の本を2、3冊読んでいた私は、交友関係などいろいろと想像を巡らしながら目を通して短編小説のような味わいを感じた。

「わが心の残像」に取り上げられた知識人110人の方はそれぞれ個性的で立派な仕事をされ、ほとんどの方が文化勲章などを受章されている。田沼武能さんも今は黄泉の地でこの人たちの仲間になられているに違いない。畏敬の念を込め、私の追悼文としたい。

【賛助会員からの寄稿】

田沼武能先生を偲んで

株式会社アイデム コーポレート機構統括部 望月彩子

田沼武能先生がご逝去されたこと知った6月2日、私は大阪で写真コンテストの作品展を設営しており、手が震えたのを覚えています。田沼先生には子どもを対象としたコンテストで16年にわたり選考委員長をしていただきました。1点1点真剣に向き合って審査をしていただき、表彰式ではいつも子ども達に温かなメッセージを贈ってくださいました。ギャラリー「シリウス」では田沼先生と仲間たちの写真展を定期的開催、コロナ前まで開催していたパーティーでは沢山の笑顔で溢れていました。どなたにも変わらず接して下さるそのお人柄、いつお会いしても情熱をもって撮影を楽しんでいらっしゃる姿、写真界のために尽力を惜しまない姿勢、年齢は存じ上げていましたが、いつまでもお元気でいらっしゃる信じました。偉大なる生涯写真家の先生を失い心が悼むばかりです。心よりご冥福をお祈りします。合掌

田沼武能先生を偲んで

エプソン販売株式会社 代表取締役社長 鈴木文徳

田沼先生とはエプソンのフォトコンテストの審査員をはじめ、20年以上のお付き合いとなります。

コンテストの審査会においては、応募された作品をじっくりかつ丁寧に、時にはこやかに、時には厳しく審査されていました。そして表彰式においては、入賞者の皆さんと作品について楽しそうに語られていたことを思い出します。作品はもとより、誰とでも同じように、優しく接して下さった田沼先生の人柄のすばらしさに何より感激しました。

エプソンのフォトコンテストの礎を築いていただい

ただけではなく、写真ファンとエプソンを繋いでいた
だいた田沼先生に感謝申し上げるとともに、心よりご
冥福をお祈りいたします。

田沼武能名誉会長を偲ぶ

OM デジタルソリューションズ株式会社

代表取締役兼 CEO 杉本繁実

田沼武能様のご逝去の報に接し、在し日のお姿を偲
び、心からご冥福をお祈りいたします。貴協会の会長
職をはじめとして、関係団体の要職を歴任され、写真
文化の向上、写真家の地位の向上、写真愛好家の指導
に尽くされたこと。数多くの作品を通して、その時代
時代を克明に写し出されたこと。何より等身大の子
どもの笑顔の作品が多くの方に感動と安らぎをもたら
されたことを改めて思い起こしております。

写真、カメラ業界に携わるもののひとりとして、万
感の思いを込めて感謝を申し上げ、心から哀悼の意を
捧げます。

田沼武能先生の思い出

株式会社キタムラ ファウンダー名誉会長 北村正志

お目にかかる前から『世界の子どもたち』という写
真集を拝見し、先生の眼差しを感じておりました。

カメラのキタムラではフォトコンテストに力を入れ
ており、先生に長年にわたり審査員やNPO フォトカ
ルチャー倶楽部の顧問をお願いしておりました。お目
にかかるたびに「写真保存センター」の重要性を話さ
れていたことを思い出します。

2020年の帝国ホテルの文化勲章祝賀会の華やかな
パーティーで、奥様とともにお元気で嬉しそうになさ
れていた顔を今でも思い出します。年齢の離れた私に
も同齢のような話し方をされるお人柄でした。

田沼先生のロケで教えていただいた事

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

プロフェッショナルフォトサポート部 部長 中村真一

田沼先生との数ある思い出の中で最も印象深いの
は、TV番組「写真家たちの日本紀行」のロケ現場です。
これは写真家の撮影現場に立ち会える貴重な機会であ
り、私のその後の考え方に大きく影響を与えました。

田沼先生の放映回は2010年でした。改めて当時の
メモを見返すと、田沼先生のお考えがありがたくと甦っ
てきます。

「いつ行っても撮れる観光地的な写真はつまらな
い。偶然の重なりで美しさは倍加する」「子どもは社
会の鏡。子どもを撮ることでその国のバックボーンが
見えてくる」「自然と人間の共生が大きなテーマ。自
然の森を通して人との繋がりが見えてくる」

子どもや森を撮っているようで、実は社会そのもの
を切り取っていた田沼先生。うわべだけに捉われず物

事の本質を求めるお姿をお手本に、私も精進してまいり
ます。田沼先生、今まで本当にありがとうございました。

編集者視点を持った写真家に頭の下がる思い 株式会社ワン・パブリッシング

CAPA編集長 菅原隆治

毎日新聞社の一室、うず高く積まれた書類の壁と暗
室の間を半身になって通り抜けると、その奥の小さな
ソファに腰掛ける柔らかな笑顔。それが初めて対面で
田沼先生とお会いしたときだった。木村伊兵衛の特集
はその場で構成が決まり、当時のお話は尽きないため
取材メモは何枚にも及んだ。ただ、記事をイメージし
てお話しされるのでメモをまとめやすく、お話の要点
は力が込められるからキーワードがそのままタイトルに
なる。まだ若造だった私の気持ちに優しく寄り添って
くださるインタビューはとてありがたく、頭の下がる
思いであった。それ以来、機会を見ては小誌の企画に
お付き合いただいたが、最近では対談記事に出演さ
れ楽しいエピソードやカメラのお話をたくさん語って
いただいた。あの笑顔と機微に聡いユニークなお話
にもう触れることがないと思うととても寂しい。

天上から見る此岸はどうですか。どうか安らかに。

挑戦したい

清里フォトアートミュージアム 事務局長 小川直美

「ヒヨコ同然の私の写真など、買ってくれるところ
はない。すべて勉強と、自分で自分をなぐさめては被写
体に向かっていった。」仕事を掛け持ちして買ったライカを
手に下町でシャッターを切る青春時代を過ごされた田沼
先生に、当館は、35歳以下対象の公募「ヤング・ポート
フォリオ (YP)」の2002年度選考委員をお願いしました。

「YPは若い写真家を奮い立たせる要素になっているん
じゃないかな。そういう目標があることは人生にとって素
晴らしいこと。私はもう全く権利がなくなっちゃってます
けど、若かったら挑戦したいですね (笑)。」若わかい
気持ちのまま旅立たれた田沼先生の、これは73歳当時
の本音だったと思います。謹んで哀悼の意を表します。

田沼先生の事務所に向った思い出

株式会社ケンコー・トキナー 広報・宣伝課 田原栄一

田沼先生との思い出といえば、2015年のケンコー・
トキナー新社屋披露にJPS会長としてお越しいただ
いたことです。2階のショップが仮オープンというこ
とで、膝サポーターを購入いただいたのですが、後日、
田沼先生から「サイズが大きすぎる」と電話があり、
一回り小さいサイズのものとの交換することに。クレ
ームで訪問なのですが、先生の事務所を訪問できるとい
うことで、内心ワクワクしていました。その時、お伺
いしたお話では、フィルム時代のフィルムよりも、デ
ジタルのHDDの方が、置き場所が多く占めていると

のことでした。いつの日か、先生の撮影された写真で先生をしのぶ写真展ができればと思います。

田沼武能先生のご逝去を悼む

株式会社シグマ 代表取締役社長 山木和人

長年にわたり、日本写真文化の発展に多大な貢献をされてきた田沼武能先生を失ったことは痛恨の極みです。日本を代表する写真家としてフロントラインに立ち、写真文化の新しい可能性を常に切り拓いていらっしゃった一方で、日本写真家協会会長として長年にわたって日本写真業界の維持・発展、若手写真家の育成に心血を注がれたその功績は誰もが認めるところであり、私たちにとっては道標ともいえるべき存在でした。

先生のあの明るい笑顔と大きな声で勇気づけられた方がどれだけ多くいたことでしょうか。先生、本当にありがとうございました。どうか安らかに眠りくださいませ。

写真家の凄さを見せてくれた人

株式会社写真弘社 代表取締役社長 柳澤卓司

田沼写真の裏方として50年余、常に本音で語る先生から写真のことだけでなく、人生の多くを学ばせていただきました。私の記憶では田沼先生と初めてお会いしたのは、私が未だ高校生の頃だと思います。学校の帰りに父親の会社に立ち寄り写真整理やお使いをしていました。その日は2人の来客があり、木村伊兵衛先生は時どき父親のお使いでお宅に伺っていましたので分かりましたが、連れの若い方は初めての方でした。木村先生と父親が歓談している合間に彼を「たぬちゃん、たぬちゃん」と声をかけていたのが印象的でした。その後10年以上、全くお会いする機会がなくなりました。私が30歳を過ぎて父親の会社に入社することになり、初めて担当した写真家が田沼先生でした。

田沼写真の真髄は、私と年齢差が10年以上の先輩でありながら仕事上では常に対等に発言せよ、とのことでしたから、時には大声で自論を戦わせることもあり、気がつくとも何時も先生の叱咤激励の本心は、常に弟を諭すような口調であったことを思い出します。

私は写真家の凄さを田沼先生に見た思いが致します。本当に長い間お世話になりました。感謝。

写真業界での功績を称えて

株式会社タムロン 代表取締役社長 鯉坂司郎

田沼武能先生のご逝去を悼み、心からお悔やみ申し上げます。田沼先生は文化人や世界の子どもたちを多く撮影された素晴らしい写真家である一方、日本写真家協会会長、日本写真著作権協会会長、日本写真保存センター代表などを歴任され、長年写真家の地位向上にご尽力されました。その功績が認められ、2019年には写真家として初めて文化勲章を受章されていま

す。弊社はJPS企画展『生きる』の協賛を機に、親交を深めさせて頂きました。ご生前のご功績を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

新製品発表会の思い出

株式会社ニコンイメージングジャパン 執行役員

カスタマーリレーションズ本部副本部長 森 真次

田沼先生から沢山の思い出をいただきました。写真家にとって写真そのものが全てであるように、カメラメーカーにとって世に送り出すカメラが全てです。今でも忘れない2007年秋新製品発表会にわざわざ先生にお越しいただいた際、我われに「おめでとうございませ」との言葉をかけていただきました。そのさりげない祝辞の中に「復活出来てよかったね」という温かい思いがひしひしと伝わってきました。その頃のニコンは描写性能がなかなか上がらず、プロカメラマンの皆さまから叱咤激励の言葉を多数いただいていた。ニコンはフルサイズデジタルカメラを出せないままでいわれましたが、その噂を撥ね付けるように発表したのです。その時以来私は先生から多くの励ましやお叱りをいただきました。感謝は尽きません。

国内外での功績を称えて

株式会社ビービーエス通信社

代表取締役社長 ロバート・L・カーシンバウム

田沼武能さんは、戦後日本の写真界をリードし、国内外で活動を行った重要な写真家として記憶されるでしょう。

Tanuma-san will be remembered as a significant leader in post-war Japanese photography, working in an environment that involved both domestic and international worlds.

Robert L. Kirschenbaum

President

Pacific Press Service

田沼武能先生を偲んで

富士フイルムイメージングシステムズ株式会社

代表取締役社長 松本考司

田沼武能先生は、時代を記録するドキュメント写真家として第一線でご活躍された一方で、写真家の著作権を確立するためにご尽力されるなど、写真業界の発展にも多大なるご功績を残されました。

私ども田沼先生には、長い年月に渡り、様ざまなご協力やご指導を賜り、時には厳しいお言葉をいただきながらも写真文化発展に向け田沼先生と共に過ごせたことは、大変貴重な経験となりました。改めて深く感謝申し上げます。2022年6月1日、奇しくも「写真の日」に天に召されました田沼先生。田沼先生のご遺業を継ぐべく、残された私どもで精一杯、写真業界の

向上に尽力して参りますので、願わくば、末永く私どもの行く手をお見守りください。ご冥福をお祈り申し上げます。

田沼武能先生をお偲び申し上げて…

株式会社フレームマン 代表取締役社長 奈須田一志

田沼武能先生の悲報を知り、未だに信じられない思いで一杯です。SNSで訃報を目にして手が震えました。

ある方にお電話でお聞きして間違いのないことを確認して愕然としました。一気に身体から力が抜けて、暫く放心状態だったかと思えます。奥様、ご家族の皆様もどれ程お辛いことでしょうか。お身体にはどうかお気を付けて下さいませ。田沼先生とお目にかかる予定がございまして、少し前にお電話でお話を「少し体調が悪いからちょっと待っていてくれ～」と…これがまさかの最後の会話になってしまいました。

私のような若輩者に、時には厳しくご指導を下さり、普段は暖かい口調で冗談を交えてからかって下さいました。例えば新型コロナ禍の中、某ギャラリーでお目にかかった際には、第一声が「お前さんはマスクなんかしなくてもコロナが逃げて行っちゃうよ!」と(笑)

いつも「おう…」の後に必ずジョークを添えてお話をして下さいました。

常に仰っておられました生涯現役を貫き通されましたが、もっとお元気でいて下さると信じていました。

たくさんのお言葉に励まされました。

田沼武能先生…本当に有難うございました。

お疲れさまでございました。少しごゆっくりされて、ご家族そして写真業界を見守っていて下さい。

衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

心の財産となった先生のお言葉

株式会社堀内カラー

取締役社長 吉本高久

田沼先生には、カラープリントが一般的になってきた時代からお世話になり、ポジフィルムをデューブする際など、その色味や味わいについて、熱心にご指導いただいたと聞いております。また2015年、「日本写真家協会賞」をいただいた際のお言葉を決して忘れることはありません。弊社前社長が「今後も裏方として写真業界の発展に努めて参ります」と申したところ、田沼先生は「貴方たちは裏方ではなく、パートナーです」といつて下さいました。この言葉にどれだけ励まされたことでしょうか。写真家だけでなく、関係業者、協会と写真業界全体を発展へと導かれた田沼先生。そのご功勞に敬意を表し、心より哀悼の意を捧げます。

田沼先生 ありがとうございます

株式会社山田商会

取締役社長 志村哲文

写真関係者の集まりの中には、いつも笑顔の先生の姿がありました。そして、いつもご愛用の撮影機材を

取めた大きな重いバッグを携えておられました。そして、いつも「座っていても写真は撮れない。」といい続けておられました。こうして先生は私達に全身で「写真とは」を教えてくださいました。

先生の写真に対する執念と並外れたエネルギーを受け継ぎ、写真業界の更なる活性化に向けて一汗二汗三汗をかいて、先生の長年にわたるご尽力、ご苦勞に少しでも報いてまいりたいと存じます。

田沼先生ありがとうございました。安らかに眠みください。

田沼武能氏を偲ぶ <京都での思い出>

ライカカメラジャパン株式会社

代表取締役社長 福家一哲

田沼先生には何度かお目にかかる機会がありました。が、ゆっくりお話を伺うことができたのは、弊社ライカギャラリー京都にて、個展「戦後を生き延びた子ども達」を開催いただいた時でした。とても柔和なお顔とお話し方、そしてお話の内容はユーモアと機知に溢れ、トークショーも掛け合い漫才のように面白く、会場の空気をひとつにされていました。

偉大な写真家であり、お仕事には大変厳しい方と伺っていましたが、とても優しいお人柄で、常に周りの方がたに気配りを欠かさな方でした。

もうお目にかかれないのはとても残念ですが、雲の上から写真、カメラに関わる我々のことを微笑んで見守って下さってらっしゃると感じています。大変お世話になり誠に有難うございました。

田沼武能氏を偲ぶ 「夏の日のおしほり」

ライカカメラジャパン株式会社

Marketing 米山和久

写真展のご相談などで何度か田沼武能さんのご自宅にお邪魔したことがあります。田沼さんはたかが一会社員の私にも気をつけていただきました。おしほりが…。暑い夏の日のおしほりほど嬉しいものはありません。しかも田沼さんが自ら入れてくださったお茶とお菓子。恐縮しながらも美味しくいただきました。

仕事には厳しく、その昔、写真専門誌のテストレポートでは歯に衣着せぬ評価で厳しいお言葉をいただいたこともありました。しかしながら、世界の子どもの写真を観ていると、本当に優しい心をお持ちの方なのだつくづく感じます。その優しさ、そしておしほり、私は決して忘れることはないでしょう。

初めてお会いしてから30年以上の長い間、本当に色いろとお世話になりました。

(構成／出版広報委員会、常務理事・小池良幸)



笹本恒子写真賞
Tsuneko Sasamoto Photography Award

第5回受賞者決定!! 西野嘉憲さん

野生の命と真っ正面から向き合う、古来からの伝統的な狩猟に生きる人びとを撮り続ける

わが国初の女性報道写真家として活躍された笹本恒子(1914年生)名誉会員の多年にわたる業績を記念して、実績ある写真家の活動を支援する「笹本恒子写真賞」を平成28(2016)年に創設。選考委員は佐伯剛(『風の旅人』編集者)、前川貴行(写真家)、野町和嘉(JPS会長)。授賞式は2022年12月7日(水)、アルカディア市ヶ谷で行い、受賞記念写真展を12月22日(木)~28日(水)、アイデムフォトギャラリー「シリウス」で開催します。

【受賞理由】

写真集『熊を撃つ』『海人一八重山の海を歩く』に発表した、伝統的な狩猟に生きる狩猟民たちを対象とする、長年にわたる真摯な取材活動と傑出した作品に對して。



【受賞の言葉】

このたびは栄えある賞をいただき、喜びとともに身の引き締まる思いです。私がテーマにしている漁業や狩猟は、人間と野生生物との命のやりとりです。獲物が食料に変わる過程は凄惨な場面もありますが、そこには生きる喜びと希望があふれていると感じ、シャッターを切ってきました。我われが「先進」と呼ぶ国々の都市部では、命の存在がすっかり希薄になってしまいました。しかし生と死への自覚は、人間が生物であること、ひいては地球の一員であることを思いださせてくれるはず。極大した人口と文明が引き起こす数かずの問題に向き合わざるをえない現在、狩猟採集という原初的な営みにたち帰って、人間が本来あるべき姿を考えたいと思います。



追い込み網漁に向かう(八重山諸島)



イソマグロを仕留める(八重山諸島)



熊猟師(飛騨市山之村)



熊に銃弾を放つ(飛騨市山之村)



捕鯨船が鯨を撃つ(南房総市千倉沖)

西野嘉憲(にしの・よしのり)

1969年大阪府生まれ。大学在学中の1991年より琉球列島などを旅し、風土に生きる人々の撮影をはじめ。東京の広告制作会社勤務を経て、2005年より沖縄県石垣島を拠点にフリーランスとして活動。漁業、狩猟、捕鯨など、人と野生の関わりを写真の主なテーマとする。写真集に『鯨と生きる』『海人』(ともに平凡社)、『熊を撃つ』(関人堂)など。日経ナショナルジオグラフィック写真賞2018 ビール部門最優秀賞受賞。

第5回「笹本恒子写真賞」選評 佐伯 剛

写真にかぎらず、音楽や絵画などにおいても最新の機器を使って誰でも簡単に自分の作品を発表できる時代だが、人々の記憶に長く残っている表現と、そうでないもの間には明らかな差があり、その差は、技術の差もあるが、それ以外の理由の方が大きい。

一度見たら忘れられない魅力のある写真を、ノンフィクションの領域で撮り続けている人こそ笹本恒子賞に相応しく、そういう意味で、今回は、西野嘉憲さんを強く推させていただきました。西野さんの写真の魅力は、野生と、野生を相手に糧を得る人間と、写真家の三者の関係性において、それぞれの「必死」が貫かれていることで、その緊迫感が美に昇華している。いわゆる目の付け所で新しさを競うような写真ではなく、時代を超えて伝えられていくべきものが写真に反映されて

おり、人類というのは、何千年以上、こうした必死の営みを続けてきたのだということが、説得力をもって伝わってくる。

「必死」であることは、その言葉どおり、いずれ死ぬ宿命にもかかわらず、覚悟を決めて全力を注ぐことであり、その厳粛さと崇高さこそが、生と死の二面が生物界に存在する意義なのだろう。「人はなぜ生きるのか」という問いは、安心と安楽を幸福の基準とする消費産業社会における、生命本能の違和感と戸惑いの眩きなのかもしれない。

西野嘉憲さんが、広告制作会社勤務を経て、野生と人間の関係に向き合う仕事に没入していったことが興味深い。消費産業社会の中で膨れ上がった違和感を無聊の慰めでごまかさず、生きる意味に対する問いと誠実に向き合い続けた結果なのだろうか。

※笹本恒子名誉会員は、2022年8月15日、老衰のため107歳で逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

第47回 2022JPS 展 入賞作品紹介

2022JPS 展開催によせて

公益社団法人 日本写真家協会
会長 野町和嘉

公益社団法人日本写真家協会(JPS)は、1950年(昭和25年)に設立し、現在全国に約1,300名の会員を有するわが国を代表する職業写真家の団体です。

JPSは、写真家の地位の確立、著作権保護などを掲げ、写真文化の啓蒙発展を目的として幅広い活動を展開し現在に至っており、2020年には創立70周年の記念すべき節目を迎えました。

一方JPS展は、1976年に初めて開催した第1回から数えて今年が47回目となります。第1回目はJPS会員の作家活動を紹介するための会員作品のみの展示でしたが、第2回目より一般公募部門を設け、わが国有数の公募展として発展し、近年は東京都写真美術館ほかを展示会場として広く定着していることはご承知の通りです。

それまで順調に回を重ねてきたJPS展でしたが、新型コロナウイルスの世界的蔓延によって2020年度は開催できず、2021年に2年分を同時に開催する異例のスケジュールとなり、そのうえ開催直前に発出された緊急事態宣言によって、日程の大幅変更を余儀なくされることになりました。

感染防止のために2年以上にわたってさまざまな行動制限が課されるなかで、撮影のための自由な海外渡航ができない、文字通り“鎖国状態”が現在も続いています。さらには、コロナ禍を契機として、アナログからデジタルへの切り替わりが一層加速されたことで多くのグラフィメディアが消滅して作品発表の機会が失われ、写真を取り巻く環境は劇的に変わりました。

一方で、100年に一度の災厄とも譬えられるコロナ禍は、それまでの日常に様々な局面で変化をもたらしています。それは表現活動にも確実に波及しており、あらゆる分野において新たな潮流が芽生えてくる予感がしています。

JPS展においても、刺激に充ちたその先の作品展開を大いに期待しています。

総評

2022JPS展への応募者数は、一般部門が1,382名、18歳以下の部門が153名で、2021年よりそれぞれ129名、2名の減少でした。一方応募枚数では、一般部門が4,429枚で昨年比で459枚減少、18歳以下部門では応募枚数335枚で35枚の増加という結果でした。

一般部門での応募者、応募点数の減少は、なんといっても、コロナ禍による緊急事態宣言にともない外出が制限され、とても撮影に集中するどころではなかったという一般的な事情がありました。そんな状況下にも関わらず作品的には昨年に比べてもまったく遜色がないばかりか、むしろコロナ禍を契機として、家族との絆や社会のあり方を考察した深みのある作品が多かったことが印象に残りました。

入賞作品の最高峰である文部科学大臣賞には、作者自身の家族を時系列に辿って追憶した、橘毅さんの5枚組写真が選ばれました。過去何年にもわたってJPS展トップの作品は組写真が定番となっており、じつは毎回、インパクトの強い一発必中の単写真の出現を秘かに期待しているのですが、組写真を凌駕する一枚写真に今回も出会えなかったのは、残念ではありました。

審査員長 野町和嘉



審査員：左から、石川梵、織作峰子、野町和嘉（審査員長）、佐藤時啓、菅原隆治（[CAPA]編集長）
撮影：大鶴倫宣

第47回2022JPS展 東京展

東京都写真美術館 / 2022年5月21日(土)～5月29日(日)
(B1F 展示室) 10:00～18:00

(木・金は20:00まで、月曜休館)

共催 / 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
後援 / 文化庁、東京都

第47回2022JPS展 関西展

京都市美術館 別館2F / 2022年6月21日(火)～26日(日)
10:00～18:00

後援 / 文化庁、京都府、京都府教育委員会、
京都市、京都市教育委員会

文部科学大臣賞

賞状・盾・副賞
賞金 60 万円

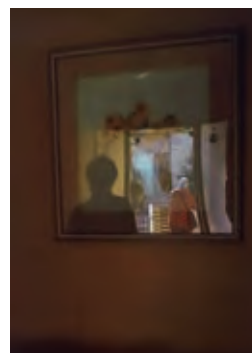
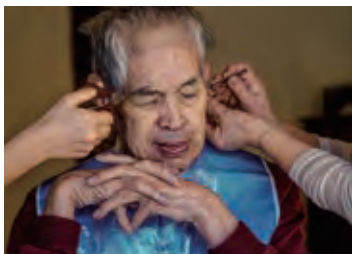
橘 毅 (東京都) 「心から『ありがとう』と独り言」 カラー 5 枚組



東京都知事賞

賞状・盾・副賞
賞金 30 万円

宮田 ラリーサ (富山県)
「Father」 カラー 5 枚組



18歳以下部門
最優秀賞

賞状・盾・副賞

藤本 優大 (大阪府)
「渋谷スナップ／45分」
カラー 3 枚組



金賞

賞状・盾・副賞
賞金 10 万円

大澤 秋良 (埼玉県)

「桃太郎と年齢」

モノクロ単写真



銀賞

賞状・盾・副賞

新井 尚 (神奈川県)

「十人一色」

モノクロ単写真



銀賞

賞状・盾・副賞

増田 俊次 (福岡県)

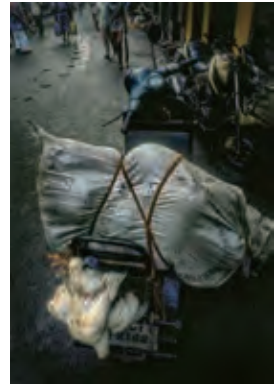
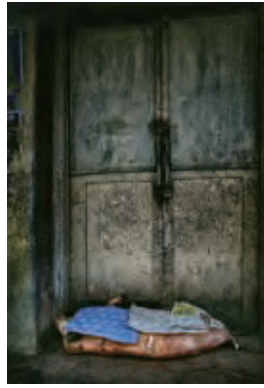
「たそがれる男たち」 カラー 3 枚組



銅賞

賞状・盾・副賞

西川 武則 (三重県)
「路地」 カラー 3枚組



銅賞

賞状・盾・副賞

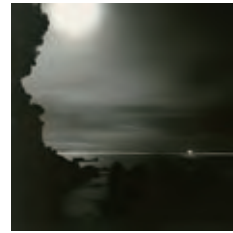
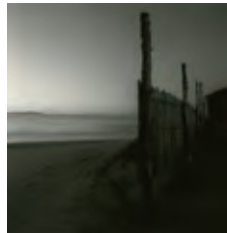
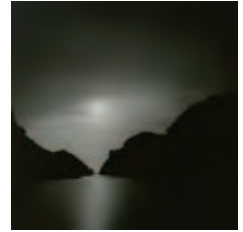
小川 雅之 (岡山県)
「微笑んだカラス」 モノクロ単写真



銅賞

賞状・盾・副賞

新井 拓
(東京都)
「朧の刻」
モノクロ 5枚組



【ヤングアイ部門】

日本写真家協会 日本写真芸術専門学校
会長賞 「職」
賞状・盾・副賞 岡 杏里・孫 佳怡



ヤングアイ 名古屋ビジュアルアーツ 写真学科
奨励賞 「洗」
賞状・盾・副賞 水谷星奈・堀口麻鈴・藤村海瑠・犬塚絢捺・川瀬史歩・安田芽生・重松雅寅



JPS2022年新入会員展 「私の仕事」

東京：アイデムフォトギャラリー「シリウス」

2022年7月14日(木)～7月20日(水)

大阪：富士フィルムフォトサロン大阪

2022年8月26日(金)～9月1日(木)



JOKER



インテツ (東京都)



Cut through the
silence



岡本 浩孝 (愛知県)



ウイグルの子どもたち



川嶋 久人 (埼玉県)



祈りの道



工藤 弘之 (青森県)



牧羊犬とご挨拶



小松 由佳 (東京都)



Runway of Tokyo



斎藤 大地 (東京都)



清けき春



笹生 公希 (千葉県)



カーニバルの夜
＝スペイン・バレンシア



佐藤 哲也 (東京都)



農の子



鈴木 正美 (東京都)

 <p>鼈甲職人 山川金策氏</p>  <p>高田 浩行 (東京都)</p>	 <p>弾圧との闘い ～カンボジア・屈せざる願い～</p>  <p>高橋 智史 (神奈川県)</p>	 <p>薫風向日葵</p>  <p>高畠 泰志 (兵庫県)</p>
 <p>新年を迎え祝う</p>  <p>中条 望 (三重県)</p>	 <p>東京大学 柏Ⅱキャンパス 産学官民連携施設</p>  <p>根本 健太郎 (神奈川県)</p>	 <p>熊本城</p>  <p>馬場 道浩 (東京都)</p>
 <p>Yuka with a dog-Akita</p>  <p>本間 寛 (東京都)</p>	 <p>過剰梱包</p>  <p>八木 ジン (京都府)</p>	 <p>国境の駅</p>  <p>吉本 旭 (徳島県)</p>

JPS 2022 年 新入会員展 実行委員会：本間 寛、高田 浩行、齋藤 大地、笹生 公希
 ※ 展示作品各自 3 点から編集部でセレクトした 1 点を 50 音順に掲載しました。(構成：小池良幸)



東京展会場風景 (撮影：本間 寛)



大阪展会場風景 (撮影：岡本浩孝)

2022JPS 展 報告

写真展事業担当理事 熊切大輔

2022JPS 展が全日程を終え、無事終幕した。

東京都写真美術館にて2022年5月21日(土)から5月29日(日)の9日間、関西展は京都市美術館別館で6月21日(火)から6月26日(日)の6日間、開催した。

今回作品応募総数は1535名4764枚、うち一般部門が1382名4429枚、18歳以下部門が153名335枚と全体で前年比約-10%と微減した。コロナ禍で未だイベントや祭り、海外での撮影などができず、作品撮りが思うようにできない状況が続く中、大幅な減少の可能性も想定していたが予想よりも減り幅は少なかった印象だ。応募作品もそんな社会状況が反映されており、身近なテーマに目を向けたものが多かったように思われる。

審査は野町会長(審査員長)、石川梵氏、織作峰子氏、佐藤時啓氏、菅原隆治氏(『CAPA』編集長)によって行われた。厳正な審査の結果、文部科学大臣賞には、橘毅さんの「心から『ありがとう』と独り言」。東京都知事賞には宮田ラリーサさんの「Father」。18歳以下部門最優秀賞には藤本優大さんの「渋谷スナック/45分」が選出された。

東京展では新型コロナウイルス感染症で開催できていなかった表彰式を3年ぶりに開催することができた。久しぶりの表彰式は各賞受賞者の皆さんの喜びが溢れる式となった。その後審査員による受賞作品講評会も更に多くの参加者とともに行われ、久びさにJPS展らしさを感じられる初日を迎えることができた。

展示は、一般受賞作品に加えてJPS会員作品の2本立てで513枚の作品を展示した。迫力ある大型作品プリントと合わせてモニターでの展示も行い、会員写真家と受賞者の力作の共演が楽しい展示となった。初日にはJPS展では初めての入場規制がかかり、順番待ちの列



文部科学大臣賞受賞者の橘毅さんと野町会長(撮影・野田知明)



表彰式 (5.21 東京都写真美術館ホール、撮影・桃井一至)

ができるほど盛況であった。その後も連日盛況で、9日間という短い開催期間にもかかわらず約三千人の来場者数となった。今回客層で目立ったのが若い世代の来場者が多かったことだ。次の時代につながる予感を感じることができた。

会期中の様ざまなイベントもすべて盛況であった。教育推進委員会による「おこ写真教室」企画委員会による「~Digital Infrared Photography~ デジタルで撮るシユールな赤外線写真の世界」著作権委員会による「知っておきたい写真著作権セミナー」写真展事業委員会による「会員写真家によるポートフォリオレビュー」などバラエティーに富んだイベントを行った。そんな盛り上がりの勢いは衰えず、関西展が幕を開けた。

関西展は1,453名と多くのおお客様にご来場いただいた。野町会長、柴田理事、熊切理事による受賞作品講評会、著作権委員会によるセミナーも大盛況で行われた。

コロナ禍によって撮影機会を失い沈んでいた写真業界において、今回のJPS展の盛り上がりは一筋の光を感じる結果となったように思える。この勢いを更に盛り上げるために会員の皆様の御協力をいただきながら、2023JPS展に繋げていきたいと思っている。



2022JPS 展図録の表紙



東京展審査員による受賞作品講評会 (撮影・桃井一至)

第47回 2022JPS 展の報告

公募受付:2021年11月10日(水)～2022年1月15日(土)

作品審査:2月3日(木)

審査員:野町和嘉(審査員長)、石川梵、織作峰子、佐藤時啓、菅原隆治(『CAPA』編集長)

後援:文化庁ほか

総展示数:513枚(公募212名368枚、会員作品96名134枚、ヤングアイ11校11枚)

応募総数:1,535名、4,764枚

(一般:1,382名、4,429枚 18歳以下:153名、335枚)

入賞・入選者総数:212名、368枚

総入場者数:4,390名

一般部門:179名、316枚(文部科学大臣賞1名、東京都知事賞1名、金賞1名、銀賞2名、銅賞3名、奨励賞5名、優秀賞20名、入選146名)

18歳以下部門:33名、52枚(最優秀賞1名、優秀賞9名、入選23名)

入賞者氏名

文部科学大臣賞 橘 毅 心から「ありがとう」と独り言

			5枚組 カラー
東京都知事賞	宮田ラーサー	Father	5枚組 カラー
金賞	大澤秋良	桃太郎と年齢	単モノクロ
銀賞	新井 尚	十人一色	単モノクロ
銀賞	増田俊次	たそがれる男たち	3枚組 カラー
銅賞	西川武則	路地	3枚組 カラー
銅賞	小川雅之	微笑んだカラス	単モノクロ
銅賞	新井 拓	鷹の刻	5枚組 モノクロ

(奨励賞以下略)

18歳以下部門最優秀賞 藤本優大 渋谷スナップ/45分
3枚組 カラー

(18歳以下部門 優秀賞以下略)

会員作品:96名 134枚

企画展示「ヤングアイ」

公益社団法人日本写真家協会 会長賞:日本写真芸術専門学校
「職」岡 杏里・孫 佳怡

ヤングアイ奨励賞:名古屋ビジュアルアーツ 写真学科
「洗」水谷星奈・堀口麻鈴・藤村海瑠・犬塚絢捺・川瀬史歩・
安田芽生・重松雅寅

ヤングアイ参加校:11校

現代写真研究所 写真総合科、東京総合写真専門学校、日

本写真芸術専門学校、日本大学 芸術学部 写真学科、九州産業大学 芸術学部 写真・映像メディア学科、名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科、学校法人日本写真映像専門学校、ビジュアルアーツ専門学校 大阪 写真学科、大阪芸術大学 写真学科、東京工芸大学 芸術学部 写真学科、名古屋ビジュアルアーツ 写真学科

【東京展】

後援:文化庁、東京都 共催:東京都写真美術館

会場:東京都写真美術館 B1F

会期:5月21日(土)～5月29日(日)10:00～18:00(木・金は20:00まで)、月曜休館

表彰式・講演会:5月21日(土)東京都写真美術館 1F
ホール13:00～14:30表彰式、参加者数:68名 15:00～16:30審査員による受賞作品講評会 講師:野町和嘉、石川梵、織作峰子、佐藤時啓、菅原隆治(『CAPA』編集長) 参加者数:130名

イベント:5月27日(金)「会員写真家によるポートフォリオレビュー」会場:東京都写真美術館 1F スタジオ
参加者:16名

入場者数:2,937名

【関西展】

後援:文化庁、京都府、京都府教育委員会、京都市、京都市教育委員会

会場:京都市美術館別館 2F

会期:6月21日(火)～6月26日(日)10:00～18:00
作品講評会・講演会:6月25日(土)京都市勧業館「みやこめっせ」14:00～15:30作品講評会 講師:野町和嘉、熊切大輔、柴田明蘭 15:00～16:30 参加者数:85名

入場者数:1,453名

協力:キヤノンマーケティングジャパン株式会社、ソニー株式会社

第47回 2022JPS 展

写真展事業委員会

担当理事:熊切大輔 委員長:加藤恵美子 副委員長:吉永陽一 委員:小林みのる、奈良岡忠、渡部晋也

関西展実行委員会

委員長:越智信喜 副委員長:葛原よしひろ 委員:大西としや、金城泰哲、中島雅彰



東京展展示会場(撮影・野田知明)



関西展展示会場(撮影・永野一晃)

第48回 2023 JPS 展案内

写真展事業委員会

1976年にスタートしたJPS展は来年第48回目を迎えます。今回も一般公募を例年どおり募集します。皆様の力作をお待ちしております。

■応募規定を熟読のうえ、ご応募ください。

JPS展公式ホームページから応募作品目録のダウンロード・入力ができます。

https://www.jps.gr.jp/2023jpssten_ouboyoko/



<第48回 2023 JPS 展 応募規定>

●テーマ

自由 ※注意事項をよくお読みください。

●応募資格

アマチュア、プロフェッショナル、年齢、性別、国籍を問いません。ただしJPS会員は除きます。

●応募部門

一般部門：年齢を問いません

18歳以下部門：2004年4月1日以降生まれの方

●応募プリント

用紙サイズはA4または六つ切8×10インチ(203×254mm)に限る
カラー、モノクロ共プリントのみ(デジタル・銀塩を問いません)。デジタル加工も可。ただしデジタル加工・合成等の欄に印を入れること。作品は、必ず応募者本人が撮影したものであること。

●出品点数

単写真=制限はありません。組写真=5枚までを1組の限度として何組でもかまいません。組写真は、左より順に並ぶように構成して番号をつけてください。ただし、写真同士を貼り付けないこと。また台紙にも貼らないで応募してください。

●受付手数料

一般部門：1枚につき2,500円(組写真の場合も1枚2,500円)

18歳以下部門：1枚につき800円(組写真の場合も1枚800円)

郵便局より下記、郵便振替口座へ2023年1月15日までにお振込みください。お振込みがない場合は審査しません。

作品の中に受付手数料を同封することは、厳禁とします。

応募作品返却希望者は、返却料2,500円を加算してお振込みください。(応募作品の返却は6月下旬から7月上旬を予定しています。海外からの応募の場合は返却できません)

郵便振替 口座番号：00110-5-651936

口座名称(漢字)：日本写真家協会 JPS 展

*通信欄に応募部門、応募合計枚数、応募者の郵便番号、住所、氏名、氏名フリガナ、電話番号を必ずご記入ください。

*氏名には必ずフリガナをふってください。

●受付及び締切

2022年11月10日(木)～2023年1月15日(日)まで。

郵送または宅配便に限り。直接持参されても受付いたしません。最終日消印有効。

●審査員

野町和嘉(審査員長)、菊池哲男、白鳥貞太郎、土屋勝義、白山眞理(一般財団法人日本カメラ財団調査研究部長)(予定)

●審査結果

3月中旬頃、応募者全員に文書にて通知。また、ホームページ(<https://www.jps.gr.jp>)とメールマガジンでも発表します(電話でのお答えはいたしません)。

●展示用作品

入賞・入選作品は、後日指定する期日までに各自で指定サイズに引伸し、再提出していただきます。その際には作品の原板・データが必要になりますので、必ず保存しておいてください。文部科学大臣賞、知事賞(仮称)、金・銀・銅賞作品については大型サイズになる場合があります。

●展示及びパネル製作費

入賞・入選作品は当協会特注パネルにて展示しますので、一般部門は1枚につき10,000円、18歳以下部門は1枚につき5,000円を指定の日時までに納入していただきます。応募者の申し出による入賞・入選の辞退はできません。応募規定違反など何らかの事由により入賞・入選取り消しとなった場合には、違約金として5,000円を申し受けます。やむを得ない事情により展覧会が催行できない場合には、ホームページ上での展示及び公開とし、パネルは後日着払いの宅配便で返送します。製作費の返金はいたしません。ご了承のうえご応募ください。

●図録

第48回 2023 JPS 展図録の刊行を予定しています。図録の原稿には応募作品を使用します。

●賞

一般部門

文部科学大臣賞 1名(賞状・盾・賞金60万円・副賞)

知事賞(仮称) 1名(賞状・盾・賞金30万円・副賞)

金賞 1名(賞状・盾・賞金10万円・副賞)

銀賞 2名(賞状・盾・記念品・副賞)

銅賞 3名(賞状・盾・記念品・副賞)

奨励賞 5名(賞状・盾・記念品・副賞)

優秀賞 20名程度(賞状・記念品・副賞)

入選 150名程度(賞状・記念品)

18歳以下部門

最優秀賞 1名(賞状・盾・副賞)

優秀賞 10名程度(賞状・記念品・副賞)

入選 30名程度(賞状・記念品)

審査員特別賞 1枚(賞状・盾・記念品・副賞)

※団体でまとめてご応募いただいた学校の中から選出します。

●展示会場・会期

東京都写真美術館 2023年5月20日～5月28日(予定)

京都市美術館別館 2023年6月20日～6月25日(予定)

※やむを得ない事情により展覧会が催行できない場合には、ホームページ上での展示及び公開に変更いたします。

●注意事項

1. 原則として未発表作品に限り。商用利用(販売・ストックフォト)された作品は応募できません。過去にコンテスト等で入賞・入選した作品及びそれらに類似した作品(同じ対象を同じような条件で同じ時期に撮影した作品)は応募できません。また、現在コンテスト等に応募結果が判明していない作品も応募できません。
2. 被写体の肖像権、著作権には十分にご注意ください。スナップ等で人物を撮影された場合には、コンテスト応募の承諾を得てください。
3. すべての応募作品の著作権は撮影者に帰属します。ただし、入賞・入選作品は巡回展終了までの間に当該作品を他に使用する場合、当協会の承諾を得てください。
4. 入賞・入選作品は、審査結果発表後、優先的に当展の広報宣伝等の目的範囲内で雑誌その他に使用することがあります。
5. 応募作品の返却を希望される方は、受付手数料納入、返却料2,500円(枚数に関係なく)を加算してお振込み下さい。※海外からの応募の場合は返却不可となります。返却は6月下旬から7月上旬を予定しています。
6. 入賞・入選の展示作品は展覧会終了後、着払いの宅配便で返送します。
7. 作品受理以前の事故、破損につきましては、その責任を負いかねます。作品は慎重に取り扱いますが、輸送途中の不可抗力による事故等に対する責任は負いかねますのでご了承ください。
8. 受付手数料、パネル製作費はいかなる場合でも返金いたしません。
9. 応募者は応募規定、注意事項を全て了承したものとみなし、違反した場合には入賞・入選は取り消しとなり違約金として5,000円を申し受けます。応募作品到着後における応募、入賞・入選及び展示の辞退はできません。また、過去に規定違反のあった方の受付はお断りすることがあります。
10. 応募者の個人情報の利用は今回のJPS展と今後の応募のご案内などの範囲とし、管理を慎重にいたします。
11. 18歳以下部門に応募された方が入賞・入選された場合は、年齢確認の資料を提出していただきます。

●氏名、住所、題名、フリガナ等は、わかりやすく楷書でお書きください。

●組写真の場合、作品目録の題名は、1組につき1行で書いてください。写真の枚数分題名を書く必要はありません。

●作品目録は、必ず本人控用のコピーを保存しておいてください。

●応募票が不足する場合は、コピーし、また作品番号を修正してご使用ください。

●JPS展の最新情報をお届けするメールマガジンを配信しております。
(<https://www.jps.gr.jp/jps-ten-magazine/>)

●応募後、住所変更等がある場合はお知らせください。

●応募に関するよくある質問 <https://www.jps.gr.jp/jpssten/faq/>

2022 (令和4) 年度第23回 公益社団法人日本写真家協会定時会員総会報告

日時：2022年5月27日(金) 14:00～16:00

場所：東京都写真美術館1Fホール

(東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内)

議決権のある正会員総数：1,290名(定足数646名)

出席正会員数：870名(内訳・本人出席59名、代理委任2名、議決権行使書809名)・外部理事5名、外部監事1名、税理士1名、名誉会員1名、賛助会員9社11名

5月27日(金)、対面での定時会員総会が東京都写真美術館1Fホールで、定刻の14時に島田専務理事の進行で開会した。はじめ

に物故会員の正会員14名、名誉会員3名の氏名が読まれ黙祷と冥福を祈った。続いて2022年度の新入会員19名を紹介した。次いで会員理事13名、外部理事6名、監事3名と税理士1名を紹介した。



野町会長より「当協会は創立72年を迎え、会員の高齢化、コロナ禍に伴う経済情勢の影響での会員の減少はじめ会費収入の減少で厳しい状況が続いております。事業については会員皆さんの協力を得ながらスリム化を図りつつそれぞれ成果を上げております。現在開催のJPS展もコロナ禍で3年目にして、平常スケジュールで開催でき関係者一同、安堵しています。職能団体として今後も事業活動の一層の発展につくします」と挨拶があった。

定款第16条により、総会の議長は代表理事の野町会長があたり、議長補佐に島田専務理事を選任し、出席正会員870名で総会成立が宣言された。議事録署名人を池上直哉、宮沢あきらの両正会員に依頼し、書記の小野吉彦、記録撮影の桃井一至の両正会員を紹介し、審議に入った。

【決議事項】

第1号議案：「2021(令和3)年度事業報告書及び決算報告書承認の件」について、高村副会長が「公益事業1、写真文化の振興事業について、小学生対象の『写真学習プログラム』では17年間の合計726校24,821名の参加をいただいた。コロナ禍による延期の第45回2020JPS展及び第46回2021JPS展を東京展では緊急事態宣言の延長で会期を短く開催し、関西展、名古屋展へ巡回した。『第15回2021JPSフォトフォーラム』をYouTubeでオンライン開催した。第47回日本写真家協会賞を株式会社日本写真企画に贈った。2021年第16回名取洋之助写真賞を川嶋久人氏に、同奨励賞を喜屋武真之介氏へ授与した。第4回笹本恒子写真賞を渋谷敦志氏へ授与した。創立70周年記念写真展『日本の現代写真1985-2015』を東京都写真美術館B1F展示室で行った。公益事業2、写真文化の啓発事業について、専修大学ジャーナリズム学科「フォト・ジャーナリズム論」に小澤太一、渋谷敦志の両会員を派遣した。著作権研究会『スナップ写真の肖像権を考える』をオンライン開催した。国際交流事業として「表現者たち」と題する発表を4号分を行った」と説明した。

続いて島田専務理事が貸借対照表と正味財産増減計算書をもとに「当期の経常収益計は125,911,459円、経常費用計は125,028,571円で、当期は882,888円の2年連続で黒字となった。各方面で経費削減の多大な努力をしていたこともあったが、会議室の返却を行い今期からは原状復帰代金がかからないため大きな削減が出来た。また、事務局職員1名の早期退職により人件費削減となった。会費未納者は17名でコロナ禍の影響、会員の高齢化、新入会員数の伸び悩みなど今後の会員数は楽観的な見通しは持てない状況であり、事業費の使い方、協会運営について大切に理事会で議論している」と説明した。続いて公認会計士の長吉眞一監事が監査報告を行った。

質疑応答では、和田直樹会員から「近年、会員数は毎年多く減少しているが、経済的理由以外にも会員側と執行側の意思疎通が大切だと思う。『正会員実態調査』についての分析結果やそれをふまえた今後の方針はどうか」との質問に、担当の伏見理事から「7月発送のニュースで報告する予定である。300通の返信があり、執行部で検討し協会運営に役に立てていく所存である」と回答した。和田会員から「日本写真保存センターについて、有意義な活動をされているが、御徒町の家賃代など予算収支を詳しく出していただきたい」との質問に、担当の高村副会長から「前任より業務を引き継ぎ、現在調査中で整理して今後発表する」と回答した。和田会員から「関西有志写真展など活発な地方会員の活動を、協会事業として応援し会員増加につなげるなど必要ではないか」との意見に、山口副会長から「実績を積んで、今後、事業への格上げの問い合わせが理事会へあれば、検討する余地がある」と回答した。続いて採決を行い、賛成多数で可決承認された。

第2号議案：「名誉会員推挙承認の件」について、山口副会長から「栗林慧氏を名誉会員に推挙する。1969年よりフリーの生物生態写真家となり、多数の賞を受賞され、推薦人は九州、沖縄在住37名の正会員による」と説明があり、賛成多数で可決承認された。

【報告事項】

議長が「2022年度の事業計画書、予算書及び資金調達及び設備投資の見込みを記載した書類を3月7日の第53回理事会で承認し、3月31日に内閣府へ提出した」と報告した。

報告事項1：「2022(令和4)年度事業計画書の件」について、高村副会長が「(公益事業)公1事業、写真文化の振興事業について、『第47回2022JPS展』を東京、京都で開催する。第16回JPSフォトフォーラムを11月12日(土)東京都写真美術館1Fホールで行う。第48回『日本写真家協会賞』贈呈式を12月7日(水)アルカディア市ヶ谷で行う。続いて公2事業、写真文化の啓発事業について、専修大学ジャーナリズム講座「フォト・ジャーナリズム論」の講義に講師として米田堅持、高橋智史の両氏を派遣する」と説明した。

報告事項2：「2022(令和4)年度予算書の件」について、島田専務理事が「正味財産増減計算書ベースによる『収支予算書』を基に、2022年度の経常収益計は115,510,000円で、経常費用計は115,010,000円で、当期は500,000円の黒字を見込んで予算立てをしている」と報告した。

報告事項3：「第48回『日本写真家協会賞』の件」について、山口副会長より「株式会社ケンコー・トキナーに贈る」と報告した。

報告事項4：「会費滞納による正会員資格の喪失手続きの件」について、島田専務理事から「会費未納の事情調査及び督促を行った結果、未納者が17名いる。第54回理事会で、正会員資格の喪失者として承認した。第23回定時会員総会で報告し、本人への通知とJPSニュース597号での掲載で完了する」と報告があった。

続いて質疑応答では、和田直樹会員から「予算の大きい正会員会費について、52,400,000円とあり一人分の会費で割ると1,310名になる。既に会員数はこの人数を下回っており、会員数の減少分を考慮せずに行っているのか」との質問があった。島田専務理事は「減少数を見込んで1,310名で予算を立てたが、予想をさらに20名程下回ってしまい、予算案を再度、検討する」と回答した。和田会員から「相互祝賀会の予算について、昨年はコロナで開催されず予算分が黒字となった。しかし今回は前年の半分規模の予算のうえに、コロナが収まって3年ぶりの参加者が大幅に増える可能性もあるが、予算が半分である根拠は何か」との質問があった。島田専務理事は「細かい数字は把握できておらず申し訳ないが、予算立てはしておいて出来る状況になったら開催するというスタンスである」と回答した。小笠原敏孝会員から「今回の新入会員展へ出展しない新入会員の経緯を説明いただきたい。同様の事象が起きた際には今後はどうするのか」との質問があった。島田専務理事は「その会員についてご本人がネットで話題になった事により、ヒアリングを行った結果、新入会員展辞退の申し出があり、出展しない事になった」と説明があった。

最後に野町議長による終了の辞が述べられ総会の幕を閉じ、和やかに散会した。(記/書記・小野吉彦、撮影/桃井一至)

「日本写真保存センター」調査活動報告(37)

2022 年度上半期の活動まとめ

写真保存センター委員会

1. 今年度 7 月までの原板調査実績

7 月 15 日現在の調査作業状況について、『岩波写真文庫』は管理 DB へのフィルム状態の基本情報入力が先行して完了。包材入れ替えが残り約 2,800 本(35mm : 1,930 本、2B : 870 本)、高精細複写が残り約 3,500 本となった。画像の公開に関しては、公開用データベースにアップするためのコマ照合や写真内容情報の入力作業段階。「岩波文化財写真」は本調査を継続中でスキャン残数約 1,000 本、9 月下旬に完了見込み。「写真協会」シートフィルム約 14,000 本のフィルムの劣化情報の入力中。佐伯義勝の『男の料理』の原板について、奥様より刊行物を借用できたため、保存済みの画像 58 本とのコマ照合を実施し寄贈原板から 25 コマの照合を確認した。

運営経費の削減策として進めている、事務所移転の場所と日時が決定した。現在事務所にある什器等を全て移動し追加倉庫の確保をすることなく移転できるようレイアウト変更を行い対応する。移転先は、神田にある神保ビルで、現在賃貸契約を済ませており 10 月 1 日(土)の移転を予定している。

2. ジャパンサーチギャラリー機能での画像公開

ジャパンサーチは、国立国会図書館が運用している国内のデータベースを分野を横断してひとつにまとめたポータルサイトであり、そこに接続する各機関の代表(アグリゲータ 注1)が小さな組織をまとめることで、国内の情報を網羅的に一覧できることを目標としてい



ギャラリー機能 (<https://jpsearch.go.jp/gallery>)

る。これらの利用目的としては研究、教育のみならずビジネスやインバウンド促進、海外における日本研究の促進への活用が期待されている。現在の接続機関は 25 機関、118 件のデータベースと連携し、約 2,200 万件のメタデータが登録されている。(2021 年現在 注2) これは、EU がグーグルによる情報の一極支配に対抗して知的情報の独立性を担保するために組織したヨーロッパアナ(注3)の日本版ともいえる。

このポータルサイトのトップページバナーに表示されるギャラリー機能は、接続各機関が自由に設定したテーマでデータベースの内容を表示できる機能で、時々に応じて特集を組んで企画展のような形での検索閲覧を可能にするものである。日本写真保存センターではこれ



ジャパンサーチトップのバナー (<https://jpsearch.go.jp/>)



撮影：高木康允、大平正芳（1979年10月17日69才世田谷区瀬田年）、私家版「出会いの顔」自宅）、作品展「ふだん着の大臣たち」

撮影：高木康允、中曽根康弘（1980年11月11日55才世田谷区代沢自宅）、作品展「ふだん着の大臣たち」

撮影：高木康允、竹下登（1979年2月9日49才東京港野鳥公園）、作品展「ふだん着の大臣たち」

撮影：高木康允、橋本龍太郎（1987年2月9日49才東京港野鳥公園）、作品展「ふだん着の大臣たち」

まで収蔵作品から「ウィンタースポーツ」、「『写真週報』掲載写真と関連資料で見る戦時下の子どもたち」、「岩波写真文庫 250 青森県 一新風土記」の特集を行ってきた。今回は、写真家高木康允の作品をまとめ「素顔の首相」と題して掲載した。

3. 「素顔の首相」掲載

高木康允（1935年～2019年）東京生まれ、日本大学芸術学部を卒業。在学中から長野重一氏に師事。東京新聞社『週刊東京』写真部に勤務。1960年からフリーランスとなり、政府広報誌の『フォト』で政治家の素顔、暮らしぶりを数多く撮影。

今回の「素顔の首相」は1978年から1993年の長きにわたり撮影された作品の中から、1994年開催の「ふだん着の大臣たち」展（JCII フォトサロン）を中心に構成している。撮影当時は首相ではなく大臣時代の写真もあるが、その表情を後に首相になった時の印象を重ねてみると、国家元首という立場、その責務の重さがよく表れている。また、今回特集に掲載された以外にも日本写真保存センターが公開している写真原板データベースでは時代の宰相たちを捉えた一連の作品を閲覧することが可能で、政治家の意外な一面や性格を丁寧に写し取ったものが多い。残念ながら高木氏の原板としては記録がないが、安倍晋三氏を撮影していたらどんな表情が写っていたのだろうか。そんな思いにかられ検索してみたところ、日本写真保存センターの写真原板データベースには

父の安倍晋太郎氏の写真を見つけることができました。こちら是非ご覧いただきたい。

一連の作品を見るにつけ高木氏の作品には、カール・マイダンスの「写真は絶対に嘘をつかない」（注4）という言葉を借りるならば、撮影者と被写体の信頼関係がよく写っているといえるのではないだろうか。

4. 今後の活動について

日本写真保存センターではこれら外部機関との連携による周知活動で、写真原板アーカイブの重要性と社会的意義の理解促進を継続して行っている。併せて今年度から、賛助会員各社の協力を得て、富士フィルム株式会社GFXとリコーイメージング株式会社のデュープリケーターを使用した原板の複写による高精細デジタル化を開始した。これらを進めることで、公開画像の利便性を高めて利用機会の拡大をするための改革を進めている。

また将来の自立した運営を視野に、今秋からは運営資金調達を目的とした寄付事業の実施を予定している。寄付額に応じて収蔵原板からのモダンプリントなどの返礼も検討中なので、歴史的写真をコレクションできる貴重な機会にもなると考えている。

引き続き会員の皆様はもとより、写真、出版、美術などの関係者の方がたに対しても日本写真保存センターの活動の周知にご協力いただき、ご支援をお願いしたい。

（記／写真保存センター委員・寺師太郎）

注1：独自には情報連携の難しい機関に対して情報化のアドバイスや情報連携でジャパンサーチへの接続を行う役割を担う

注2：デジタルアーカイブ学会誌 2021, Vol. 5 No. S1 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsda/5/s1/5_s40/_pdf/-char/ja

注3：2008年にEU主導で設置された電子図書館、ヨーロッパ各国の図書館・美術館・博物館・フィルムライブラリー・大学・研究機関が所蔵する書籍・絵画・写真・映画などをデジタル化したデジタルアーカイブで構成される。

参照：(<https://kotobank.jp/word/%E3%83%A8%E3%83%BC%E3%83%AD%E3%83%94%E3%82%A2%E3%83%8A-1715735>)

注4：1990「栄光の[LIFE]展」図録 p201

ニコン

動画撮影時の使いやすさを追求し、「ニコン Z シリーズ」最小・最軽量を実現、Vlog 撮影に最適な APS-C ミラーレスカメラ「ニコン Z 30」を 8 月 5 日に発売

株式会社ニコンイメージングジャパンは、「ニコン Z マウント」を採用した APS-C (DX フォーマット) ミラーレスカメラ「ニコン Z 30」を 8 月 5 日に発売しました。

「Z 30」は、「ニコン Z シリーズ」で最小・最軽量となるボディに加え、バリエーション豊富な液晶モニターを搭載、動画を記録していることがひと目でわかる「REC ランプ」の採用や、動画最長記録時間 125 分対応などにより、Vlog をはじめ、日常の撮影からこだわりの撮影までの幅広いシーンでの動画撮影に適したミラーレスカメラです。

「ニコン Z 7」に採用した画像処理エンジン「EXPEED 6」と「ニコン Z fc」に採用したイメージセンサーを搭載。NIKKOR Z レンズと組み合わせることで、解像感のある優れた描写性能を実現します。

また、「Z 30」は動画撮影に配慮したボディ設計など、使いやすさを追求し、ミラーレスカメラを初めて使うユーザーでも簡単に映像表現を楽



しむことができる 1 台です。さらに、多彩な表現が可能な「Creative Picture Control」や、4K UHD/30p 動画、スローモーション動画など、よりこだわった映像表現にも挑戦できる機能を搭載したミラーレスカメラです。

【問い合わせ先】

株式会社ニコンイメージングジャパン
ニコンカスタマーサポートセンター
ナビダイヤル：0570-02-8000
<https://www.nikon-image.com>

ケンコー・トキナー

トキナー、シネマレンズのエッセンスを取り入れたマニュアルレンズ「SZ 33mm F1.2」を発売！

トキナー交換レンズの新製品として「SZ 33mm F1.2」を発売いたしました。マニュアルフォーカスの APS-C フォーマット・ミラーレスカメラ用レンズ

で、ソニー E マウントまたは富士 X マウントのカメラに対応します。



金属鏡筒の電子接点がないマニュアルフォーカスレンズで、幅広いフォーカスリングと、同等の太さの絞りリングを備えています。

これは、映像表現用として製造されている、トキナーのフラッグシップシネマレンズ「VISTA」の操作系の考え方を取り入れたもので、ピントのみでなく、絞りもトルク感のあるリングにより明るさ調整として使える、という考え方によるものです。もちろん、絞りはクリックがないため、シームレスに回転できます。

焦点距離 33mm は、フルサイズ換算で 50mm 標準レンズ相当となるもので、動画作品や写真作品用として、最も使いやすい焦点域として製品化しました。F1.2 という大口径で、開放から口径食が少ない美しいボケを実現。さらに絞り羽根は 11 枚と多く、絞りで被写界深度を調整している状態でのボケも丸く美しくなっています。受注生産の製品ですが、価格もメーカー希望小売価格（税別）66,000 円と手頃な価格で手に入るシネマレンズとして、ご期待いただけるものです。

仕様：焦点距離：33mm、明るさ：F1.2～F16、レンズ構成：7 群 9 枚画角：48° (APS-C)、大きさ：87.2mm × Φ 71mm (ソニー E マウント) 87.5mm × Φ 71mm (富士 X マウント)、重さ：605g、フィルターサイズ：62mm、最短撮影距離：0.5m、最大撮影倍率：1:13：フォーカス方式：全体繰り出し式・マニュアルフォーカス、絞り羽根：11 枚、対応マウント：ソニー E、富士フィルム X。

【問い合わせ先】

株式会社ケンコー・トキナー
広報・宣伝課 田原栄一
TEL：03-6840-2970
メール：etahara@kenko-tokina.co.jp
<https://www.kenko-tokina.co.jp/>

ソニー

新世代のベーシックモデル、フルサイズミラーレス一眼カメラ『a7 IV』、世界最小・最軽量^{*1} 大口径標準ズームレンズ G マスター™ 『FE 24-70mm F2.8 GM』

【a7 IV】

新開発の有効約 3300 万画素の 35mm フルサイズ裏面照射型 CMOS イメージセンサー Exmor R® (エクスマーアール) を搭載し、高解像とともに拡張 ISO204800 の高感度を実現。また、α™ (Alpha™) シリーズのフラッグシップ機である『a1』にも搭載されている従来比最大約 8 倍^{*2} の高速処理が可能な画像処理エ



ンジン BIONZ XR™ (ピオンズエックスアール) や、AI を活用して高速・高精度・高追従に被写体をとらえる AF (オートフォーカス) 技術など、ソニーの最先端のカメラ技術を凝縮した新世代のベーシックモデルです。

製品情報：

https://www.sony.jp/ichigan/auniverse/special_a7M4/?s_pid=jp/_ichigan/products/ILCE-7M4/_a-universe/_special_a7M4

【FE 24-70mm F2.8 GM】

超高度非球面 XA (extreme aspherical) レンズを含む最新の光学設計などにより、G マスターならではの優れた解像性能をさらに向上させつつ、新開発の 11 枚羽根の円形絞りと球面収差の最適化などにより、なめらかで美しいボケ描写を実現します。また、ソニー独自の高推力な XD (extreme dynamic) リニアモーターやフローティングフォーカス機構などにより、従来^{*3} と比べてズーム中の AF 追従性能が約 2 倍向上しています。さらに、最新のレンズ設計技術により、快適な撮影を実現する操作性、静粛性、信頼性を徹底的に追求しながらも、従来機種から約 2 割小型軽量化^{*4} しています。

- ※1 2022 年 4 月 27 日広報発表時点。オートフォーカス対応フルサイズの 24-70 mm F2.8 標準ズームレンズにおいて。ソニー調べ。
- ※2 『a7 III』搭載の BIONZ X との比較において。ソニー測定条件。
- ※3 『FE 24-70mm F2.8 GM』との比較。
- ※4 『FE 24-70mm F2.8 GM』と比較して、質量約 20% 減の約 695g、体積約 18% 減。

製品情報：

<https://www.sony.jp/ichigan/products/SEL2470GM2/>

【問い合わせ先】

ソニー買い物相談窓口 0120-777-886 または 050-3754-9555 月～金 9:00～18:00 (祝日・年末年始除く)

チャットでのお問い合わせ：

<https://www.sony.jp/support/ichigan/inquiry/chat.html>

シグマ

Artラインに2本の大口徑 F1.4 の広角レンズが登場。持てる技術を全投入、最高の光学性能を発揮する「星景レンズ」の新しい基準「20mm F1.4」。星景撮影にも十分対応できるクラス最高レベルの光学性能を備えた「24mm F1.4」

この度 Artラインに2本の大口徑 F1.4 の広角レンズが登場しました。最高の光学性能と豊かな表現力を目指す SIGMA Artラインの代名



詞ともいえる F1.4 シリーズ。なかでも開放 F 値 1.4・超広角 20mm という SIGMA だけに存在する*レンズをミラーレスに最適化した SIGMA 20mm F1.4 DG DN | Art は、クリアでシャープな画づくりを第一に掲げ、抜群の光学性能とコンパクト化を実現しました。開放から画面の隅々まで「点が点に写る」高い描写力は、光量の少ない環境下で無限遠にある小さな光源を捉える星景撮影において威力を発揮します。さらに、最新の光学設計と高精度に加工された大型の両面非球面レンズの採用により、高い光学性能と同時に 20mm F1.4 でありながらフロントフィルターの取り付けも可能に。リアフィルターホルダーとの併用もでき、大口徑超広角レンズの表現の幅を大きく広げます。コンパクトなレンズボディには本格的な星景撮影はもちろん、様々な撮影シーンを想定した新機能を十分に備え、理想の 20mm F1.4 をかたちにしました。

SIGMA 24mm F1.4 DG DN | Art は、Art F1.4 の圧倒的な光学性能と 24mm という汎用性の高い画角を、コンパクトなボディに凝縮した大口徑広角レンズです。開放 F 値 1.4 の明るさながら、ミラーレス専用設計によりレンズ構成や各種パーツ配置を最適化、Art F1.4 を冠するに相応しい高性能と小型・軽量ボディを両立させました。あらゆる撮影シーンを想定し、サジタルコマフレアをはじめとする諸取差を徹底的に抑制、周辺部までクリアな描写を可能にしています。要求の厳しい星景撮影にも存分に活用できるだけの光学性能と、Artライン共通の豊富なスイッチ類に加え、リアフィルターホルダーや新搭載の MFL スイッチを含む必要十分な機能、幅広い用途に対応できる汎用性を兼

ね備えました。SIGMA の 24mm F1.4 DG DN | Art が「日常使いできる星景レンズ」という新しい楽しみ方を可能にします。

※ 35mm フルサイズをカバーするミラーレスカメラ用 AF 交換レンズとして(2022年8月現在、当社調べ)

・20mm F1.4 DG DN | Art
希望小売価格(税込)：152,900 円

・24mm F1.4 DG DN | Art
希望小売価格(税込)：132,000 円

【問い合わせ先】

株式会社シグマ

担当：カスタマーサポート部

プロサポート課 桑山輝明

TEL：044-989-7436

メール：spsinfo@sigma-photo.co.jp

<https://www.sigma-global.com/jp/special/i-series/>

OM デジタル ソリューションズ

高性能とコンパクトさを両立した「OM SYSTEM OM-1」と新たな PRO レンズ 2 本を発売

OM デジタルソリューションズ株式会社は、小型軽量システムによる高い機動力に高画質と高性能を兼ね備えた「マイクロフォーサーズシステム規格」準拠のミラーレス一眼カメラ「OM SYSTEM OM-1」を 2022 年 3 月 18 日に発売しました。本機は新開発の「有効画素数約 2037 万画素裏面照射積層型 Live MOS センサー」と、従来比約 3 倍の高速化を達成した最新の画像処理エンジン「TruePic X (トゥルーピク エックス)」を搭載。「M.ZUIKO DIGITAL」レンズの高い描写性能を余すことなく引き出し、当社史上最高の解像感と、暗部から明部までの豊かな階調表現を実現しています。高性能な手ぶれ補正を備え、「5 軸シンクロ手ぶれ補正」時で最大 8 段、ボディ単体で最大 7 段の補正効果を実現、三脚を使用するようなスローシャッター時でも手持ち撮影が行えます。また防塵・防滴性能も保護等級 IP53 に向上し、さまざまな環境下で快適に使用できます。

「OM SYSTEM OM-1」と

同時に 2 本の PRO レンズを発表、3 月 25 日に発売しています。大口徑の標準



ズームレンズ「M.ZUIKO DIGITAL ED 12-40mm F2.8 PRO II」は、従来製品でも定評の高かった優れた描写性と近接能力を継承し、さらにフレアの発生を大幅に低減、クリアで抜けのよい写りを実現しました。コンパクトな望遠ズームレンズ「M.ZUIKO DIGITAL ED 40-150mm F4.0 PRO」は、沈胴機構を採用することで F 値固定の 300mm 相当までの望遠ズームレンズとして世界最小最軽量となる全長約 99.4mm (使用時は約 124mm)、質量約 382g を実現しました。近接撮影能力にも優れズーム全域で最短撮影距離 70cm を実現、望遠端では 35mm 判換算 0.41 倍のクローズアップ撮影が可能になります。両レンズとも、保護等級 IP53 に進化した防塵・防滴性能と -10℃ 耐低温性能を備え、さらに最前面のレンズに撥水・撥油・防汚に加え、摩擦低減の効果もあるフッ素コーティングを採用、汚れがついてもブロー等で簡単に除去できるなど、アウトドアでのハードな使用にも対応します。

【問い合わせ先】

OM デジタルソリューションズ株式会社
OM SYSTEM PRO SERVICE

担当：鳥居

TEL：03-3466-2951

(10：00～18：00 火・水定休)

<https://www.olympus-imaging.jp/>

新規賛助会員

・株式会社岡本印刷

愛知県刈谷市泉田町城前 173-1

【問い合わせ先】

担当：岡本浩孝 TEL：0566-21-6000

・ロカデザイン企画株式会社

東京都練馬区立野町 16-28

取り扱い商品

kani フィルター / Leofoto、など

【問い合わせ先】

東京都武蔵野市吉祥寺本町 2-11-13-905

担当：伊藤公彦 TEL：03-6339-1284

・株式会社ワイドトレード

埼玉県川口市南鳩ヶ谷 5-17-12

取り扱い商品

Leofoto など

【問い合わせ先】

担当：上田咲佳 TEL：048-430-7456

(構成 / 出版広報委員・川上卓也)



◆浅井秀美 (1993年入会)

昭和51年(1976)1月某日、日本中央競馬会内で仕事をしていると、田沼先生が競馬の撮影に来られた。帰り際、私の初個展、新宿ニコソラソでの開催ハガキを「お時間がありましたら、よろしくお願ひ致します」と、お渡しした。すると、後日スタッフ4~5人を伴って見に来てくださった。そして有りがたいアドバイスを頂き、「こんな事務所に遊びにきなさい」と、名刺を下された。後日連絡しパレスサイドビルの事務所に伺うと、4~5人のスタッフと忙しそうに働いていて、何か圧倒され早々に失礼した。



長い間、お世話になり、ありがとうございました。(東京都港区在住)

◆荒谷良一 (2000年入会)

昨年、年末のご挨拶に伺った時の写真です。楽しそうに写真について語っておられました。私が「写真を撮らせてください」と言うと、カメラを持ってきて私に向けました。「それでは先生のお顔が撮れません」と言うと、カメラを外して笑顔を私に向けてくださいました。

先生は写真の道を情熱的に走り続けていきました。私は先生に3年間師事することができたことの幸運を大切にしていきたいと思ひます。ありがとうございました。(東京都品川区在住)



◆安藤豊 (1998年入会)

JPS創立60周年祝賀会で、受付を任された時のこと。実行委員10数名で設営も終え、開場30分前に田沼会長が訪れた。受付を見るなり「綺麗にできて



バランスが少し良くない感じだ」と一言。直ぐ会長と相談(写真)、直ぐに委員と協力して設営し直し、時間内に何とか間に合った。会長はご覧になり、満足げに頷いた。後日、田沼会長から「JPSじゃなければ、出来ないことをやるんだよ」この一言の重みを、今も噛み締めている。(茨城県神栖市在住)

◆飯田照明 (1997年入会)

JPSに入会させて頂いた1997年にランニング雑誌の企画で田沼武能さんを撮影したことを思い出します。当時パレスサイドビル内にあったサンテレフォトの事務所に伺った時に入口から写真や本、資料が山積みになっていたことに驚かされました。その奥に田沼さんがいらして早々にライターの質問にエピソードを交えて話されていましたが、私はJPS会長の撮影とあってかなり緊張していたと思ひます。皇居前でも撮りたいといつの間にか2台のカメラに望遠と標準ズームを付けて事務所を出ようとしていたので、何て身軽なんだろうと驚きました。写真を撮るには身軽でなければいけないということを示して頂いたのではないかと今でも思っています。合掌(東京都北区在住)

◆池田正一 (2012年入会)

読売新聞で2012年7月から8月に、田沼先生の写真創作活動を紹介する「時代の証言者」を執筆した。先生の信念は「写真は社会を記録し、時代を記憶する」。先生の自宅に8回も押しかけ、4時間以上もお話を伺った日もある。過去はもちろんのこと、プライベートな話もざっばらんに伺った。

連載の副題は「人間を写す」。ファインダーで見えてきた人間の営みと出会いを語ってもらったからだ。先生の笑顔が忘れられない。合掌。

(東京都板橋区在住)



◆岩永豊 (2015年入会)

田沼先生と初めてお会いしたのは30年前、JPS展の表彰式後の祝賀会

の会場でした。一般公募で受賞し田舎から上京したのですが、私の隣の席が田沼先生で、この時初めてお話しをしましたが、優しく接してくださり、以来これまで親しくご指導をいただきました。『アサヒカメラ』誌に掲載する写真を撮るため有明海を案内したことも楽しい思い出となっております。離れていますので、時々電話でお話をさせていたでいて刺激を受けておりました。今年の2月初めには長時間電話でお話ししましたが、とてもお元気な様子で今回のご逝去に驚いています。先生は写真家の地位向上に熱心に取り組まれ、大きな功績を残されました。心よりご冥福をお祈りいたします。

(佐賀県佐賀市在住)

◆大石芳野 (1972年入会)

JPS田沼元会長を偲ぶ

元会長田沼武能さん、長年にわたってお世話になり、真にありがとうございました。会長を務めておられた間に写真界の地位を広げ芸術界のなかで高めていただきました。「公益社団法人」の実現はその最たるものでしょうが写真の芸術的価値を社会に認知してもらおう努力を、他の方々とも一緒になされたことは後輩として有難いことです。また、個人的には東京工芸大学芸術学部写真学科で田沼教授の後任として、フォトジャーナリズムを学生たちに教えつつ共に学ぶことができました。大切な機会を与えていただきました。ここ数年間は「コロナが静まったら…会いましょう」という電話だけでお別れになってしまい実に悲しく思っています。ご冥福を心からお祈りいたします。(東京都武蔵野市在住)

◆大久保勝利 (2001年入会)

田沼武能先生との出会いは「よみうり写真大賞」の審査員になられた30年前からの出会いです。

1980年、福井県小浜市西津に伝わる「化粧地蔵」を取材されて、2015年「35年ぶりに取材したい」とのことで、当日の午前中、京都で地蔵盆を撮影予定になっていて、午後からだったら丁度良く、私の車で行くことになりました。

現地に到着するとすぐ取材体制に入り、浜辺で地蔵さんを洗っている子

どもたちに声をかけ、近寄りながら撮影されていました。思ったような構図にならないのか、ズボンを捲りあげ子どもたちの視線まで下がったり、洗ったお地藏さんを、灼熱の浜で干す子どもたちを寝ころんだりして、先生（85歳）は撮影されていました。砂利は火傷するような温度で危険だと思い、私は子どもたちにポーズを取るようになったら、先生は子どもたちに「やりたいようにやればいいよ」と言って粘ること数分、無事に撮影を終了しました。

「子どもたちに注文を付けて撮ることはやめた方がよい、自然体が見る人には感動してもらえる」と先生の持論を話しながら夜8時まで撮影され、「今日中に東京に帰りたい」とのことで新幹線米原駅からご帰宅。「お盆のさなか新幹線は混んでいて東京駅まで立ったまま帰ったよ」と翌朝連絡がありました。あの強朝ぶりに驚いたことが一番印象に残ります。

未だに、亡くなられたことが信じられません。本当にお疲れまでした。

合掌 (滋賀県大津市在住)

◆奥田典充 (1989年入会)

「田沼さんの思い出」

10数年前「僕はね、土門さんにも可愛がられていたんだよ…」とお話を伺って以来ずーと「木村伊兵衛と土門拳」のタイトルで田沼さん独自の語り口で書物を出して頂けないかと思い続け手紙の下書きまでしておりました。何しろお忙しいお方なので悶々とタイミングを考えている内に悲しく寂しい事になり残念無念でなりません。

ちなみに、私は1979（昭和54）年1月に結婚、12月に体調不良で帰国、恩師石井彰から田沼さんが同年秋にご結婚された事を伺いました。

(奈良県奈良市在住)

◆織作峰子 (2009年入会)

JPS入会のお話をいただいた時、師匠からの「組織に属するな」と言われていたことを話すと「関係ねえよ」と返され、会長推薦で会員となった。会うと優しい口調で「JPSもよろしくね!」と仰られていた。

写真文化発展の為に人生を捧げられ「写真の日」に旅立たれるなんて流石です。心からご冥福をお祈りします。

(東京都港区在住)

◆上山益男 (1982年入会)

1990年、第15回JPS新潟巡回展

が懐かしいです。イベントとして田沼武能・木村恵一・上山益男のトークショーでした。

1999年、私の主宰する写真クラブの創立写真集に田沼JPS会長から「良き指導者を得て、その成果を期待している」とお祝い文をいただき今年で23年継続中です。

2015年、『1996年 - 2015年、写真人生50年 上山益男写真集』には、「これから次なるステップに入り80年に向けて挑戦してほしい」と序文をいただきました。

2020年、田沼武能氏 文化勲章受章を祝う会においては奥さんと壇上にも上がってもカメラを放さない姿には心から「写真人生バンザイ!」と言わせて下さい。(新潟県新潟市在住)

◆岸野亮哉 (2010年入会)

地藏盆の撮影にお越しになった名誉会長

2014～2016年の8月、計3回、私が副住職を務める寺と近隣地域の地藏盆を田沼会長（当時）が撮影なさった。寺では1日に約200人の子どもが参加。境内や本堂は人で溢れ返る。私は法要や数珠回しを執り仕切った。

名誉会長は雰囲気溶け込みながら撮影なさっている。ピングゲームのときには隣の子どもからゲームのカードを渡してもらっていた。

2017年春、私は脳出血を発症。秋に退院したが、高次脳機能障害や視野欠損の後遺症が残った。「社会復帰は無理かも」と覚悟したとき、写真集『地藏さまと私』が届いた。

田沼名誉会長が撮影なさった全国の地藏盆のようすが納められており、私の姿もある。拝読し前向きになれる。翌年の地藏盆は復帰できた。

(京都府京都市在住)

◆木下 健 (1985年入会)

NGO活動を支援してくれた田沼武能さん

1979年に、私は、友達の子どもた

ちをつれて、田沼武能さんの写真展を見に行きました。それが、



田沼さんとの最初の出会いでした。それから6年後の私はJPS入会の時の推薦人に田沼さんになってもらいました。そして私は、田沼さんの、世界の子どもの写真の影響もあり、アジアの子どもの識字教育を支援するNGOを続けてきました。田沼さんは、それを理解し、支援もしてくれました。そのNGO活動を2回も、JPSの会報で紹介してもらったのは、田沼さんが、私を推薦してくれたからです。ご冥福をお祈りいたします。

(東京都八王子市在住)

◆後藤 剛 (2016年入会)

初めてお見かけしたのはJPSの企画展(1995)。誰に対しても物腰柔らかかでした。入会后、関西地区委員時代には

度々お目にかかり、我々との歓談が深夜に及ぶことも。それは普段、接する機会の少ない地方会員への思いやりだったと信じています。

米寿、文化勲章の両祝賀会の写真をお送りすると、頂いた札状には「記録になります」。今とってみると、日本写真保存センターの設立に尽力された田沼先生からの遺言のようにも思えます。

(兵庫県西宮市在住)



◆小松健一 (1985年入会)

本土復帰50年を迎えた沖縄から三週間ぶりに帰宅すると田沼武能さんから一通の葉書が届いていた。いつもの少し丸みをおびた田沼さんの文字である。旅立つときに発行前の拙書『琉球OKINAWA』の見本を送っておいたが、そのお礼と感想が記されていた。

「写真集の出版おめでとうございませう。たゆまぬ努力感心いたします。OKINAWAは数々の日本の問題を圧縮し存在する島、五十年の歴史が詰まった写真集、すごい。静かに見える島民たちの心の中の怒りが写しこまれており、小松さんの芯の強さが感じられます…」と綴られてあった。



復帰50年たっても何ら変わっていない沖縄の現状と島人の心情を鋭く捉えていることに驚いた。そしてうれしかった。近く電話でこの気持ちを伝えようと思っていた矢先の6月1日。あまりにも不意に逝ってしまった。僕が師からの葉書を受けてからわずか一週間後の事であった。

梅雨満月金網の鳥ひかり始む 風写合掌
(埼玉県朝霞市在住)

◆小宮広嗣 (2015年入会)

田沼先生に初めてお会いしたのは18歳のころで既に30年近くが経とうとしている。これまで度々会う機会に恵まれ、会う度に気にかけてもらい近況を話すことが楽しみであった。その関係は大学4年時、田沼先生のゼミ生であったことに由来している。

当時、私を含めたゼミ生は作品提出期限に間に合わず、勝手に教授室に泊まり込み、新聞を広げプリント乾燥をしたり飲み食いまでしていた。今考えると、若気の至りだったとしても少々やり過ぎだったかもしれない。もちろん、すぐバレて怒られた。

写真を見る日は厳しかった。写真家としてのあり方、写真の選びかたなど今なお金言として自分の写真人生で生きた言葉となっている。べらんめえ口調でよく言っていた「チョロスナ撮ってくるんじゃねー」(ちょっと行って撮ったスナップ写真の意) その言葉を撮影現場で思い出す。先生、小宮はおかげさまで「チョロスナ」撮らなくなりました。
(東京都墨田区在住)

◆酒井憲太郎 (2004年入会)

田沼武能氏を偲ぶ

6月1日、田沼武能全日本写真連盟会長が亡くなった。田沼氏が会長に就任する時に、全日本写真連盟事務局長だった酒井の思い出話。

2000年12月18日、東京都中央区築地の朝日新聞東京本社で、朝日新聞社長から田沼武能氏(71)に会長委嘱状が手渡された。と、『フォトアサヒ』2001年3月号に報告している。

当日は、14時に15階A会議室で囑状が授与された。15階は役員専用の階でそれなりの敬意を払ったことになる。同席したのは、福永友保映像センター所長、星野忠彦編集担当付で

後藤正次長が写真撮影を担当した。授与後、会長は5階の旧写真部、映像センターを見学した。

2001年5月23日午後2時、朝日新聞東京本社新館15階レセプションルームで全日本写真連盟2001年度理事会が開かれた。

田沼会長は「全日本写真連盟の75年の長い歴史の中で、朝日新聞以外の会長ははじめてらしいです。21世紀は変化の時代です。新聞社の写真部から暗室もなくなり、名称も映像センターとなりました。21世紀は飛躍する世紀として、心機一転していきましょう」と述べ、20年以上続く田沼会長時代をスタートした。この時、会員は18,969名だった。

(東京都豊島区在住)

◆四方伸季 (2018年入会)

初めて田沼先生とお会いした時は某フォトコンテストの入賞式典だった。その時先生は咽を悪くしたので大きな声が出せないとの事で、何と首からラジカセを紐でぶら下げて拡声器代わりにしてお話しされていたのが印象的だった。その後も仕事やコンテスト、JPSの関係などで公私でご指導頂いたが、いつもお元気で若輩者の私たちより精力的に活動されていた。



ご自宅の階段で転倒された時、手にしていた発売前のN社新製品を守るために名誉の負傷をされた時も、入院先の病院で美女と執筆資料に囲まれて笑顔だった。カメラを向けたら「こら!撮ったのならどこかで使えよ!」と笑いながら言われた。ご冥福をお祈り申し上げます。

(京都府京都市在住)

◆庄司博彦 (2008年入会)

田沼先生に感謝

ふらりと会場を訪れた人がいた。2002年2月19日の話だ。「写真から中国の子どもの笑顔が聞こえてくるようだね」と言って名簿に住所、氏名、電話番号を書いて立ち去った。

すると、会場内がざわついた。「JPS

田沼」でなく自宅まで書いてあるよ...の声に有名な田沼会長だと気づいた。

翌日、大勢の人を連れ再び富士フォトサロンに来館。「生徒さんと中国の撮影に行く」とのこと。その日からお近づきになり、その後JPSに入会。お世話になりました。

(静岡県富士市在住)



◆竹田武史 (2010年入会)

7月11日に私が企画監修をした85ページに及ぶ雑誌のグラビア特集「日本人写真家の見た中国」が刊行された。

田沼さんは「シルクロードの子どもたち」というタイトルで、愛情溢れる写真とエッセイをご寄稿くださった。2月頃から何度もご自宅に伺い、写真をお借りしたり、インタビューをさせて頂いた。入稿作業中の突然の訃報に驚かされましたが、最後までいきいきとお仕事をされていたことを皆様にご報告しておきたいと思った。尊敬する大先輩と最後の最後まで一緒にお仕事が出来たこと、貴重なお話をたくさん伺うことができたことは、とても幸運なことだった。亡くなる1週間前、原稿を確認するお電話で「良く出来ました!」と言ってくくださったのが最後となった。
(東京都板橋区在住)

◆谷沢重城 (2009年入会)

2019年9月20日からオリンパスギャラリー大阪で開催された田沼武能写真展「子供と地藏さま」の前夜にお会いすることができました。

読売新聞大阪本社写真部在籍時に、写真大賞の審査委員長を長く務められ、随分とお世話になり審査の眼力はもちろんですが、当時から写真の保存の重要性を説かれていたのが印象的でした。本当に少しの間の付き合いでしたが気さくに接して頂き只々感謝しかありません。



写真は2019年9月19日 オリンパスギャラリー大阪で。合掌
(奈良県奈良市在住)

◆土田ヒロミ (1972年入会)

田沼先生を偲ぶ

永く現役を続けることの喜びと苦しさを教えていただきました。

そして、先生は、いつの間にか私の親父(おやじ)さんになっていた。

私とそんなに年齢も離れていないのに、不思議な感情が生まれていました。ありがとうございます。

(東京都品川区在住)

◆土屋勝義 (2014年入会)

写真昭和の代表的な写真家!

いや日本の写真家の礎を作った人だ!

当日浅草で待ち合わせると!いなせな着流し姿。「土屋君に撮ってもらうんで、気張るよ〜!」田沼さんは、海外から帰国したばかり!私の撮影に付き合ってくれたもう存在だけで、写真家!「もっとこうしましょう〜」「あ〜しましょう〜」と言う私に、何を言う若造がと言う事無く!撮影に全面的に応じたくれた。

写真家の何たるもの言葉で無くご本人の姿勢・存在で教えてくれた!

撮影後、浅草名物の天井をべろりと食べた。80代なのに



凄い体力!その写真界の存在の大きさは、知っていたが、ファインダー越しの田沼さんは、「これが、写真家だよ!」と私に言ってる様だった。

私も色々な人を撮ったが、田沼武能氏と言う写真家を撮影して、「写真家人生の何ぞやを!」田沼さんの存在自体で感じた。JPS会長として長く写真界を支えてくれた実績。その事実は、今の日本の写真家達の全員にそれを教えてくれた人なのだろう。

(東京都中央区在住)

◆広田尚敬 (1967年入会)

集まるときはいつも片隅にいる私ですが、田沼先生のときは、手招きされたわけでもないのに、引き付けられるように、ごく自然にお近くに寄っていたようです。

『武蔵野』写真展のパーティーのときも、いつの間にか一番前、小さなカメラでスナップさせていた

きました。心からご冥福をお祈りいたします。



(神奈川県横浜市在住)

◆三好和義 (2004年入会)

田沼先生の思い出

田沼先生と最初にご一緒したのはエプソンフォトグランプリの審査の場でした。以降10年以上にわたりお付き合いいたしました。それから数年後には別の審査の仕事も振って

いただくようになり、頻繁にお会いする機会がありました。

写真界のレジェンド。先生とお話

するのは戦後写真史の授業を受けているようなものでした。土門拳、木村伊兵衛が生きている、そんな感覚になる貴重な時間。僕にとっては永遠の時間になりました。

(東京都江東区在住)



◆八木祥光 (会友)

ありし日の田沼夫婦

写真は2019年7月4日、四ッ谷のポートレートギャラリーで開催の八木祥光「時のレリーフ」写真展オープニング会場にて、

田沼さんのファンと談笑される田沼夫婦を撮影したものです。

(愛知県豊橋市在住)



◆渡部晋也 (2006年入会)

田沼武能さんとの想い出

事務局でお目にかかってご挨拶すると、気さくに応えてくださる田沼さん。実はずいぶん昔に私の叔父を撮っていたことがありますが。

正しくは作家の石川淳氏を今や伝説となった日本橋の寿司店「すし春」で撮影した写真に写り込んでいるのですが、寿司職人だった叔父は、寿司界の天皇と謳われた藤本繁蔵の弟

子だったので、その関係で「すし春」のツケ場に立っていたのです。

雑誌『オブラ』に掲載されたこの写真を見た私は、JPSの事務局で田沼さんにこの写真をプリントしていただけないかとお願いしました。すると撮影したときのことも憶えていらっしゃる「そのうち探してやるよ」と気さくにお返事頂きました。

よく考えればとんでもないお願いですが、嫌な顔ひとつされず、さらにいろいろな現場での撮影秘話を聞かせてくださいました。本当にありがとうございます。

(千葉県習志野市在住)

(ご投稿いただいた原稿は、原文のまま50音順に掲載しました。出版広報委員会)



「田沼先生おつかれさま、そしてありがとうございます」

6月1日、田沼武能名誉会長は長い現役生活に幕を下ろされました。

我われ写真家の撮影後の挨拶「おつかれさまでした」でお別れしたいと思います。田沼さんは、単に写真の表現面ではなく、写真家としての矜持をご自分の生き方で示してくれた先生です。

会長をお辞めになった後、出版広報委員会の担当理事に就任された時期がありました。田沼さんが担当理事になる、とのことで委員は緊張しましたが、当時の小池編集長と委員達を信頼し、温かく見守っていただき、思い通りの編集作業ができました。

写真は2019年の秋、文化勲章を受勲された時の出版広報委員との記念撮影です。田沼さんは、何とあんなパンをもっているのです。田沼さんらしい微笑ましいお姿です。

おつかれさまでした。そしてありがとうございます。

出版広報委員会担当理事・伏見行介

セミナー研究会レポート

◆2022年度第1回技術研究会報告◆

～ Digital Infrared Photography ～

デジタルで撮るシュールな赤外線写真の世界

2022年5月29日(日) 13:30～15:00

東京都写真美術館 1F スタジオ

参加者：20名 講師：田村拓也(会員)

2022JPS展東京展最終日の5月29日(日)に東京都写真美術館 1F スタジオに於いて開催した。

講師はJPS会員で、10年程ライフワークとしてデジタルカメラを使った赤外線写真に取り組んでいる田村拓也氏。

赤外線写真は日頃から熱心に創作活動をしている方も多く聞かすが、一般的ではない技術の講義であり、また受講料を1,500円にした事で、応募者数に不安があったが、定員25名に対し20名が参加し、新潟県など遠方からの参加もあった。会場では講師の用意した赤外線写真用に改造した10台以上のデジタルカメラを興味深く眺めたり、触ったりしていた。



冒頭は講師の作品を会場内の白壁面に4Kプロジェクターで投影し解説を行った。赤外線写真の持つ独特のトーンを最新の高精細プロジェクターで大きく投影することで、赤外線写真を知らない参加者も、その魅力を知ることとなった。

次に赤外線写真の概要や通常のデジタルカメラでの撮影方法、IRフィルターを除去した改造カメラでの撮影方法等をパワーポイントで詳しく解説した。更に窓を開けて外の木立に改造デジカメを向け、ライブビュー映像を壁面に投影した。まずは可視光線も取り込むフルスペクトラムでの映像を見てもらい、次に可視光線をカットするフィルターを装着し、赤外線だけの映像に切り替えた瞬間、場内はどよめきが溢れた。葉緑素を沢山含む新緑の葉は白く輝き、それまで講義で耳にしていたスノー効果をスタッフも含め、会場にいる全員が体感した。また複数のフィルターを用意し、取り込む波長による見え方の違いも大いに参考になった。セミナー90分は中だるみもなく終了し、個別に質問をする受講者もいた。

今講座を通じて赤外線写真愛好家が増え、写真表現の幅が広がれば何よりである。終了後、参加者はJPS展招待券で地下展示室の2022JPS展を鑑賞した。セミナーと合わせて写真表現を学ぶ1日になったと思う。

(記・撮影/今井孝弘)

◆国際交流委員会ウェブサイト企画◆

「表現者たち」

新型コロナウイルスの感染拡大で、講演会などの形態の企画開催が難しくなった。そこでウェブサイト上で、国際的な関心や共感を呼ぶテーマに取り組む写真家とその作品を紹介している。JPSホームページ「表現者たち」の記事から抜粋して紹介する。

Vol.8

「ジャンルを越えてリアルを追い続ける」

—マーク・エドワード・ハリス氏の世界—

企画・コーディネイト・翻訳 増田雄彦、
協力・石井真弓、佐藤仁重、中村恵美

コロナ禍による緊急事態宣言下の開催となったTOKYO 2020オリンピック・パラリンピック。オリンピックの開会式では68,000人収容可能な国立競技場に観客の姿はなく、大会関係者約900人のみ。米国の写真家、マーク・エドワード・ハリス氏は、アリーナの選手たちと会場が一体化した一瞬を見逃さなかった。



各界著名人の TOKYO 2020 オリンピックの開会式 2021
ポートレートや、年7月23日 © Mark Edward Harris

環境の変化にさらされる生き物たち、人と大自然の一体感を表現した作品が目を引きまします。地政学的な見地から、各国との交流が少ない北朝鮮やイランにも足を運び人々の日常を記録しています。若いころから日本文化に魅了され、日本の温泉の神秘さをテーマに取材したフォトエッセイは、外国人ならではの着眼点とユーモアを感じさせます。新型コロナウイルス感染の拡大するなかで開催されたTOKYO 2020オリンピック・パラリンピックの取材は、米国『Newsweek』誌に6ページの特集記事として、写真と文章が掲載されました。

【プロフィール】

カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校(CAL STATE LA)を写真／ドキュメンタリー史の修士号を取得して卒業。マップ・グリフィン・ショーや様々なテレビ局、映画会社のスチール写真撮影を担当し、プロとしてのキャリアをスタートさせた。1986年に番組



が終了すると、4か月間の太平洋横断と東南アジア、中国、日本への旅に出発。この旅で撮影された写真でドキュメンタリー写真家として注目を集めるようになった。その後、7大陸100か国以上で撮影取材。

Vol.9

運命の「#7」に導かれて

～「ナバーム弾の少女」を撮った報道写真家 ニック・ウト氏～
インタビューと構成・ブルース・オズボーン
翻訳・井上佳子、編集・秋山哲也、協力・増田雄彦

ニック・ウトが、裸でナバーム弾爆撃から逃げるキム・フックの写真を撮影してから、今年で50年となります。

この写真は撮影した翌日に世界中の新聞の一面として掲載され、ピューリッツァー賞も受賞。20世紀で最も忘れられない写真のひとつとして、世界中の人々に平和の大切さを訴え続けています。



ベトナム・チャンバン村で、1972年6月8日 ニック・ウト撮影/AP/AFLO



ニック・ウト氏 © Mark Edward Harris

Vol.10

ボーダーで共存できる世界を目指して

渋谷敦志
構成・石井真弓、企画・佐藤仁重

写真家として30年間、世界90か国以上を旅して撮影する渋谷敦志さんは、世界に存在するボーダー（境界線）、そして、そこに生きる人々をテーマに撮影してきました。戦争の被害者が身を寄せるアフリカやタイ国境の難民キャンプ、東日本大震災の被災地現場などに足を運び続けながら、心の内面が作り出すボーダーへの気づきがありました。そしてその向こう側にいる人びとと、写真というコミュニケーションを通して分かり合い、共存できる世界を作る役割になりたいと語ります。そのためには消費される写真ではなく、見る人の心を揺らす写真を撮ることが大切という渋谷さんの視点をご紹介します。



ウガンダ北部の難民キャンプで撮影した南スーダン難民の少女 2017年 © 渋谷敦志

戦場写真家に憧れて

写真家になろうと思ったのは17歳のときです。戦場写真家・一ノ瀬泰造の『地雷を踏んだらサヨウナラ』を読み、これだ!と思ったのです。「写真家になりたい」ではなく「写真家になる」と、不思議なほどはつきりと。たまたま父親がもっていた一眼レフカメラ「EOS1000」がぼくの背中を押すかのように語りかけてきました。

「これを手にとって外へ飛び出せ。世界に触れる」と。ただ当時は、写真への興味よりは冒険心や好奇心のほうが強く、カメラさえあれば、どこにでも行けるんじゃないかという思い込みがありました。

ブラジルで見つけた写真の道

もうひとつのターニングポイントとなる出会いは、ブラジル人写真家、セバスチャン・サルガドの作品世界との出会いです。大学2年の時、大阪でサルガドの写真展『WORKERS 人間の大地 労働』を見たときの衝撃は、いまでもありありと思い出すことができます。写真というメディアが持つ真の力に初めて触れた原経験でした。その翌年ブラジルに渡航し、日系ブラジル人で移民や国籍法の専門弁護士、二宮正人先生の事務所で働き、移民や難民の問題に関心を深めることができました。そしてブラジル各地を旅して写真を撮りました。

【プロフィール】

渋谷 敦志(しぶや あつし)
写真家。1975年大阪生まれ。高校時代に一ノ瀬泰造の本に出会い、報道写真家を志す。大学在学中、1年間ブラジルの法律事務所働きながら本格的に写真を撮り始める。1999年にホームレス問題を取材したルポで国境なき医師団主催MSFフォトジャーナリスト賞を受賞。それをきっかけにアフリカ、アジアへの取材を始める。

著書『今日という日を摘み取れ』『まなざしが出会う場所へ—越境する写真家として生きる』『回帰するブラジル』『希望のダンス—エイズで親をなくしたウガンダの子どもたち』『みんなたいせつ—世界人権宣言の絵本』など。第4回笹本恒子写真賞受賞(2021年)。2022年8月に、世界の子どもたちがひたむきに学び生きる姿、その社会背景を写真とともに紹介する『僕らが学校に行く理由』(ポプラ社)を出版。



JPS ブック レビュー

協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載致します。
(2022・1月～7月)

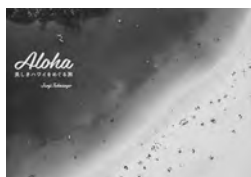
- ①発行所 ②発行年月
③サイズ(タテ×ヨコ)、頁数
④定価 ⑤寄贈者
⑥電子書籍ストア



浪江町津島 風下の村の人びと

森住 卓

- ①新日本出版社 ②2021年10月
③21×14.8cm、160頁
④2,200円 ⑤発行所



Aloha 美しきハワイをめぐる旅

高砂淳二

- ①パイインターナショナル
②2022年2月 ③20.5×29.7cm、
144頁 ④2,400円 ⑤高砂氏



カムイの生命 鼓動する野生

山本純一

- ①北海道新聞社 ②2022年3月
③21.7×30.4cm、96頁
④3,000円 ⑤山本氏



熊を撃つ 西野嘉憲

- ①閑人堂 ②2022年2月
③29×22.5cm、144頁
④3,600円 ⑤西野氏



丹地敏明流 感じて撮る写心道

太田有美子

- ①日本写真企画 ②2022年1月
③21×14.8cm、184頁
④1,500円 ⑤太田氏



花嫁のアメリカ [完全版]

江成常夫

- ①論創社 ②2022年3月
③18.8×13cm、650頁 ④3,600円
⑤江成氏



南極観測隊

宮嶋茂樹

- ①JCIフォトサロン
②2022年3月 ③24×25cm、
31頁 ④1,000円 ⑤発行所



空鉄 諸国鉄道空撮記

吉永陽一

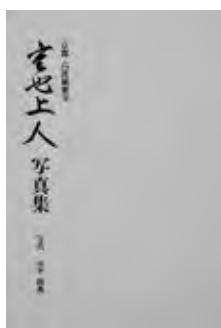
- ①天夢人 ②2021年10月
③25.7×18.2cm、144頁
④2,200円 ⑤吉永氏



鉄道趣味人の世界

池口英司

- ①交通新聞社 ②2022年2月
③17.2×10.8cm、240頁
④900円 ⑤池口氏



京都 六波羅蜜寺 空也上人写真集

小平尚典

- ①東洋美術印刷 ②2022年3月
③29.5×21cm、48頁
④10,000円 ⑤小平氏



Hana Recipe

今井しのぶ

- ①日本写真企画 ②2022年4月
③21.7×21.5cm、32頁
④2,500円 ⑤今井氏



最新版 列車で行こう!
JR 全路線図鑑

櫻井 寛

- ①世界文化社 ②2022年5月
③25.8×18.8cm、384頁
④3,600円 ⑤発行所



神々の水系

高橋宣之

- ①高橋宣之 ②2022年4月
③27.5×30cm、96頁 ④-円
⑤高橋氏



裏千家今日庵の茶室建築

監修・茶道資料館、
撮影・小笠原敏孝

- ①淡交社 ②2022年4月
③25.7×18.2cm、216頁
④2,200円 ⑤小笠原氏



鯉の領域

橋本清志

- ①日本写真企画 ②2022年4月
③22×24cm、80頁 ④2,300円
⑤橋本氏



琉球 OKINAWA

小松健一

- ①本の泉社 ②2022年5月
③26.4×19.4cm、248頁
④6,364円 ⑤小松氏



Digital Infrared World
赤外線写真の世界

田村拓也

- ①田村拓也 ②2022年
③18.2×25.7cm、28頁 ④-円
⑤田村氏



羽田の今昔
写真家がみた羽田空港の100年

近藤 晃

- ①天夢人 ②2022年2月
③21×15cm、176頁 ④2,000円
⑤近藤氏



花火が写る絶景撮影術

井上嘉代子

- ①双葉社 ②2022年7月
③25.7×18.2cm、128頁
④1,900円 ⑤発行所



EF58 最後に輝いた記録

諸河 久

- ①フォト・パブリッシング
②2022年6月 ③25.7×18.2cm、
192頁 ④2,700円 ⑤諸河氏



忘れられたところ
三江併流および周辺地域に生きる

烏里烏沙

- ①minamoto ②2022年5月
③31×22.7cm、184頁
④7,800円 ⑤烏里氏



火の山にすむゴリラ

前川貴行

- ①新日本出版社 ②2022年5月
③29.2×21.7cm、36頁
④1,700円 ⑤前川氏



Aging

土田ヒロミ

- ①ふげん社 ②2022年6月
③31.2×33.5cm、84頁
④10,000円 ⑤発行所



雨のち雨 ところによって雨
秦 達夫

①日本写真企画 ②2021年5月
③19.5×13.5cm、208頁
④1,900円 ⑤泰氏



空鉄 空撮鉄道旅情
吉永陽一

①天夢人 ②2022年6月
③25.7×18.2cm、144頁
④2,200円 ⑤吉永氏



鉄道写真を始めよう！
撮影アekからスポット選びまで完全マスター 増補改訂版
監修・撮影・福園公嗣

①メイツユニバーサルコンテンツ
②2022年6月 ③21×14.7cm、
144頁 ④1,630円 ⑤福園氏



聲をきく
鈴木一雄

①風景写真出版 ②2022年7月
③23.2×30.5cm、128頁
④3,500円 ⑤発行所

寄贈図書

近藤誠宏様……………五十周年 美濃歌舞伎保存会
竹田武史様……………企画監修・竹田武史・和華 第34号
鳥谷俊江様……………伊勢 風の里 カラスの写真日記
溝口良夫様……………くるおしい都 TOKYO
JCII フォトサロン様・沖繩-アメリカ世、空へ- YS-11 誕生60周年
……………井椋直美・幕末・明治 描かれた古写真の世界
……………中村成一・水月鏡花、竹谷出・かそけきもの
PCT様……………金山正夫・越後 越中 能登半島
いき出版様……………編集・しなのき書房・写真アルバム 市川市の昭和
玄光社様……………夢無子・DREAMLESS 夢無子写真集
山陽新聞社様……………稲葉なおと・津山 美しい建築の街
東京写真記者協会様……………第62回2021年報道写真展 記念写真集
日本写真文化協会様
……………第68回全国写真展覧会 全国展フォトコンテスト作品集
日本大学芸術学部写真学科様……………LOCUS2022
日本風景写真協会様……………1061人の風景写真

風景写真出版様……………栄馬智太郎・霊峰御嶽
ふげん社様……………木原千裕・いくつかある 光の、深沢次郎・よだか
文京ふるさと歴史館様……………巻物 八景十境
平凡社様……………別冊太陽 森山大道 写真とは記憶である
九善プラネット様
……………三浦雅弘・社会を撮る！-7人のフォトグラファー
武蔵野美術大学 美術館・図書館様
……………監修・大日方欣一・大辻清司アーカイブ フィルムコレクション6
クロス・トーク/インターメディア
……………監修・大日方欣一・原弘と造型：1920年代の新興美術運動から
リコピーメーキング(株)ペンタックスリコーファミリークラブ事務局様
……………PENTAX RICOH PHOTO ANNUAL 2022-2023
東京都写真美術館様……………第14回恵比寿映像祭 コンセプトブック
……………アヴァンガルド勃興 近代日本の前衛写真
……………写真発祥地の原風景 幕末明治のはこでて
……………TOPコレクション 光のメディア
……………TOPコレクション メメント・モリと写真-死は何を照らし出すのか
日本リアリズム写真集団様……………2022年「視点」第47回展作品集
日本写真協会様……………「東京写真月間2022」図録

受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。



■「脱原発社会をめざす文学者の会・第2回文学大賞ノンフィクション部門」受賞 2022年3月11日
受賞者：樋口健二（1971年入会）
『フクシマ原発棄民 歴史の証人-終わりなき原発事故』（八月書館）に対して。



■「2022年日本写真協会賞功労賞」受賞 2022年6月1日
受賞者：土田ヒロミ（1972年入会）
『自閉空間』から今日までの作家活動を通じて、常に自身の作品を大きく上書きしながら進
化し、現在進行形の出来事として世界や社会を捉え、表現方法を先鋭化させ、土田ヒロミと
いう写真家像を更新し続けている。その若々しい活力と並々ならぬ写真への行動力に対して。



■「第9回日経ナショナル ジオグラフィック写真賞 最優秀賞 ピープル部門」受賞 2022年6月2日
受賞者：大竹英洋（2018年入会）
「アニシナベのムース狩り」に対して。



竹内 敏信 名誉会員

2022年2月27日、逝去。78歳。(1969年入会)

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

竹内敏信さんは、35ミリ一眼レフカメラを駆使し、鋭利な感覚と的確なテクニックで新しい風景写真表現を試み、写真表現の世界を一変させ、写真界の動向に大きな影響を与えました。1969(昭和44)年JPS入会、理事を10年間、副会長を4年間務め、2017(平成29)年名誉会員に推挙されました。竹内さんには協会運営に多大なるご尽力をいただきました。

私を写真家へ導いてくれた竹内敏信さんの死を悼む 樋口 健二

竹内敏信さんと初めて会ったのは彼が28歳の時だからちょうど50年となる。ニコソロンでの初個展「汚染海域-伊勢湾からの報告-」を見て衝撃を受けた。作風は風景的とはいえずばらしいドキュメンタリー作品となっていたからである。それ以後、彼とは急速に親しく付き合うようになった。当時、私は産業公害や原発、毒ガス島などのテーマと格闘しており、正に売れない写真家の存在だった。それでも彼は私の話に耳を傾け、写真も良く見てくれた。彼自身も精力的に創作活動を行い、「風景・琵琶湖」の作品展もすばらしかった。彼は後に風景写真の頂点に登り詰めていったのだが当初はドキュメンタリーに力を入れていたのである。それだからこそ、私の作品に関心を持ってきていたのである。7年間追求した「原発」の出版の話が持ち上がっているのに彼に伝えると「その写真集を俺にまかせてくれ!」と思ってもかけない言葉が返ってきた。私は即座に「まかせろ」と返答した。出版社も承諾し、表紙のデザイン、配色、本文の章立てレイアウトを見事に完成させてくれた。各紙評判も良く書評を掲載するという有難さだ。4年後、今度は「毒ガス島」写真集も竹さんの手によって話題とな

った。テレビ、新聞、ラジオ、写真展が話題となった。写真ばかりかグラフィックデザイナーの能力を身に付けていて驚く他なかった。竹さんは、私を写真家へ導いてくれた恩人である。親友とは有難いものだ。また2回の写真展レイアウトも全てボランティア精神で協力してくれた。

さて、竹さんについて私なりの思い出をつづらせてもらう。彼の写真人生は先に述べたが、モノクロームからカラーフィルムへと移行し、35ミリカメラを駆使して風景写真の世界へ入り詰めていった。全人生をかけた美の世界の表現は光輝く作品へと昇華させてゆく。その成果は作品展に始まり、作品集へと結実していった。私の所へ初写真集『天地聲聞』が、つづいて『天地光響』の2作品が届けられた。丁寧なサイン入りであった。目を見張るばかりの美の光景はすばらしいの一語に尽きる。あっ!と言う間に40冊を越す作品集が私の書棚を飾った。脳梗塞の病に倒れなかったら恐らく100冊を越す作品集を世に残したに違いない。風景写真界の頂点に登り詰めたのではと私は思う。売れない写真家の為に身を粉にして尽くしてくれたこと、生涯忘れません。竹さんの遺志を継ぐ教え子たちが羽ばたいている。安心してお休みください。合掌



白川 義員 名誉会員

2022年4月5日、脳梗塞のため逝去。87歳。(1962年入会)

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

白川義員さんは自身の写真にかける情熱と類まれな行動力に負うところが大きい。世界を股にかけての活動に対して、毎日芸術賞、芸術選奨文部大臣賞、菊池寛賞、紫綬褒章、全米写真家協会最高写真家賞などを受賞。その存在は他に類を見ない国際的な写真家として称えられています。

追悼 白川義員氏を悼む 松本 徳彦

「地球再発見による人間性回復」をテーマに約50年もの長きにわたって、世界の山々や大地を撮り続けてこられた名誉会員の白川義員氏が、郷里の愛媛県四国中央市の病院で入院加療中であったが4月5日脳梗塞により87歳で永眠された。

1953年氏は日本大学芸術学部在学中から山岳写真をカメラ雑誌に発表し、二科展に入選するなど、白と黒のコントラストの強いダイナミックな作品で写壇にデビューされた。卒業後、誕生したばかりのニッポン放送に入社、2年後フジテレビに転出する。次々とカメラ雑誌に投稿し、破竹の勢いでコンテストを総なめにし、学生仲間を驚かせた。60年写真集『白い山』を出版。62年中日新聞社の特派員として世界一周の旅に出かける。手始めがスイスで「アルプス」の撮影に入り、帰国後、作品を一般紙、婦人誌、専門誌などに売り込み、まだ海外の景観や美しい家並みを撮った写真が少なかったため、次々と写真は売れた。63年ごろから、山岳や風景だけでなく「世界の文化」「世界の文化地理」のシリーズものの依頼が増え、1年の大半を海外で過ごす売れっ子になった。次第に、「アルプス」から「ヒマラヤ」「アメリカ大陸」「聖書の世界」「中国大陸」「神々の原風景」「仏教伝来」「南極大陸」「世界百名山」「世界百名瀑」と、誰も経験したことのないテ

マへの挑戦と発展していった。写真集も世界各国で出版されるなど、勢いのとどまるところがないほどの寵児となった。

68年~70年に撮影の「ヒマラヤ」ではトラブルもあったが、大ヒマラヤ3,000キロの全貌をおさめる前人未到の仕事を成しとげた。

73年に立案した「南極大陸一周」の撮影を実行するために設立した「白川義員南極撮影探検隊事務局」で資金集めと情報収集など、大陸一周に向けての準備に精力を注ぎ93年には人類史上初めて南極大陸一周に成功した。66年オーストリア・チロルの山岳で撮影した「山の斜面を6人のスキーヤーが波状のシュプールを描きながら滑降する写真」を写真集やカレンダーで公表した。その写真の一部にタイヤの轍を合成して、グラフィック・デザイナーのマッド・アマノ氏が著作権者に無断で使用し、自動車公害を風刺したと主張した。それに対し氏は著作権者人格権の侵害だとして東京地裁に提訴。一審勝訴したが、二審の高裁で引用が認められ敗訴。最高裁では引用とは言えない。原作の無断改変、同一性保持権の侵害を認めるなど、氏の勝訴が確定し、アマノ氏が慰謝料40万円を支払うことで和解した。この16年間に及ぶ裁判で、著作権者の著作権意識を高揚させる意義があったことは画期的な出来事であった。合掌



田沼 武能 名誉会長

2022年6月1日、逝去。93歳。(1950年入会)

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1929年、東京浅草生まれ。1995年から2015年まで(公社)日本写真家協会会長に就任。主な受賞(章)は、1979年モービル児童文化賞、1985年菊池寛賞、1990年紫綬褒章、2002年勲三等瑞宝章を受賞し、2003年文化功労者顕彰、2019年に写真家として初の文化勲章受章。2020年朝日賞特別賞受賞。

公益社団法人日本写真家協会会長(1995～2015年)、一般社団法人日本写真著作権協会会長、東京工芸大学名誉教授

田沼武能名誉会長逝去! 2022年6月1日(写真の日) 山口 勝廣

写真界に多大な功績と業績を残された田沼武能氏が6月1日(写真の日)に逝去された。5月25日、日本写真著作権協会(JPCA)理事会(オンライン会議)には、JPCA会長として直接出席され、お姿もご挨拶もモニターで拝見していただけに突然の訃報に仰天したものです。

田沼さんはJPS会長として20年に及ぶ長期間会長職を全うされ、その後も写真保存センター・出版広報理事として、JPCA会長の立ち位置と併せて写真著作権と日本写真保存センター発展に尽力されました。日本写真保存センターは時代の推移に伴い設立当初の理念と目的に齟齬が生じ再考段階にあるだけに、さぞ心残りではと思えてなりません。

氏の功績や社会的評価は改めて述べるまでもありませんが、1985年菊池寛賞、1990年紫綬褒章、2003年文化功労者、2019年写真界初めて文化勲章を受章されました。

教育では東京工芸大学の名誉教授、ユニセフ親善大使の黒柳徹子氏との紛争地の子どもたち同行取材は35年に及び現地の子どもの笑顔が忘れられない様子で、「笑顔は宝ものだよ!」と語られました。また肩書や役職は、20年以上の全日本写真連盟会長など枚挙にいとまがありません。

JPSでは、任意団体から社団法人化、そして公益社団

法人化と組織改革を成し、社会的支援として、2001年9月11日、アルカイダによる貿易センタービル崩壊等アメリカ同時多発テロ事件による多数の犠牲者等を対象に、国内では2004年10月23日に発生した新潟県中越地震の被災者に対し「被災者救援写真即売会」を、2011年3月11日発生した東日本大震災では、犠牲者や被災者支援のチャリティー写真展開催等、常に先頭に立って積極的に関係機関への支援金送付に取り組まれた姿が思い出されます。

また、東日本大震災復興支援事業・写真展「生きる」を2012年9月ドイツ・ケルン市のフォトキナ会場で、「Post-TSUNAMI」展として開催、以降ドイツ国内を巡回、自然災害の脅威を世界に報じ大きな反響を得ました。

あまりにも突然の訃報に、写真界や関係団体の皆様からは、「未だに信じられない」といった声も聞かれる中、国木田独歩の『武蔵野』に触発され「田沼武能と七人の仲間たち(アマチュア写真家)」との交流は撮影行から写真展開催(アイデムフォトギャラリー「シリウス」)のようにプロ・アマの区別なく人との交流を大切にされていました。日夜写真に明け暮れた現役時代、その田沼さんが奇しくも6月1日写真の日に亡くなられるとは、最後まで写真に関わられた生涯でした。今後は不世出の写真家として燦然と写真史に名を刻まれることでしょう。心からご冥福を祈念申し上げます。

【たぬま・たけよし 略歴】

1929年、東京浅草生まれ。東京写真工業専門学校卒業。49年にサンニユースフォトスに入社して木村伊兵衛氏に師事。芸術新潮、タイムライフ囑託などを経て1972年からフリーランスとなる。ライフワークとして世界の子どもたち、人間のドラマ、武蔵野や文士・芸術家の肖像を撮り続けていた。1984年から38年間黒柳徹子ユニセフ親善大使に同行取材を続けた。

主な著書:『すばらしい子供たち』(1975朝日新聞社)、『文士』(1979新潮社)、『東京の戦後』(1993筑摩書房)、『人間万歳』(2000クレオ)、『輝く瞳世界の子ども』(2002岩波書店)、『60億の肖像』(2004日本カメラ社)、『難民キャンプの子どもたち』(2005岩波書店)、『武蔵野讃歌』(2006ネット武蔵野)、『真像残像 ぼくの写真人生』(2008東京新聞出版局)、『笑顔大好き 地球の子』(2010新日本出版社)、『トットちゃんと地球っ子たち』(2012新日本出版社)、『人間万歳 写真をめぐるエッセイ』(2013岩波書店)、『時代を刻んだ貌』(2014クレヴィス)、『東京わが残像』(2017クレヴィス)、『未来へ架ける世界の子ども』(2019クレヴィス)など。



山村 隆彦 正会員

2021年7月14日、胃がんのため逝去。64歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1992年入会)



奥村 正光 正会員

2021年12月8日、肺炎のため逝去。91歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1958年入会)



和木 光二郎 正会員

2022年3月28日、脳梗塞のため逝去。93歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1961年入会)

経過報告(2022年1月～7月)

- ◎1月21日～27日 2021年第16回「名取洋之助写真賞」受賞作品写真展(東京展) 富士フィルムフォトサロン東京 入場数3,528名
- ◎1月22日 第1回著作権研究会 PM2:00～4:00 オンライン参加数41名
○「スナップ写真の肖像権を考える」～街の写真から人の顔を消さないために～
- ◎2月4日～10日 2021年第16回「名取洋之助写真賞」受賞作品写真展(大阪展) 富士フィルムフォトサロン大阪 入場数2,769名
- ◎2月10日～ 国際交流委員会企画「表現者たち」vol.8 JPSホームページ
○「ジャンルを越えてリアルを追い続ける」-マーク・エドワード・ハリス氏の世界-
- ◎2月22日 新入会員入会資格審査会 PM2:00～4:30 JCII会議室 10名
- ◎3月7日 第53回公益社団法人日本写真家協会理事会 PM2:00～3:30 JCII会議室 19名、監事2名、欠席監事1名(リモート参加含)
○第1号議案:2022(令和4)年度事業計画書の件、第2号議案:2022(令和4)年度取支予算書の件、第3号議案:特定積立金の積立及び取崩しの件、第4号議案:資金調達及び設備投資の見込みの件、第5号議案:「公益社団法人日本写真家協会細則」一部変更の件、第6号議案:「公益社団法人日本写真家協会支払規定」一部追加及び変更の件、第7号議案:次回「周年事業」開催計画承認の件、第8号議案:2022(令和4)年度新入会員承認の件、他
- ◎4月4日 2022(令和4)年度新入会員説明会 PM1:30～4:30 JCII会議室 新入会員19名、役員・委員18名、賛助会員9社12名
- ◎4月18日 第54回公益社団法人日本写真家協会理事会 PM2:00～3:10 JCII会議室 18名、欠席理事1名、監事3名(リモート参加含)
○第1号議案:2021(令和3)年度事業報告書承認の件、第2号議案:2021(令和3)年度決算報告書承認の件、第3号議案:名誉会員推挙の件、第4号議案:第48回「日本写真家協会賞」の件、第5号議案:2021(令和3)年度会費滞納による正会員資格の喪失手続きの件、第6号議案:2022(令和4)年度第23回定時会員総会内容決定の件、他

編集後記

◎コロナ禍で活動が制限される中、今年は写真界で功績のある方がたの逝去が相次ぐ年となった。竹内敏信さん、白川義真さん、田沼武能さん、そして笹本恒子さんが8月15日に亡くなられたと知らされる。現在の協会を育て、支えて下さった大先輩方に敬意を表すると共に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。残った我われは協会の将来に向け、一層の結束を図りたい。(小池)

◎写真がほぼ100%デジタル化し、さらにここ3年弱の新型コロナ禍と写真界も大きな影響を受けています。そんな今年の6月1日写真の日、名誉会長田沼武能さんが亡くなられました。写真家初の文化勲章受章をはじめとして、その存在の大きさを今更ながら噛み締めています。今号は田沼さんの追悼特集としました。寄稿いただいた追悼文を読むと、惜しい方を失ったことを実感します。後は私達が頑張ります。天国から見守ってください。合掌。(伏見)

◎お盆に北杜市のヒマワリ畑の取材に出かけました。毎年開催されているフェスティバルは、今年は規模を縮小とのことでしたが、良いものですねヒマワリ。遠い昔の夏休みを思い出させてくれます。そろそろ新しい夏の思い出が欲しいところですが、さて何をすれば良いのやら。(池口)

◎『会報』と「JPSホームページ」での記事連携・効率化が少しずつ進行中です。ホームページ会員情報欄にて、すでに積極的にお寄せいただいている「写真展情報」に加え、「写真集出版情報」も事務局へ現物献本とともにinfoメール宛へ300字程度の紹介文をお待ちしております。(小野)

◎田沼武能元 JPS 会長が逝去された。田沼元会長との思い出は、アフリカの写真展(2013年)に見に来ていただいた時のことだ。取材に行く途中の機材の話まったリユウを預かると、あまりの重さに驚いた。アフリカの子どもたちの話は心に残り、その重さの感触は今も手に残っている。偉大な先達のご冥福を心よりお祈りいたします。合掌。(飯塚)

◎つい先日177号の編集が終わったと思ったら178号が追いかけられるようにやってきました。年に2回の発行になったとはいえやっていることは同じで楽になったというわけではない。個人的には怪我や病気に見舞われてちょっと厄介なことになったが、乗り切って行くしかない。(川上)

◎瀬戸内に自転車旅に行ってきた。広島から愛媛に入ると霊的なものを感じる。地元の人はお遍路さんを手厚く接待する。それは、お遍路さんを大師さんと見ているからだろう。お遍路さんは、自分自身ではなく、あの世とつながる接点としての立場で地を回っている。だから、接待は絶対に断ってはいけないのだと思う。(山縣)

◎8月第2週の夏休暇前、事務局関係者にも新型コロナウイルスに罹患するものが現れました。対応策として職員を休ませ在宅勤務にさせたところ、世間のコロナ拡大と相まって、来客も電話もない静かな事務局となりました。こんな経験初めてです。(事務局 杉山)

- ◎4月21日 日本写真保存センター2022年度第1回諮問委員会議 PM2:00～3:40 JCII会議室 19名(リモート参加含)
- ◎4月21日 日本写真保存センター2022年度第1回支援組織会議 PM4:00～5:00 JCII会議室 支援組織会員8社・1団体13名、JPS6名(リモート参加含)
- ◎5月7日～ 国際交流委員会企画「表現者たち」vol.9 JPSホームページ
○「運命の[#7]」に導かれて～「ナバーム弾の少女」を撮った報道写真家 ニック・ウト氏～」
- ◎5月21日～29日 第47回2022JPS展(東京) 東京都写真美術館B1F展示室 入場数2,937名 ○5月21日表彰式、作品講評会、5月27日イベント「会員写真家によるポートフォリオレビュー」
- ◎5月22日 およこ写真教室 AM10:30～16:00 東京都写真美術館1Fスタジオ 参加数10組20名
- ◎5月27日 2022(令和4)年度第23回定時会員総会 PM2:00～4:00 東京都写真美術館1Fホール 本人出席59名、代理委任2名、議決権行使書809名、計870名、外部理事5名、外部監事1名、税理士1名、名誉会員1名、賛助会員9社11名
○決議事項:第1号議案:2021(令和3)年度事業報告書及び決算報告書承認の件、第2号議案:名誉会員推挙承認の件
○報告事項:1.「2022(令和4)年度事業計画書」の件、2.「2022(令和4)年度予算書」の件、3.第48回「日本写真家協会賞」の件、4.会費滞納による正会員資格の喪失手続きの件、5.その他
- ◎5月28日 著作権セミナー 東京都写真美術館1Fホール 4回開催のべ参加数223名 ○知っておきたい写真著作権セミナー
- ◎5月29日 第1回技術研究会 PM1:30～3:30 東京都写真美術館1Fスタジオ 参加数20名
○～Digital Infrared Photography～デジタルで撮るシールド系赤外線写真の世界
- ◎6月20日 写真学習プログラム講師向け説明会 PM2:00～4:00 JCII会議室、オンライン 参加数11名、オンライン参加数9名
- ◎6月21日～26日 第47回2022JPS展(関西) 京都市美術館別館2F 入場数1,453名 ○6月25日作品講評会
- ◎6月25日・26日 著作権セミナー 京都市勤業館「みやこめっせ」大会議室 4回開催のべ参加数189名 ○知っておきたい写真著作権セミナー
- ◎7月5日～ 国際交流委員会企画「表現者たち」vol.10 JPSホームページ
○「ボーダーで共存できる世界を目指して」渋谷敦志
- ◎7月14日～20日 2022年新入会員展(東京) アイテムフォトギャラリー「リソース」出品者18名、作品数54点、入場数467名 ○「私の仕事」
- ◎7月25日 「笹本恒子写真賞」選考会 PM2:00～5:00 JCII会議室 9名
○選考・佐伯剛、前川貴行、野町和嘉 推薦候補者・17名 第5回「笹本恒子写真賞」・西野嘉徳

日本写真家協会会報 第178号(年2回発行) 2022年9月10日 印刷・発行 ©編集・発行人 野町和嘉

URL <https://www.jps.gr.jp/> Email info@jps.gr.jp 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

出版広報委員 小池良幸(常務理事)、伏見行介(理事)、池口英司(委員長)、小野吉彦(副委員長)、飯塚明夫、川上卓也、山縣 勉

発行所 公益社団法人日本写真家協会(JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCIIビル303 電話03(3265)7451(代表) FAX 03(3265)7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3丁目11番18号 飯田橋MKビル 電話03(3265)0611(代表)

雑木林の田沼さん (表紙写真) — 東松友一 (むさし野写真の会)

田沼先生に初めてお会いしたのは、1975年に出版された写真集『武蔵野の四季』の中に以前よりお会いしたいと思っていた先生のお名前があり、編集者の方をお願いして、事務所に伺ったときでした。とても緊張した事を今でも覚えています。しばらくして先生から「武蔵野を案内してほしい」とお電話を頂き、初めて一緒したのが、三芳町のそば畑でした。花が満開で大変気に入って下さり、それから武蔵野らしい場所を探しては、案内させて頂きました。撮影のときは奥様手作りのお惣菜が詰まったお弁当を持参され、私たちもお相伴にあずかりました。

先生のバッグにはフィルムカメラ、デジタルカメラ、レンズなどがたくさん入っていました。スタスタと歩き回って、若い私達が先生の後を追っていました。気に入った場所には何度も通い、暑さ寒さともいわず何時間も撮り続けるお姿は、私たちの励みにもなり、自然を撮る厳しい姿勢も教えて頂きました。

写真は2014年、狭山市の雑木林で撮影したものです。2022年1月、川島町の落日を撮りにご一緒し、富士山周辺が茜色に染まりゆく風景を眺めた日が最後になりました。

夏の日 (表4写真) — 田村拓也

デジタルカメラの普及に伴い「赤外線写真」が身近なものになりつつあります。この作品は、千葉の高滝湖にて撮影した赤外線モノクロ写真(IR850nm フィルター使用)です。赤外線を多く反射する雲はより白く、吸収する青空や湖面は黒く落ちる事でハイコントラストな描写となり夏のイメージをより強調することが出来ました。繋がれた足湯ぎボートを囲むように夏雲と強い日差しが映り込みました。

(写真展「赤外線写真の世界」、写真集『Digital infrared World』)

◆ JPS ギャラリー

瀘沽湖畔の彝族少女花花 — 鳥里鳥沙

花花は私の友人です。この写真を撮った時彼女は西昌学院の学生でした。瀘沽湖へ取材に行った時彼女に案内してもらい、この写真も撮らせてもらいました。彼女の故郷は瀘沽湖の北側で、四川省塩原県に属し、今でも母型社会の慣習が残されているモン人が居住し、ほかにプミ族、彝族も住んでいます。大学を卒業後彼女は地元のエコ局に就職しています。彼女が結婚する時は写真を撮ってあげると約束し、実現するのを願っています。

浪江町津島 — けもの物語 — 森住 卓

オレが住んでいるところは福島県浪江町津島という山の村だ。村に白い防護服を着た男が来て「逃げてください」と叫んでいた。あの日を境に人間が突然いなくなったんだ。村の入り口にはゲートが設けられ入れなくなった。この家には獣たちがつきつきやってきた。居間にはこたつがあって休む場所もある。オレはここが気に入っている。なにより雨風が凄げてありがたい。

この間、ここに住んでいたご主人様がオレのこの写真を見て、「カモシカに留守番頼んでんだ」と自嘲気味に言っていた。

池川神楽 — 高橋宣之

仁淀川の上流部に「仁淀川町」という名前の町がある。町名からもわかるように、町の中を仁淀川が流れていて、住民は川と共に生きているような町である。そんな町に古くから伝わる池川神楽がある。晩秋のころになると神楽太鼓が打ち鳴らされ、紅葉の岸辺の道を村人たちが集まってくる。やがて太鼓、

締め太鼓、手拍子が始まると清められた舞台の上に天照大神が現れる。この時舞人は神になり、観客は舞人に向かって手を合わせる。

生命の連鎖 — 山本純一

今年の3月末に刊行した「カミイの生命 - 鼓動する野生 -」に掲載した作品の中の一枚。厳冬の知床羅臼の沖合からクルーザー船をチャーターして撮影した。国後島から真っ赤に焼けた太陽が昇ると、多くの海鷲達(オオワシやオジロワシ)が、魚を求めて飛翔する。食物連鎖の頂点に立つ空の王者オオワシを、躍動感をよりリアルに表現するために60分の1秒のスローシャッター、流し撮りで撮影した。獲物を捉えた鋭い目線に、生き抜く野生の本質を垣間見ることができる。

黄金の森 — 鈴木一雄

小国町(山形県)のブナ原生林には、クロモジなどの低木が茂っている。秋にはブナと一緒に、見事な黄葉の森を形成する。この作品は、通い始めて28年目の昨年に撮影したものだ。日の出とともに街を覆っていたガスが山肌を駆け上がり、ブナ林に流れ込んだ。やがて、朝日とのコンビネーションによって、素晴らしい光景が生まれた。

太陽の軌跡 — 紀 善久

銚子は関東で一番東にあり、太陽が美しく強く感じる。銚子で太陽を見た時撮影してみたいと思った。昔、儒学の先生に「太陽の三無私」という言葉を教えていただいた。公正に万物を照らし偏ることはない。万物を覆って特定の個人のみを覆うようなことはない。この三つの意味を表すために三回の露光をあてた。

◆ FUJIFILM X ギャラリー

素顔のまま — 菊池一郎

中判カメラGFX100SとGF110mm F2、単焦点レンズでの一本勝負である。被写体の彼女は社会人1年生で、私がコーチを務める高校写真部のOBで、教子でもある。肌の描写を意識して「アスティア」モードでの撮影。撮影後、モニターで彼女に撮影した画像を見せたら「カワイイ!」と一言。「ナルシストか?」と言ったら「ふふふ…」と煙に巻かれてしまったが、とても気分が良かった一枚です。

Reflection — 田口郁明

街中を歩きながら時折、気になった景色に遭遇することがある。お店のウィンドディスプレイの前で立ち止まり眺めること数秒、窓の反射の中に重なり合う非現実の世界が垣間見えてくる。それは、都会のビルや街の看板に映る光景や、ストリートスナップでの光と影が作る風景にイマジネーションがかき立てられるのと同じなのではないか。ガラスという透明な素材が作り出す非日常の世界を追い求めています。

ゴールドアワー — 安念余志子

富山県の有名撮影スポットの雨晴海岸。女岩と男岩がある。大気が冷え込み海水との温度差が生じる日立山連峰からのぼる朝日とともに気嵐が発生する。富山在住の私でも家からは車で40分ほどかかるので毎日では行かないが、この日は天気予報を信じて早朝から出かけた。狙いどおり今季一番の気嵐が出た。右手の岩と絡めて撮影したゴールドタイムの一枚。

HCLファインアートプリントサービス



**ILFORD
CERTIFIED PRINTER PARTNER**

イルフォード 認定ラボ

作品を極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数のアーティスト用紙でご提供します。
ファインアートプリントの高い技術と知識を有する熟練のプリンティングディレクターが作品制作をサポートします。



ハーネミュレ ファインアート バライタ

深い色合い、上質な光沢と質感、広い色再現域、高い最大濃度と滑らかなグレーの階調表現で、特にモノクロ写真に最適です。



ハーネミュレ フォトラグ

精細で滑らかな面質により多目的に使える、モノクロとカラー写真のどちらにも適し、深みを感じる絵画的な作品に仕上がります。



伊勢和紙 芭蕉

滑面と粗面があり、制作意図に応じてどちらの面でもプリントが可能で違った風合いを表現できます。

〈写真は全てイメージです。〉

このほかにも条件により各種ファインアートペーパー出力の対応が可能ですのでご相談ください。

■ フォトイメージングセンター

営業課 フォトアート担当
東京都杉並区和田1-6-7
☎(03)3384-9670

■ 大阪営業部

営業課
大阪府大阪市北区万歳町3-17
☎(06)6313-2351

サービスの詳細はこちら▶
WEBからも注文できます！



Canon

make it possible with canon

The SEVEN.



捉え続ける。どこまでも、意のままに。

それが7に与えられた力。

積み重ねた歴史を背負い、新たな息吹を宿した7がここに。

APS-Cミラーレス EOS R7。

EOS Rシステムというフォーマットで生まれた新しい7は、

われわれ撮影者にどんな体験をもたらしてくれるだろう。

想像の上が待っている。

ここからAPS-Cミラーレスの未来

NEW

EOS R7

写真は進化する。EOS R SYSTEM



EOSは2019年9月に累計生産台数1億台^{※1}、交換レンズRF/EFレンズシリーズ^{※2}は2021年1月に累計生産本数1億5,000万本を達成しました。
※1 映像制作用シネマカメラを含む。 ※2 RFレンズ、EFレンズ、EF-Sレンズ、EF-Mレンズ、EFシネマレンズ、エクステンダーを含む。2021年2月3日時点。



© キヤノン EOS R7 ホームページ

canon.jp/eos-r7

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

TAMRON

Focus on the Future

28-75mm F/2.8 Di III VXD G2 (Model A063)

ソニー Eマウント用

第2世代、
「G2」へ。



NEW

28-75_{mm} F2.8 G2

for Sony full-frame mirrorless

(Model A063) ソニー Eマウント用 Di III: ミラーレス一眼カメラ専用レンズ

www.tamron.co.jp

製品の詳細情報はここから▶



PENTAX



一眼レフの未来を創る。

日本で初めて一眼レフをつくったペンタックス。

その哲学、技術、情熱のすべてを注ぎ込んで、この一台は誕生しました。

APS-Cフラッグシップモデル、PENTAX K-3 Mark III。

写真を撮ろう。

K-3 III

株式会社リコー / リコーイメージング株式会社
お客様相談センター：0570-001313 (ナビダイヤル) www.ricoh-imaging.co.jp

RICOH
imagine. change.

YOU ARE A

写真家
に
知っ
てお
いて
いた
だき
たい
著作
権
の
こと

COPYRIGHT OWNER



一般社団法人
日本写真著作権協会

〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCII ビル 403

<https://jpca.gr.jp>

【会員団体】 公益社団法人日本写真家協会
公益社団法人日本広告写真家協会
一般社団法人日本写真文化協会
日本肖像写真家協会
一般社団法人日本写真作家協会
全日本写真連盟
一般社団法人日本スポーツプレス協会
一般社団法人日本自然科学写真協会
日本風景写真協会
公益社団法人日本写真協会
一般社団法人日本スポーツ写真協会

デジタルの時代だからこそ
改変してほしくない写真もあります。
これを「同一性保持権」と言います。
勝手にトリミングされたり
勝手に合成されたりしないように
この権利は守ってください。
著作者の創作意欲を守るための権利、
著作者人格権のひとつです。
写真著作権を大切に。

2021年度小学生を対象とした「写真学習プログラム」報告

写真の楽しさ、面白さを伝える

—特別協力：富士フィルムイメージングシステムズ(株)・一般財団法人日本写真アート協会—

2005（平成17）年より始まった「写真学習プログラム」は、2019年度からレンズ付きフィルムカメラとデジタルカメラで、小学4年生以上の児童を対象に、毎年全国の小学校20クラスで実施している。

写真を撮ることで、児童の育成に必要な「物事を注意深く観察することの大切さ」を体験し、その体験から写真という記録媒体を使って「表現し、伝えること」を学んでもらっている。

写真の大切さに加え、撮影マナーも学習することで、写真を社会で幅広く活用してもらいたいという願いがある。「写真学習プログラム」は、協会の公益事業として17年間に延べ726人の会員による指導で、24,821人の児童に実施。児童が、「写真への興味を抱く」きっかけとなる事業である。

また、多くの方がたにこの児童達の作品を見ていただくため、参加児童の作品を特別企画「「PHOTO IS」小学生の眼」として、富士フィルム（株）・富士フィルムイメージングシステムズ（株）が主催する「「PHOTO IS」想いをつなぐ。あなたが主役の写真展 2022」（会場・オンライン）で展示される予定となっている。

（協力：ウエスタンデジタル合同会社、（株）ケンコー・トキナー、パナソニック エンターテインメント& コミュニケーション（株）、リコーイメージング（株））



【2021年4月～2022年3月実施校】

No.	実施校	県名	参加人数
1	近江兄弟社小学校5～6年生	滋賀県	27
2	中津市立真坂小学校6年生	大分県	13
3	立山町立釜ヶ淵小学校4年生	富山県	11
4	立山町立釜ヶ淵小学校6年生	富山県	19
5	八頭町立船岡小学校4年生	鳥取県	20
6	八頭町立船岡小学校5年生	鳥取県	18
7	橿原市立耳成小学校6年1組	奈良県	35
8	橿原市立耳成小学校6年2組	奈良県	36
9	中央区立日本橋小学校6年1組	東京都	26
10	中央区立日本橋小学校6年2組	東京都	27
参加人数合計			232



【2021 年度実施小学校児童の作品から】



近江兄弟社小学校 5 年生の作品



近江兄弟社小学校 5 年生の作品



近江兄弟社小学校 6 年生の作品



近江兄弟社小学校 6 年生の作品



中津市立真坂小学校 6 年生の作品



中津市立真坂小学校 6 年生の作品



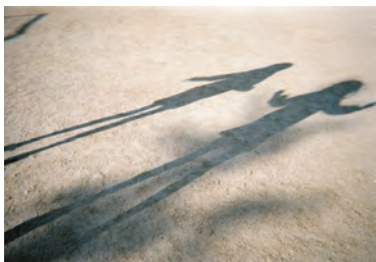
立山町立釜ヶ淵小学校 4 年生の作品



立山町立釜ヶ淵小学校 6 年生の作品



立山町立釜ヶ淵小学校 6 年生の作品



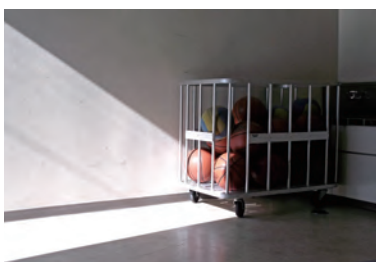
橿原市立耳成小学校 6 年生の作品



橿原市立耳成小学校 6 年生の作品



橿原市立耳成小学校 6 年生の作品



中央区立日本橋小学校 6 年生の作品



中央区立日本橋小学校 6 年生の作品



中央区立日本橋小学校 6 年生の作品

「おやこ写真教室」開催

2022年5月22日(日) 東京都写真美術館 1F スタジオ

教育推進委員会

通算3回目の開催となる「おやこ写真教室」を、2022年5月22日(日)にJPS展東京展のイベントの一環として、東京都写真美術館1Fスタジオにて開催した。昨年11月に清里フォトアートミュージアムで開催した第2回目の教室に参加されたご家族のリピート申し込みもあり、募集締め切り前に満席となった。

今回は株式会社ニコイメーキングジャパンの協力のもと、小型・軽量のミラーレスカメラ「ニコンZ 50」とキットレンズの「NIKKOR Z DX 16-50mm f/3.5-6.3 VR」を1人1台貸し出し、テーブルフォトや



好きな小物を使ってテーブルフォト撮影



親子がお互いに撮り合うポートレート撮影

親子がお互いを撮り合うポートレート撮影を体験した。数本用意したマイクロレンズの「NIKKOR Z MC 50mm f/2.8」も大人気で、レンズ交換式カメラの魅力を再認識してもらえた。

座学の会場であるスタジオ集合時から、子ども達はもちろん保護者の方がたのテンションも高く、手にしたカメラの小ささに驚きながらも、早速自分の周りの小物などにカメラを向けて、シャッターを切って楽しんでた。

座学では、講師が会場のモニターに資料を映しながら、カメラに慣れていない子どもたちに向けては、カメラの基本的な扱い方と写真の撮り方を、普段、動き回る子どもを相手に、撮影に悩んでいるだろう保護者の方に向けては、子どもを写し止める方法と、ポートレートっぽくふんわりと可愛らしく写す方法をレクチャーした。

昼ご飯休憩を挟んだ午後は、様々な小物を自由にスタイリングして撮影するテーブルフォトと、大型ストロボを使用した本格的なライティングの、スタジオポートレート撮影を順番に体験。

テーブルフォトのスペースでは、教育推進委員が各所でサポートして光の扱い方などを、ポートレートの

スペースでは撮影の仕方とともに、撮る側から撮られる側への声掛けなどの、コミュニケーション方法もレクチャーした。子ども達の自由な発想と、教えたことをすぐに実践できる柔軟かつ素直な行動力は、写真を撮る人間として、私達も見習いたいものだと感心させられた。

撮影実習後は、各自悩みながらも自分のベストショットを選び、みんなでモニター鑑賞しながらの講評会を行った。セレクトした写真と記念に撮影した家族写真は、エプソンのプリンター「EW-M873T」で印刷して、お土産として参加ご家族にお持ち帰りいただいた。普段はあまり見ることがないだろうプリンターから写真が印刷される様子を、興味深く見守る子ども達のワクワクした面持ちが印象的だった。

スマホでの撮影や、撮った写真をタブレットなどで見ることは慣れているだろう子ども達も、ファインダーを覗いて写真を撮ることや、印刷された写真を手にする体験はとても新鮮で、驚きつつも楽しんで参加してもらえたようだった。

また、カメラを構え慣れているような保護者の方がたも、一方的に撮影するだけではない、子どもと一緒に写真を撮る楽しさを体感してもらえたのだろう。また参加したいとの声が多く聞かれた。

(記/教育推進委員・水咲奈々、撮影/教育推進委員・今浦友喜)



モニターで作品鑑賞会



印刷された写真に興味津々の子ども達

おめでとうございます

当協会では、写真技術に関する発見、発明および写真文化の発展等について、著しい貢献もしくは寄与、功績のあった個人または団体に対して「日本写真家協会賞」を贈り顕彰しています。

今回の第48回「日本写真家協会賞」は、『長年にわたり光学と映像の分野で様々な製品を製造し、近年はケンコー・トキナーギャラリーをオープンするなどして、文化の面でも写真家とその活動を支援し続けてきたこと』を顕彰して、株式会社ケンコー・トキナーに同賞を贈呈します。中野区の本社にて社長の山中徹さんにお話を伺いました。

——このたびは受賞おめでとうございます。ケンコー・トキナーというと、やはり私たちはフィルターのメーカーとして、実にさまざまな製品を開発してこられたことを、まず思い浮かべます。今はプロの写真家になった者も、アマチュアの時代から、ケンコーのフィルターにはずいぶんとお世話になったものです。

山中：ありがとうございます。私どもの会社は、1957年の創立なのですが、周りのメーカーは工業製品向けのガラス製品の製造で大きな利益をあげていました。これは光学フィルターと比較すれば遥かに大きな市場があったわけですが、大手メーカーが群雄割拠する世界でもあったわけです。そのような中であって、私どもは写真用フィルターに集中することで、クオリティーを落とすことなく、価格設定についてもこれをないがしろにすることなく維持をし続けてきた。そのことが、今日に繋がっているのではないかと考えています。

——私たちが写真を撮り始めるようになった。良いカメラを持って旅に出るようになったのは、それから10年くらい後のことになるのでしょうか。日本に旅行ブームが起り、誰もがカメラを持つようになりました。

山中：それが日本の経済の拡大期と歩調を合わせていたと思います。小さなカメラではなく、少し大きなカメラを持った方が恰好いいぞと(笑)、そういう風潮になりました。その時代には、フィルターメーカーだけで18社ありました。その多くはアメリカ向けに製品を作っていました。

——そのような中で、御社が大きな市場ばかりに目を向けることなく、変わらないスタイルで製品の供給を続けられてきた理由は？

山中：お客様に損をさせてはいけない、という考え方に拠るものです。それは個人のお客様だけでなく、取引先についても同様の考え方です。そのような経緯もあって、当社はこれまでに幾つものメーカーさんと合併をさせて頂いているのですが、それも当社の技術的蓄積

を増やすことに役立っています。今はカメラがデジタルになって、もうフィルターはいらないという考え方も生まれていますが、本当にそうだろうか？完成度の高い絵作りのためには、やはりフィルターワークは大切な行程であると、私たちはそう考えています。

——自前でギャラリーをオープンさせたのは、どのような理由からでしょう？

山中：写真はコミュニケーションのためのツールです。それであれば、その場を提供したい。みんなで写真を見る場所があれば楽しいじゃないですか。そう考えて、私どもが社会に対して少しでも恩返しができたならそれで良いと思っています。

——今後の展望をお聞かせください。

山中：良いレンズとは何でしょうか？高い解像度というの

回答の一つでしょうが、恐らくそれだけが良いレンズの資質ではない。写真を見た人に、写っている人の体温が伝わってくるような、そんな写真を撮ることが出来るレンズがあれば素晴らしい。そういう考え方を忘れずに、幅広い視野をもって製品の開発を続けていきたいと考えています。

——本日はどうもありがとうございました。

第48回「日本写真家協会賞」

受賞者：株式会社ケンコー・トキナー



山中 徹さん

(株式会社ケンコー・トキナー 代表取締役社長)

(2022年7月20日 株式会社ケンコー・トキナーにて、聞き手／出版広報委員会・池口英司、川上卓也 撮影／川上卓也)



素顔のままで————— 菊池一郎
FUJIFILM GFX100S GF110mm F2



Reflection —— 田口郁明
FUJIFILM GFX50S GF63mm F2.8R WR



ゴールドアワー——安念余志子
FUJIFILM GFX100S GF100-200mm F5.6

極限まで早く、軽やかに。
想像の先へ行く。



フォトグラファー | 田中雅美 MASAMI TANAKA

新開発の裏面照射積層センサー・高速画像処理エンジンを搭載
「Xシリーズ」史上最高の高速連写・AF・動画性能を実現するフラッグシップモデル

X-H2S

- 新開発の「X-Trans™ CMOS 5 HS」センサー・高速画像処理エンジン「X-Processor 5」を搭載
- 最速 40 コマ / 秒のブラックアウトフリー高速連写が可能
- 動物・鳥・車・バイク・自転車・飛行機・電車を AI で検出できる被写体検出 AF を搭載
- 6.2K/30P や 4K/120P 4:2:2 10bit での映像記録が可能





Photo Tamura Takuya